
Gravity×Thrush ～東の地に降り立った鳥～

?月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gravity×Thrush 〈東の地に降り立った鳥〉

【Nコード】

N3267Q

【作者名】

?月

【あらすじ】

————— 気がついたらそこにいた

学校の帰り、ふと気がつくと思つ白な砂漠に立っていた。

何が起こったのかと思いきや、現れたのは蛙人間。

は、なんだって？ 女王？ 召喚？ このあたしが《能力者》？

！ てか、女王と女皇でどう違うんだよ！

元の世界には帰れないと聞かされて、冗談じゃない！ フザケン

な！！ と、元不良少女が雄叫びを上げながら人生という名の新たなレールを突き進む。

元の世界に帰りたいのかそうでないのかよく分からない、今のところ主人公の目的が今ひとつはつきりしない、そんな物語。

「だって毎日生きるので精一杯なんだよ！」

だそうです。

※ 元『迷鳥』です。

S e c t. 0 母の言葉、子の思い（前書き）

メイチヨウ
【迷鳥】

普通は生息も渡来もしない地に、台風などの偶然の機会に迷い込む鳥。

出典…広辞苑

Sect. 0 母の言葉、子の思い

「死ねよ」

そういったのは誰であろう、紛れもない、自分を産んだ母親だった。

何の変哲もない一般家庭。

唯一違うのは、父親がいないと言うだけで。

「お前、死ねばいいのに」

夕飯の時だった。

何時もと同じ食卓、同じ風景。

メインメニューはハンバーグ。

ピーマンが嫌いな私のために、わざわざ微塵切りにした物が肉の中に練りこんである。

優しい母なんだ。

何時もにこにこ笑ってて、料理もうまい。

何時もと同じように、今日こんな事があったんだ、と無邪気に笑っていた私。

そうなんだ、と母も笑っていた。

それが突然、これ。

表情は何時もと同じ、にこにこ笑顔。

「死ね」

ああ、また。

まるで話しかけるような調子で言ってくる。

一体、何があったんだ？

「お母さん、どうしたの？」

そう聞く私の声の、なんと無邪気なことか。

何かの冗談だと思ったのかも知れない。

だってそうだろう？ 真顔で言うべき言葉ではない。

「つぐみ
鵜」

母が私の名前を呼んでくれる。

いつもと同じ、柔らかくて優しい声。

ほら、やっぱり何かの冗談だったんだ。

私は満面の笑みで笑った。

「なあに、お母さん？」

「ねえ、あなた、なんで生きているの？」

私は、目の前が真っ暗になったような錯覚に陥った。

*
*
*

「死んじゃえぼ？」

ほら、今日も言ってる。
あれから八年が経った。

最初に言い始めたのがオレが九歳の時。
今オレは十七。

この八年間、彼女はずっとオレが死ぬことを望んでいた。
最初はショックだったけど、今じゃもう慣れた。
だって言うだけで、実害はないし。

「死ね」って言う以外、別に食事に毒を盛るわけでも、首を絞めてくるわけでもない。

普通に食事は作るし、学費だって払ってくれる。

「死になさいよ」

「テメエが死ね」

今じゃ挨拶代わりだ。

この八年で、オレはかなり変わった。

どう変わったかというと、まず一番わかりやすいのが一人称。

「私」なんてお上品な呼び方はせず、豪快に「オレ」。

どうでもいいけど、カタカナなのは隠されたポイントだ。

口調も男口調。

有り体にいえば、グレた。

高校に入ってからはずっかりおとなしくなったものの、中学の時はそれはひどかった。

煙草は吸うわ酒は飲むわ（薬は誘われたけど止めた）。

年齢をごまかしてバイトで稼いだ金は、全部化粧品やバックや服などに代わり、夜中に町をぶらついていて警察のお世話になったことも何度かある（お陰で数人の警察官とはすっかり顔見知りになっ

た)。

バイクに乗って走るのが趣味な人たちに、バイクの後ろに乗っけてもらったこともある。

まあ、いわゆる不良娘というやつで、当時は何度担任がすっ飛んできたことか。

母親？

あんなもの、来るわけがない。

一応連絡は行っているはずだが、一度も姿を見せたことはない。この八年でオレにとって母親とは、オレを産んで養うだけの金を稼いでくる、ただの女になっていた。

いまさら来られても迷惑なだけだ。

余談だが、学校の成績はいい。

学年で上から数えたほうが早いのだ。

余計に始末が悪い。

学校の担任は頭を抱えていた。

高校に入ってから、なんだか今までの自分が急に馬鹿らしくな
って、パツタリと遊ばなくなった。

中学の時の知り合いに絡まれるのが面倒で、わざと遠くの進学校
を受験した。

成績がいいのはここでも相変わらずで、試験のたびに先生が満面
の笑みで答案を返してくれる。

たいして勉強はしてないんだけどな。

「井垣^{いがき}さん、一緒に帰ろう！」

「ああ、いいよ」

井垣^{いがき}鵜^{づみ}というのがオレのフルネーム。

今声を掛けてきたのが、クラスメイトの……えーっと、なんつ
つたっけな。まあいいや。

基本的に人には興味がなかったため、出来るだけ関わらないようにしている。

そういうわけで、学校ではまじめでおとなしい子で通っているオレは、あちらはこちらを知っていて、こちらは相手の名前も知らないが、存在は知っているというような ” 友達モドキ ” が非常に多い。

彼らの談によると、オレは一部では有名人らしいが、興味がないので無視。

世間話をしながらの下校。

主にしゃべっているのは相手であって、オレは徹底的に聞き方に徹している。

「あ、週末さあ、よかったら一緒に買い物に行かない？ 駅前で処分セールやるんだって。えっと、処分品だからあんまりいいものはないかもだけど、でも、たまにすごくいいものが安かったりするから……どうかな？」

その ” 友達モドキ ” たちは、大抵オレに対してこういう遠慮がちな話し方をする。

クールで近づき難いイメージがあるらしいというようなことを、小耳にはさんだことがある。

「ごめん、週末はバイトがあるんだ。また今度、誘ってくれないかな」

「そ、そうなんだ。じゃあ、また今度ね」

「うん、また今度」

本当は週末にバイトなんてない。

人付き合いが面倒なだけだ。

表情を作って答えてやれば、相手はすんなりと納得する。
分かれ道に差し掛かった。

彼女とはここで別れる。

電車通学の鶴と、バス通学の彼女。

と、ここで漸く彼女の名前を思い出した。

つきがはら
「月ヶ原さん」

立ち去ろうとしていた彼女は、くるりと振り返った。

「また今度、絶対な」

そういつて笑えば、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「うん、絶対ね！」

まるで恋人のようなやり取りだが、これが日常である。
家に帰れば、またあの地獄の始まりだ。

さて、今日はどこに寄り道して帰ろうか。

S e c t . 0 母の言葉、子の思い（後書き）

H 2 3 . 8 . 5 改修

思った。

『月ヶ原さん』って、すごい名前！

Sect. 1 帰る、蛙、換える（前書き）

アホウドリ
【阿呆鳥】

ミズナギドリ目アホウドリ科。

特別天然記念物。国際保護鳥。

全長84～100cm。翼開張190～240cm。体重3.3～7kg。

夏はベーリング海やアラスカ湾、アリューシャン列島周辺に渡り、冬になると繁殖のため日本近海へ南下する。

出典…広辞苑・Wikipedia

Sect. 1 帰る、蛙、換える

—— 気がついたらそこにいた ——

学校の帰り、気がつくと辺り一面真っ白だった。

「雪？」

いや違う、砂だ。

空を見ると雲一つ無い快晴。地面をみると見渡す限り真っ白。しゃがみ込んで手ですくってみると、指の間からさらさらと砂がこぼれ落ちる。

少し歩き回ってみると、足元からもうもうと砂塵が上がった。

「どこだよ、ここは」

学校の帰り、普通に道を歩いていたつもりだ。

母親が出張で数日家を空けるのをいいことに、今日は珍しく寄り道もせず、まっすぐ家に帰って昼寝でもしようと思っていた。

なのに、いつの間にか見知らぬ所に立っていた。

何か、この場所に関する手がかりでもつかもうとして、きよろきよろと周囲を見渡すが、その地平線は、風によって舞い上がる砂煙によってぼやけている。

無意識のうちに作った握り拳が震えていることに、鶯は気づかなかった。

「冗談じゃ、無い」

声までもが震えている。

その震えが止まる様子はない。

(寒い)

いいや、暑い。

ここは砂漠だろうか。

真白い砂漠。

ここはどこなんだ。こんな砂漠は聞いたことがない。

その前に、ここは現実なのか？

「なんなんだよ、一体！」

とにかく何でもいいから答えがほしくて大声で叫んでみるが、草のそよぐ音はおろか、木霊すら帰ってこない。

知らず知らずのうちに涙がこぼれ落ちる。

両腕で自分を抱え込み、その場にしゃがみ込んだ。

漏れる嗚咽を押さえ込もうともしない。

これは夢だと、無理矢理自分に言い聞かせてそう思い込もうとする。

夢は覚めるものだ。

しかし、

(怖い)

怖くて怖くてたまらない。

人口密度の高い都市部に住み、常に人の気配を感じてきた鶴にとって、だだっ広いだけの何もない空間に、ただ一人ポツンと存在するということは、恐怖以外の何ものでもない。

「母……さん……？」

思わずつぶやいた言葉にかすかに自嘲した。

それは絶対に来るはずのない人だ。

とうの昔に自分の中で切り捨てたはずの人を、無意識とはいえ頼っている自分がいる。

己の小ささを思い知らされる。

鵜はぎゅっと目をつぶった。

（助けて。誰か、来て）

ここにいるのは自分一人。

他には誰もいない。

誰かが来るのを、必死に念じた。

誰でもいい、誰か助けてくれ、と。

こんなところに長くいたくなどない。

そんなことをしたら、いつか気が狂ってしまう。

しゃがんだ膝に顔を押しつけ、せめて視覚的にでも今の状況を否定しようとするが、聴覚が拾う ” 無音 ” に孤独感が増すばかり。

どのくらいそうしていただろうか。

ふと、何かの気配を感じたような気がして顔を上げた。

視界の隅に影が映る。

その影は、ゆらゆらと陽炎になりながら動いていた。

（助かった）

ほっと息をついてその影を正視する。

その影は、二足歩行する蛙だった。

その蛙。

二足歩行する蛙は、暫くきよろきよろと何かを探していたようだが、鵜を見つけるとこちらに歩いてきた。

正直蛙は嫌いじゃない。

好きでもないが嫌いでもない。

ただしそれは通常企画の大きさに限る。

しかし悲しいかな、そいつは等身大であった。

馴染んだものと形は違うが、一応洋服らしきものを身にまとっている。

ぺたぺたと寄ってきたそいつは、鵜の目の前に立つと、グエエーと鳴いた。

しゃがみ込んでいる鵜は、そいつに見下ろされている状態になる。両棲類独特の、横倒しになった紡錘形の瞳孔の眼球は、見えている部分だけで鵜の拳ほどもある。

歯のない文字通りの蝦蟇口の中には、舌と思しき醜悪な肉塊が横たわっている。

そいつはもう一度グエエーと鳴いた。

何かを語りかけているらしい。

しかし、何を言っているかはさっぱり分からない。

ふいに、そいつは4本しかない指の生えた両腕をこちらに伸ばしてきた。

そのまま鵜の頭を両脇からがつしりと挟み込む。

体温が低いのか、ひやりとした掌は指先が吸盤上になっており、がつしりと言うよりはぺったりという方が近い。

何をするのかと思えば、そいつはそのまま両手に力を込めた。

相手の姿にショックを受けて、反応が遅れてしまった。

ものすごい力で頭を押しつぶそうとする上に、上下左右に軽く揺すられる。

「……うあつ！」

反撃しようにも頭を持って吊されているので出来ない。

蛙の腕は鵜の腕よりも長いのだ。

これまで経験したことのないほどの頭痛が襲う。

脳の奥まで錐で突き込まれているような、そんなもってただ突かれていたのではなく、ねじ込まれながら押し広げられているような、そんな痛み。

吐き気がする。

気を失う寸前に、その手は離された。

「聞こえるか？」

地面に落とされて頭を抱えて呻いている鵜に言葉が聞こえた。

思わず顔を上げてそいつを見る。

「聞こえるようだな」

耳から入る言葉はどこかおかしい。

しかし、未だ頭痛の余韻の残る頭では意味をすんなり理解出来た。

——聞こえているようだな。

「ああ、聞こえているともさ。まったく、なんてことしてくれやがんだ、クソ蛙！ オレの頭がつぶれたらどうしてくれんだよ。あ、あ？ つかお前、誰だよ。何なんだよ、ここは」

そういう声に覇気はない。

最後の方はばやきに近くなる。

「ズぶしはしない。ジョ王様に献上するのに、死なれては困る」

「……今、何だった？」

何だって？

女王様？

今の鵜は、完全に目が据わっていると思う。

「ここには女王サマがいるのか？」

「ジョ王様がいらっしゃるから我々ガマ族がある。ジョ王様に献上する際に、言葉が分からなくては双方に不具合が生じる。だからお前の中に眠る《言語理解能力^{ピコ}》を目覚めさせた」

ずいぶんと勝手な理由だ。

”ピコ”　だなんて、最近はあまり見かけなくなった気がするテレビゲームのような響きだが、意味はまるで違うらしい。

来い、と言われておとなしくついて行くことにした。

いや、正確にはついて行かざるを得なかった。

一応暴れては見たが、ろくに相手にダメージも与えられないまま、がっちりと押さえつけられた上に、太い鉄製の首輪と腕輪をはめられた。

ご丁寧にその先は鎖でつながれて、奴の手の中にある。

普段なら拳の一発や二発くれてやるところだが、相手が醜い等身大の蛙なのと未知の世界に対する恐怖で、手を出すどころではなかった。

S e c t. 1 帰る、蛙、換える（後書き）

H 2 3 . 8 . 5 改修

テレビゲームのピコは、小さい頃に友人が持っていて、欲しかったけど親に買ってもらえなかったという思い出があります。

S e c t. 2 蛙の女王と牢の男（前書き）

【蓮鶴^{レンカク}】

チドリ目レンカク科。

全長55cm。翼長20cm。

ユーラシア大陸南東部（インドから中国まで）、スリランカ、台湾、フィリピンで繁殖し、北方の個体はインドネシア、マレーシア等に渡って越冬する。日本へは迷鳥として時々飛来する。

出典…広辞苑・Wikipedia

Sect. 2 蛙の女王と牢の男

”ジョ王様” は、ことさら醜い大蝦蟇蛙だった。
泥色の体には、サーモンピンクのドレスがはち切れんばかりにまとわりついている。

「ゾなた、名はなんと申す」

見た目通りの低く、しゃがれた声で語りかけられる。

「はっ！ テメエなんか名乗る名はないね！ いっぱしに人の真似なんかしやがって、何着ようがカエルはカエルだ、不細工なことに変わりはねえんだよ、イボガエル！ オレをこんなところに連れてきやがって、ただですむと思うなよ！ 一昨日来やがれ、コン畜生が！！」

怒りにまかせて啖呵を切ったら、まわりがざわめいた。
ゲロゲロ五月蠅いっただらありゃしない。

「ギ様、女王様に向かって何という口の利き方をする！」

「《ダビ人》^{ストレイア}風情が、失礼であろう！！」

—— 《旅人》風情が

ここの言葉は本当に分かりづらい。

”旅人” と書いてストレイアと読むらしい。

しかも文の始は必ず濁音付きのカタカナときた。

「ダまりや!!!!!!」

泥で作られた宮殿を難なく崩壊させてしまいそうなほどの大音声で臣下の者を怒鳴りつけたのは、例の”ジョ王様”だった。

「ゾの《ストレイア旅人》は牢に放り込んでおけ。ガうか食すかは後で決める。ヨゝいな」

そう言い残して ”ジョ王様” は玉座を立ち、のしのしと部屋を出て行った。

ああ、なんだかデジャヴを感じるのはなぜだろう？

* * *

—— 飼うか食すかは後で決める

そう言われて心穏やかでいられるわけがない。

どちらにしろとっとと逃げてしまうに限ると、泥で作られた牢に入れられてすぐに格子を壊して逃げようとしたが、これが見かけによらず存外堅い。

「やめときな。体力の無駄だぜ？」

向かい側の牢から声をかけられて飛び上がった。

「こいつは泥に見えるが泥じゃねえ。奴らの糞さ。強度は岩にも勝る」

自分が今までつかんでいた物が汚物だと知り、慌てて手を離す。
通路が狭いせいで相手が見えた。

牢の真ん中で片膝を立てて座っている。
若い人間の男だ。

「あんたは？」

「俺はアーロッド。お前は？」

「井垣いがきつぐみ鶴」

名乗ると相手はぎょつとしたようだった。
周囲を警戒した後、すぐに格子の側に寄ってきて声を潜めて言う。

「お前、この世界ここのモンじゃねえな」

核心を突く言い方だった。

「その名前、奴らにも教えたか？」

「いいや」

「ならいい。何でお前がこんなところにいるのかは知らないが、
今後一切その名前は他の奴らには教えるなよ？　ここじゃ名前の重
さはお前の想像を絶する」

「どういう意味だ？」

するとアーロッドは首を横に一つ振って続けた。

「本名を教えるってのは、そいつに命を握られるようなモンだ。次に名乗るなら別の名前にしろ。出来るだけ意味を持たないやつがいい」

「訳が分からない」

本当に。

ここは謎だ。

アーロッドは軽く笑う。

「だろうな」

男はどかりとその場に座り直すと話し始めた。

「大体どこもそうなんだが、名前を呼ばれて返事をするとか魂を持って行かれちゃったとか、逆に、悪魔の名前を当てることでその悪魔を追っ払うことが出来たなんて話が、古今東西必ず一つはある」

たしかにそういう話は聞いたことがある。

西遊記の中で、名前を呼んで返事をした者を吸い込んでしまうヒョウタンの話は特に有名だ。

「名前って言うのは個人を表す一種の記号だ。個々を識別するものだから、当然名付けるときに意味を含ませる。それには”想いが籠もっている。名前を呼ぶってことはその”想い”を呼ぶってことだ」

「だから……呼んではいけない？」

「ああ。教えてもいいけない。名前を知る相手は名付けた親か、もしくは主と認めた者だけだ」

「主？」

「簡単に言うと運命共同体だな。違うのはそいつらが主従関係にあるということ。他には夫婦とか、最近じゃあ婚約者同士でも名前を教え合っただけかな？　とにかく、名前を知られるということ、自ら相手に命を捧げたようなモンだ。へたすりゃ、死ねって言われただけでそいつは自殺しちまう。自分の意志どうこうじゃなくて、体が勝手に動くんだそう」

複雑な話だが、要は名前を呼んでも呼ばれても、また教えてもいいけないと言うことは分かった。

「あれ？　オレ、さっきお前に名前教えたよな？」

男は、ああ、といって笑った。

「聞かなかったことにしてやるよ」

「そりゃ、ドウモアリガトウ」

薄暗い中に男と二人。

格子と通路を挟んだだけで、お互いの顔ははっきりと見ることは出来ない。

乾燥した空気。

ゆらゆらと揺れるたいまつ炎。

どうしてこんなことになってしまったのか。

いつもと同じように、学校から帰る途中だったのに。

母親は心配しているのだろうか。

いや、心配どころか喜んでいるかもしれない。

普段あれだけ自分が死ぬことを願っている母親だ。

「さぞかしスツとしたろうな」

ポツリと呟いた言葉は、口の中に籠もってしまつて音にならなかった。

ひたひたと、牢獄の通路に足音が響く。

カチャリと音がして、先ほどまで定位置にあった明かりがこちらに近づいてきた。

ゆらゆらと揺らめく炎の不安定な明かりは、それだけで相手を不安にさせる効果があると思う。

「イ、きているか？」

例の、鵜をここに連れてきた蛙だ。

アーロッドがにやりと笑って応じる。

二人はどうやら知り合いらしかった。

「こんなトコでくたばるほどやわじゃないさ」

「ゾレはよかった」

「頼んだもの、用意出来たか？」

「マ、だ最中だ。ギョウはお前の様子を見に來ただけだ。オ、前に死なれてはせつかくの取引もパアだからな」

蛙は忌々しげな様子でアーロッドを見据えた後、ちらりと鵜に視線を向けた。

「なんだよ！」

「ジョ王様はお前を飼うおつものようだ。……ヨ、かったな、命が助かって」

鵜は相手を思いっきり睨め付けた。

しかしそいつはというと、大して気にした様子もなく、とつと踵を返して去っていった。

來たときとは反対に明かりが遠ざかった後、カチャリと音がして炎はそれきり移動することはなかった。

S e c t. 2 蛙の女王と牢の男（後書き）

H 2 3 . 8 . 5 改修

それにしても、会ったばかりの人間にここまで親切に説明してくれるなんて、彼は結構お人好しですね。

S e c t. 3 月の光と緑のナルシスト（前書き）

【冠筑紫鴨】カシムリツクシガモ

カモ目カモ科。

全長60～64cm。翼長オス32cm、メス31cm。

中華人民共和国北東部？ 記録がある地域は他に大韓民国、朝鮮

民主主義人民共和国、日本、ロシア。

世界中に三点の標本しかなく、すでに絶滅してしまったと考えられていたが、ここ100年以内に計六羽が確認されている。

出典…広辞苑・Wikipedia

Sect. 3 月の光と緑のナルシスト

鵜は拳を固めると、一番近い壁を殴りつけた。

「何が『ヨ、かったな』だ！ 飼うだど?! なぶりものにするぐらいならとっとと殺しやがれてんだ！ 上からもの見やがって!!!」

容赦なく殴りつけてはいるが、拳に血がにじむようなことはない。今まで何度も人や物を殴ってきたおかげで、鵜の拳は人よりも丈夫になっている。

「おい」

「んだよ!!!」

カンカンに憤ふさふさっていた鵜だが、アールロードに声をかけられてそちらに向き直った。

あわよくば、そのまま怒りの原因を適当にすり替えて、怒鳴りつける気満々である。

「お前、さっきあいつがなんて言ったか聞いていたのか？」

「はあ？ 何言ってんだお前。こんな間近でしゃべっていたのに、聞いたもクソもねえだろうが」

「そういうことを言っているんじゃない。さっきの会話を理解出来たかと聞いているんだ」

「どういう意味だ？」

訝^{いぶか}しむ鵜とは裏腹に、アーロッドはじっと黙って考え込んでしまった。

それっきりウンともスンとも言わない。

不審に思った鵜が声をかけても全く反応がなかった。

仕方がないので、座って頭の中でこれまでのことを整理していたが、それもしばらくすると飽きてしまった。

なにせ分からないことが多すぎる。

「《言語理解能力者》……か？」

ずっと黙り込んでいたアーロッドが再び口を開いたのは、鵜がうつらうつらと眠りの世界に片足をつ突っ込んでいた頃である。

死なずに済むと分かったとたんには、自分の神経もずいぶんと図太いものだ。

「んあ？ 何だって？」

「《言語理解能力者》だ。無数に言語が存在するこの世界で、全ての言語を理解するのは不可能だ。だが希に、かなり低い確率でだが《言語理解能力者》と呼ばれる《能力者》が居ると聞いたことがある。お前、奴らに何かされなかったか？」

「何かって？」

「それは知らん。何せ俺も《言語理解能力者》に会うのは初めてだ。確率も確か五百億分の一だったか何だったか……。先天性か後天性かもはっきりしないようなモンだしな。なにぶん数が少ない」

「……そういえば、始めてあの蛙にあったとき頭を掴まれた。ぎゅうぎゅう締め付けられて、それまではただの蛙の鳴き声だったのが、急に人の言葉になった。かなり訛りはあるがな。そいつはオレの中の《言語理解能力》を目覚めさせたとか何とか言っていたよ」

「たぶんそれだな。そのときに、何かしらの術をかけられたんだと思う。そのせいでお前は後天的に《言語理解能力》を得たんだ」

「術？　ここにはそんなモンまであるのか？」

「お前のトコには無かったのか？」

「無いなあ。そんなのは御伽話の中だけかと思っていた」

「こっちだってそんなに一般的なワケじゃない。術士は国家資格が居るからな」

「ふうん」

「興味なさ気だな」

「まあな。実感がないってのが正直なトコ。オレにとっちゃ良い迷惑だよ」

「なぜ？」

「なぜだって？　畜生！　そいつのためにオレはここにいるんだからよ！！」

ふつふつと腹の底から怒りがわき上がってきた。

「冗談じゃねえ！ なあにが召還だ！ 何が取引だ！ オレにやあひとっつもおいしいとこなんざあねえじゃねえかよ！！」

例の”ジョ王様”の謁見の前に聞かされていた。

何か取引をしたのだと。

そのために 《能力者》 である自分はわざわざ召還されたのだと。

その時は何がか分からなかった上に、あっけにとられて怒るところではなかったが、今から思い出すとかなり腹が立つ。

「は？」

こんどはアーロッドが聞き返す番だった。

「ちょっと待て、なんだよそれ。俺はそんなこと一言も聞いてないぞ？」

彼は口元を掌で覆って絶句していた。

「悪い。たぶんそれ、俺のせいだ」

「何だって！？」

「そういう取引をしたんだ。あいつには昔ちよつとした貸しがあってな、それをチャラにしてやる代わりに俺をここから出せってやつだったんだが。まさかそんなことをしでかすとは。……俺はあの女王に飼われる予定だったんだ。だがその取引で、俺を逃がさないといけなくなったから」

「オレがその身代わりというワケか」

「恐らく。《言語理解能力者》^{ヒカラ}は珍しいからな」

彼はかなり自分を責めているようだった。

何か言葉をかけるべきなのかもしれないが、生憎そんな言葉は持ち合わせていない。

なんせ自分は今回の件に関しては被害者なのだ。

「責任はとる」

少ししてから彼はぼそりと呟いた。

「お前をここから出してやる。お前がこんなことになったのは俺のせいだ。取り敢えずは俺の村に來い。そこでお前の身の振り方を考えよう」

「ああ」

取引は成立した。

後は実行するだけだ。

牢の天井近くにある窓から月の光が差し込んできた。

それまでは不明瞭だった相手の顔がはっきり見える。

エメラルドグリーンの髪は肩の辺りで切りそろえられている。

瞳は深緑。

右頬に大きな刺青があった。

反対側には、顎から首にかけて、刃物で切られたような傷跡がある。

比較的顔の整った、二十代半ばの男だった。

牢に閉じ込められているというのにその表情は余裕に満ちていた。その場限りのとってつけたような安っぽいものではなく、場数を踏んだ者独特の、大胆不敵な表情。

相手によっては馬鹿にしていると思われるも仕方がないだろう。全身から醸し出すように、その男は ” 自信 ” を身にまといていた。

そして――

「ところで、何でお前はこんな所に居るんだ？」

「あ？ そんなの俺の顔が良いからに決まってるだろう？ こここの女王は面食いだからな」

「言いやがった！」

男はナルシストだった。

S e c t. 3 月の光と緑のナルシスト（後書き）

H 2 3 . 8 . 5 改修

自分で『顔が良い』って言えるなんて、たいした自身ですね。
何か根拠はあるんでしょうか？

Sect. 4 文明社会とその弊害（前書き）

【砂鷄^{サケイ}】

ハト目サケイ科。

全長約38cm。

中国北部から、モンゴル、中央アジアのカスピ海東岸までの内陸に生息。

通常は渡りをしないが、個体数が増えたときは遠方まで飛ぶことがある。

出典…広辞苑・Wikipedia

Sect. 4 文明社会とその弊害

オレは今、馬らしきものに乗って、例の白い砂漠を抜けようとしている。

何故馬らしきものなのかというと、ソレの毛色は見事なターコイズブルーだったからである。

「ありえねえ」

思わず呟いた台詞は、相乗りしていた相方の背に当たってぐもって聞こえた。

周囲には自分たちの他に三騎、色の違う似たような馬がいて、それぞれに人が乗っている。

「ぼやくな。仕方無いだろう？ 馬は四頭しかいなかったんだ。大体お前、馬乗れないんじゃないかなかったのか？」

何を勘違いしたのか、前で手綱を取っているアーロッドが言うてくる。

「違えよ。オレが言ったのはそのことじゃなくって、この馬の毛の色だよ。なんだってこんなド派手な色……」

男は一瞬黙り込む。

「……アレよりはましだろう」

「……そうだな」

彼の視線の先をたどり、同意する。

ソレは自分たちのターコイズブルー馬よりかなり目立った。

なんと蛍光のピンクとグリーンのマールだ。

騎乗しているのは自分とそう変わらない年ごろの少年で、彼はじやんけんで負けたが故にこのマール馬に乗る羽目になったのである。

かなり気の毒だ。

ユキと呼ばれていたその少年の悔しがったこと。

顔を真っ赤にして半泣きの状態で、正直ちよつと可愛かった。

「これ、染めてあんのか？」

わかりきっている答えなのに、思わず確認してしまう。

「こいつ以外はな」

「は？」

耳を疑った。

「え？ 待った！ マジ？！ この色って地毛？ だって青だぞ

青！ ありえねえって！」

アーロッドは答えない。

いい加減相手にするのに疲れたのだろう。

しかしそんなことにかまってられない。

「そうか？ 別に珍しくも何ともねえだろ？ 鳥はもっと鮮やかな色をしているじゃないか」

答えたのはショッキングピンクの馬に乗る、暑苦しいひげ面の男だった。

彼の後ろには全く同じ顔の男が乗っている。
相乗効果でむさ苦しいことこの上ない。

「馬に関してはこの種に限って、だろ？ 農耕用の馬はもっとおとなしい色してるじゃないか。こいつは観賞用だぞ？」

結局納得できる答えを出してくれたのは、ショッキングピンク馬後ろの男だった。

「ところでロッド。お前、本気でこの女を村に連れて帰るつもりか？」

ごくごく当然の疑問を、最後の一騎、カナリヤ色の馬に乗る男が口にした。

彼らは、鵜が何者なのか知らされてない。

鵜も彼らのことを知らない。

辛うじて分かるのは、全員が同じ村の出身だということである。
それは会話の中から得た情報だ。

「ああ」

彼の返事は短かった。

視線はずっと前方に向けられていて、揺るがない。

「お姫サマが泣くぜ？」

にやついた表情で、ショッキングピンク馬前の男が言う。

「話せば分かってくれるさ」

全く取り合わない風のアーロッドに、シヨッキングピンク馬後ろの男はケツと横を向く。

「その話を今俺たちにもして欲しいもんだぜ」

彼らが説明しろと詰め寄るのに対し、アーロッドは面倒だから村に着いてからだ、回答を引き延ばしたのである。

シヨッキングピンク馬のツインズも不服そうな目を向けてくるが、鶴本人もよく分かっていないのに説明などできるはずもなく、代わりに前に乗る男の袖を引いた。

「お姫サマって?」

苦し紛れに話題を何とか別の方向に持って行こうとする。

「こいつの嫁だよ。かなりのべっぴんさんのな」

シヨッキングピンク馬前の男が、アーロッドを顎でさして言った。

「こいつが村に帰ってきたときに、わざわざ都会から付いてきたって言うから、良くできた女房だよな」

「へ」

よくは分からないが、とりあえず相づちを打っておく。

「そう言えば、そのときもこいつは今みたいに何も言わなかった

んだよな？」

この話の流れでそうくるか！

鵜は心の中で叫ぶ。

「せめてその女の名前だけでも教えろよ」

そう言われても、こっちには名乗れないだけの理由がある。

どうでもいいが、女おんなと連呼するのはやめてほしい。

鵜は思わずため息をついた。

時は数時間前にさかのぼる。

ガチャリと音がして牢の鍵が解かれた。

向かい側のアールロッドの牢だ。

長い体を二つに折り曲げ、彼は狭い入り口を出る。

そして。

「大体お前があそこでいきなり牢破りなんかするから、こんなことになったんだろうが」

鵜は唇をとがらした。

「だーかーらー、仕方ねえって言ってるだろうが。あの状況で他にどうしろっていうんだよ。奴らは損得でしか動かねえから、説得したって無駄なだけなんだって」

このやりとりは脱獄してから何回も行われている。
いい加減飽きてきた。

「だからって。殺す必要ないじゃないか」

反論する声に力はない。

あの時、彼は鍵を持ったまま立ち去ろうとした牢番を、首をへし折って殺したのだ。

そしてその手で鵜の牢を開け、彼女の手を引いて逃げた。

途中、血なまぐさい小部屋に押し込められていた四人を助け、寄ってきた衛兵共を攪乱するために他の捕虜達も解放する。

出口に向かう道すがらでも彼は、彼らは殺していた。

今でも蛙共の苦鳴が耳にこびりついて離れない。

中には女もいた（と思う。だって声が高かった）。

武器は持っていない。

それらは全て素手で行われたのだ。

あの時、鵜は必死だった。

必死で ” 死 ” の恐怖に耐えていた。

テレビやマンガでは良く見るソレは、鵜には全く馴染みのないものだ。

彼らは違うらしい。

平然としていた。

というか、彼らは彼らで生き残るために必死だった。

やっと厩に着いたとき、鵜はとうとうこらえきれずに吐いた。

それを見て、アーロッドは少し肩をすくめただけだった。

ちなみに、この砂漠に放り出されたのは学校帰りだったため、今の鵜の服装は学校の制服のままである。

スカートのままで馬に乗るのは躊躇われたが、そんなことは言われてられない。

砂よけのために、どこからか調達してきた防砂布を被せられただけ、まだましというものだ。

来い、と言われて訳の分からないうちに彼の後ろに乗せられ、現

在に至るのだ。

彼ら曰く、あの ” ガマ族 ” というのは肉食らしい。

元々は西北にいたのだが、次代の族長を決める際に分裂して、その一派がこの場所に勝手に王国を作ってしまったらしいのだ。

奴らは ” ジョ王 ” と言っていたが、実際は彼女は族長といった方が正しいらしい。

だが所詮は非認可の国。

近々役人により、強制解体する予定だった。

奴らは贅沢趣味な上に、大変な美食家でもある。

定期的に自分たちの国を出て盛大な狩りを行い、近くの村から若い女や子供をさらってきては喰うのだという。

さらに奴らは、喰った後の獲物の皮をなめして服を仕立てたり、装飾品として利用するのだそうだ。

特に人皮の物は最高の贅沢とされる。

道理で城のあちこちに毛皮がぶら下げてあったはずだ。

それらは皆、奴らの戦利品なのだ。

狩りは無差別に行われる。

この辺りは以前は大きな町があつてかなり栄えて活気もあつたらしいが、奴らに移ってきてからと言うものの、皆奴らを恐れて逃げしまった。

獲物が居なくなつたので、仕方無く奴らは狩り場の範囲を広げる。とうとうこの一帯には人はおろか、動植物さえ姿を見せなくなつてしまった。

五人は、この周辺を偵察に来ていて奴らに捕まったらしい。

「この砂漠の砂は何で出来てるかわかるか？」

ショッキングピンク馬前の男が聞いてくる。

見渡す限り一面の白い景色は、何処まで続いているか分からない。

「骨だよ、骨。この砂は全部奴らの犠牲者の骨が細かく砕けたものさ」

ギョツとして視線を地面に落とす。

馬の蹄が地面を踏みしめる度にもうもうと砂煙をあげるほど細かい砂は、実は奴らの王国の領地でもあるのだ。

「全く、えげつねえ」

ショッキングピンク馬後ろの男が毒づく。

アールロッドはさっきから黙ったままだ。

城を出てからずっと歩き通しで、空にはもう星が輝いている。

砂漠は昼と夜とでは寒暖の差が激しい。

鵜は冷えてきた体を縮こまらせた。

やがて砂漠を抜けたところで馬を捨て、途中で休みながら丸々六日ほど歩いた。

追っ手をまくために馬は使わず、わざと森や山を抜けて遠回りをした。

彼らは平然としているが、文明機器が発達した中に住む現代人としては辛い。

足に出来たまめがつぶれ、痛くてたまらない。

筋肉痛も酷い。

体力もぎりぎり、ほとんど気力で持たせているようなものだった。

それでも、音を上げて彼らを困らせるようなことはしなかった。今彼らに見捨てられたら、鵜は生きていけないからだ。

少しでも痛みを緩和しようと、休憩中に近くの川に足をつけて冷やしていたら、ユキが気付いて薬草をつけ、布を巻いてくれた。

原始的な方法ではあるが、これですいぶん楽になった。

ツインズは、ガットとドットといった。

双子なのだそうだ。

カナリア馬に乗っていた男はハンセルと名乗った。

寡黙な男で、どこぞの組の若頭のような物騒な面をしていた。

彼らに名前を聞かれて困っていると、アーロッドが横から「キオ
ラ」と呼んだ。

他に思いつかなかったので、「じゃ、それで」ということになっ
た。

ユキやツインズは当然眉をひそめたが、ハンセルだけは何となく
事情を察したようだった。

村に着いたのは七日目の夕方だった。

常に仲間より一歩先を進んでいたユキが、「見えた」と呟いたの
が印象的だった。

男達の間には安堵の空気が広がる。

鵜は周囲を見渡したが、森の木々ばかりで何も見えなかった。

しかしそのまま進んで行くと、確かにそこには村があった。

村人達は彼らを見ると、大騒ぎをして喜んだ。

騒ぎに混じることのできない鵜は、完全に疎外感を感じていた。

S e c t. 4 文明社会とその弊害（後書き）

H 2 3 . 8 . 7 改修

タイトル重いくせに、内容はそうでもない……

S e c t. 5 報告（前書き）

※ 今回は【迷鳥図鑑】休載します。

Sect. 5 報告

ふう、と溜息をついて ” 男 ” は読んでいた書類を机においた。

「これはひどい」

言葉とは裏腹の表情で呟く。

「何てことをしてくれたんだ。近々何かやるなあとは思っていたけど、まさかこんなことをしでかしてくれるとは……それで？」

最後の問いは、目の前で直立不動の姿勢をとっていた男に向けられたものである。

「は。例のガマ族の内、召還術に携わったと思われる術士数名を逮捕。” 女王 ” にも、中央への出頭命令が出ています」

「西北の本体の方は？ 彼らにも当然、今回のことは知らされているんだろう？」

「は。そのことですが、西護庁が代表者一名の出頭を命じたにもかかわらず、『既に一族からは追放された者達のみでかしたこと故、我々には関係ない』の一点張りで、已然出頭を拒否しています。さらに『我々には異世界の住民を召還する術など無い。そもそも術そのものを使わないのだから、術を使うその者らは我々の名をかたる賊だ。是非逮捕してくれ』^{テリトリ}と言い出す始末で、自分たちの領域から出ようとさえしません」

「やれやれ、あっちもたいへんだ。で、その召還されたっていう女は？」

「我々が踏み込んだときには、既に脱走した後でした。潜伏先については現在捜索中です」

「ふうん」

”男” は気のない返事をする。

「通報してきた男だっけ、そいつは？」

「は。名乗らなかった上に、担当者が少し目を離れたすきに居なくなってしまったとかで不明です。顔も、布をかぶって隠していたので分かりません。ただ、左頬から首筋にかけて傷跡があったと」

「傷跡？ 刀傷？」

「さあ、そこまでは。何せ夜だったそうなので」

「傷跡か。……確か彼の出身地も東だったよね」

「は？」

「いや、こっちの話」

”男” は再び大きな溜息をついた。

「それにしても、ここまで派手にやらなきゃ東だけで対処できたのに。中央まで出張ってきたんじゃ流石にやりにくいなあ。下手に

動くところの首も危ないし。どうしようか」

口調とは裏腹に、”男”からは全く困った様子がうかがえない。

「いかがでしたしょう」

「そうだなあ。取り敢えず、その女が居ないことには始まらない。発見次第保護。適切な処置を施した上で、担当者に引き渡してあげて。生死は問わないけど、まあ、生きてるに超したことはないよね」

「は」

男は姿勢を正して敬礼すると、くるりと踵かかひすを返して部屋を出て行った。

”男”の机の上では提出された書類とともに、先ほど部下が持ってきたお茶がまだ湯気を立てている。

それを一口飲んで彼は立ち上がった。

背後にある窓の窓枠に手をかけて庭を眺める。

彼の仕事場である部屋から見えるその庭は、専属の庭師達によって立派に整えられていた。

時折、咲き乱れる花を目当てに虫や鳥たちがさまよい込んでくる。しかしこの場所の本来の持ち主にそういったものを愛でる感性はなく、成金趣味の過剰な建物の装飾が、本来想定されていたはずの絶妙な調和をかき乱していた。

彼はそれを見てにやりと笑う。

「中々面白いことになってきたなあ」

S e c t . 5 報告（後書き）

H
2
3 .
8 .
7 改修

S e c t. 6 ささやかなぬくもり(前書き)

カタシロワシ
【肩白鷺】

タカ目タカ科イヌワシ属。

全長オス77cm、メス83cm。翼開張195～207cm。

夏季にヨーロッパ東部から中央アジアにかけての地域で繁殖し、冬季になるとインド北西部、中華人民共和国南部、アフリカ大陸北部へ南下し越冬する。日本には越冬のためまれに飛来(迷鳥もしくはまれな冬鳥)する。

出典…W i k i p e d i a

Sect. 6 ささやかなぬくもり

—— 気がついたらそこにいた ——

ぼんやりとした視界を、何度も目を瞬^{しばた}かせることによってはつきりさせる。

まず最初に目に飛び込んできたのは ” 木 ” だった。
そのうち、それが天井のむき出しの梁だと言うことに気付く。

(オレは寝ていたのか?)

手足が重い。

枷でもはめられているかのようだ。

ゆっくりと首を回して室内を見渡す。

お世辞にも広い部屋とは言えなかった。

自分が寝ているベットの側に、小さなサイドテーブルが一つ。
陶器のコップに花が一輪生けてあった。

(ここは何処だろう)

今までのことを整理しようとする。

寝起きの頭は靄がかかったみたいで、中々はっきりしてくれない。
顔の周りにまとわりつく正体不明の不快感に眉を寄せ、肺の中の息を吐き出す。

『蛙』『村』『砂漠』『緑』『馬』『白』。

キーワードは出てくるが、それがてんでばらばらに散っていて、
一つにまとまってくれないのだ。

(母サンハ何処ダロウ)

無意識に考えた。

――死ねよ

母の口癖を思い出す。

ああ、そうか、と納得した。

(ココハ自分ノ居タ世界ジャナイ)

記憶をコーティングしていたガラスが割れ、粉々に砕け散ったように錯覚した。

今までの経緯は全てその中であつた。

ここは自分の知らない世界だ。

「ああ……」

無性に悲しくなった。

涙は出ない癖に、心が泣いている。

本当に涙が出てきてくれたらどんなにすっきりするだろう。

(死ンデシマエレバ良カッタノニ)

そうすればこんな思いをせずにすんだ。

その時。

キィ、と何かがきしむ音がして、石造りの壁に設置された木製の扉が開いた。

「あ」

一人の女性が立っていた。
線の細い、触れれば今にも光の粒子となって散ってしまいそうな
ほど儚げな女性。

朝焼けに光る露を具象化すれば、ちょうどこんな感じかもしれない。
い。

彼女はそっとほえんだ。

「気がつきましたね」

小さな小さな鈴を転がすような声だった。

彼女はするするところちに寄ってきて、持っていた水差しをサイド
テーブルに置くと、すみません、と断ってからそっと鵜の額に手
を乗せた。

そしてああ、と破顔する。

「熱は下がりましたね、よかった」

その言葉から察するに、自分は熱を出して寝込んでいたらしい。

「ここは？ あんたは誰だ？」

「ここはアロード・エイルナーの家です。私は彼の妻で、ルー
チェと申します」

「妻？」

「はい」

確か、お姫サマがどうか言っていたが、では彼女がそうか。

いくら相手が女性とはいえ、見下ろされているのが不愉快だったので起き上がろうとすると、軽く肩を押さえられた。

何も言わなかったが、彼女の悲しそうな顔を見ていとなけなしの良心がうずく。

鵜をベッドの中に戻すのに成功すると、彼女はちょっと待っていて下さいね、といって部屋を出て行った。

おとなしく寝ていて下さいね、と釘を刺して出ていく辺り、彼女は見た目よりも強いのかもしれない。

少しして彼女は夫を伴って戻ってきた。

牢で会ったときにはかけていなかったが、今日は縁なしの眼鏡をかけている。

「よう、目が覚めたってな」

良く通るその声が熱が下がったばかりの頭に響く。

先ほどの彼女の声は優しくてさほど気にならなかったのだが、彼のこの声は外で演説をしていてもきつと隅々まで届くだろう。

「もう少し小さな声で頼む」

そういうと彼は、酔っぱらいの二日酔いみたいだな、と言って苦笑した。

彼が鵜が寝ているベッドの横の椅子に腰を下ろすと、彼の妻は一礼して部屋を出て行った。

「村に着くなりぶっ倒れたの、覚えてるか？」

「いや。でもその辺りから記憶がないな。何か騒いでたような気もするが」

「無理しすぎたんだろうな。途中からかなりへばってみたいだし。ユキが心配してたぜ？」

彼は苦笑した。

「オレはどのくらい寝てたんだ？」

「結構長かったな、一週間ぐらいか。中々熱が下がらなくて、一時は危なかった」

「一週間！」

道理で体が重いはずだ。

「お前のことだが、一応ここの村長にある程度のことは話してある。細かいことは当の本人が目覚めてからと言うことになった」

「そうか。わかった」

「具合悪そうだな。まだ熱が下がってないんじゃないのか？」

「いや。熱の後だから体がダルイのと、ずっと寝てたらから体になまってるんだろう」

「ま、暫く寝てろ。一週間も寝てりゃ体力も落ちてるだろう？　もう少し元気になってから村のみんなを紹介するから」

そう言い残すと彼は部屋を出て行った。

S e c t. 6 ささやかなぬくもり (後書き)

H 2 3 . 8 . 7 改修

美形が眼鏡を掛けてると萌えませんか？

Sect. 7 見た目に惑わされて（前書き）

シロハヤブサ
【白隼】

タカ目ハヤブサ科ハヤブサ属。

全長オス51cm、メス55cm。翼開長オス115cm、メス125cm。ハヤブサ属最大種。

主に北極圏に分布し、年によって冬期南下する。日本にはまれに冬鳥として飛来し、主に北海道などで観察される。

出典…Wikipedia・ブリタニカ

Sect. 7 見た目に惑わされて

結局、元通りに体力が戻るまで更に一週間かかった。

もう大丈夫だと言うことで、これからのことを話し合うために、アーロッドは鵜を村長の家へ連れて行った。

村長はがっちりした体格の五十代がらみの大男だった。

髪はアーロッドと同じエメラルドグリーンで、年のせいか所々白いものが混じっている。

聞けば彼の兄だという。

ずいぶん年が離れているなと言うと、何だか妙な笑いをされてしまった。

「イデウス・エイルナーだ。よろしく。大まかなことはロッドから聞いたが、大変だったな」

「同情ありがとう。でも本人はあまりそうは思っていないつもりだから」

そういうと、一瞬彼は目を見開いたが、直ぐに笑い出した。

「中々良い心がけだ。世の中そう思わないと生きていけない場合もあるからな」

「それで、イディ。どうするんだ？」

今まで黙って聞いていたロッドが口を挟む。

村長はそれで漸く目的を思い出したようだった。

「ああ、そうだったな。しかしまあ待て、ロッド。直にグリーンが来る」

「何だ、あいつ戻ってたのか」

「ああ。今朝方な」

「誰だよ、グリーンって」

一人会話について行けなかった鵜が、側に立っていた男の袖を引っ張って言う。

「グリッジ・エイルナー。俺たちの弟だ。村の補佐役をやってる」

「お前ら、三人兄弟か」

「ああ」

兄弟が大勢いるなんて羨ましいな、と一人っ子の鵜は思う。

しかし、野性的な長男に優男な次男と来たら、三男は一体どんなだろう。

上二人がかなり年が離れているから、まだガキだと言うこともあり得る。

だが鵜は忘れていたのだ。

ここが異世界であると言うことを。

その予想は見事な形で裏切られることとなった。

数分後、現れた ” グリー ” ことグリッジ・エイリーは、長男

と同じような五十代がらみの大男だった。

「お前らホントに兄弟か？」

彼を見たとなん、鵜は思わずそう呟いてしまった。

その言葉に、側にいたロッドが吹き出し、長男のイディは苦笑いした。

「全く持ってその通りだ。こいつの兄貴の俺でさえ、時々本気でそう思う」

「よせよ、イディ。ガキン頃はよく似てるって、周りからさんざん言われただろ？」

「だが成長してみりゃこのざまだ。お袋もよく ” 鳶が鷹を生んだ ” なんて言われてるしな」

ロッドはそれを聞いて腹を抱えてゲラゲラ笑う。

「鳶も鷹もあるかよ。お袋は娘時分には村一番の美少女だって話だったじゃないか」

「そんなもん、たかが知れてら。こんなド田舎の美少女なんて、都に行きやあただの小娘だろうよ」

「おいおい、そんなこと言っているのかよ。今度それお袋に向かって言ってみろ。張っ倒されるぞ」

鵜たちをおいて、二人の会話はどんどん盛り上がる。

放っておいても良さそうな雰囲気だったので、その間に俺とグリ

―は簡単な自己紹介を済ませていた。

彼ら三人の年齢を知ったのもその時である。

「168！ ロッドが?!」

「おう。イデイが170で俺が164だ」

「え、なんだよその数字。でか過ぎねえか？ ってかあんたら二人はともかく、上と下と見比べて、ロッドの実年齢と外見年齢が合わないさすぎだろ。何か秘術でも使ってんのか？」

「ロッドはちょっと色々あって特別だが、他は普通だろ？ まあ、俺たちロナグ人の寿命はスホルト人の約3倍だからな」

「ロナグ人？」

「それは話が長くなるからまた今度と言うことで。それよりあいつらを何とかしねえと」

長男次男コンビの会話はまだ続いていた。

「おい、兄貴！ その辺にしとかねえと日が暮れちまうぜ！」

三男に注意されて、二人は漸く会話を止めてこちらを向いた。

「ゴホンッ。よし、では行くとするか。そろそろみんなそろっているはずだ」

「へ？ 行くって、どこに？」

そう聞くと、ロッドは何を言ってるんだというような顔をした。

「集会場に決まってるじゃねえか。おまえの今後を話し合うつつたろうが」

「いやそれって、ここで、ていう意味じゃなかったのか？」

「ここで話し合ってどうするんだ？　ちゃんと理由を話して、村のみんなに認めて貰わねえと意味がねえだろう？」

つまり鵜は、これからこの村に住むために、己の身の潔白を証明しなければならぬのである。
気が重い。

「そんなに気負うことはない。みんな面は怖いが気の良い奴ばかりだから」

強面のグリーの慰めが気休めにしか聞こえない。

S e c t. 7 見た目に惑わされて（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 4 改修

見た目は大事です。

第一印象でその後の会話の内容はほぼ決まりますね。

Sect. 8 身上会議の行方（前書き）

【姉羽鶴^{アネハヅル}】

ツル目ツル科アネハヅル属。
ツル類中もつとも小型。

チベット高原など旧北区の温帯域で繁殖し、インド亜大陸や北東
アフリカ、中東などで越冬する。日本には稀に迷鳥として渡来する。
他のツル類と違い、草原や半砂漠で繁殖する。

脂肪を精油したものを^{サイウカクユ}蓑羽鶴油と呼び、皮膚のひび割れ、手の
痺れ、肌荒れに用いる。

出典：Wikipedia・ブリタニカ

Sect. 8 身上会議の行方

案の定、集会場に一步足を踏み入れた鵜は、思わずズザッと後ずさりした。

（どこの組の総会だよ！）

十余人の強面の男達が綺麗に並んで座り、入り口に立っている鵜たちを見ていた。

その視線をもっともせず、三兄弟は立ちすくんでいる鵜をせっついて中に入り、村長を中心に右にグリ、左にロッドという配置で座った。

鵜は村長とロッドの間に座らされた。

（居心地悪っ！！）

目の前に座る男達から無言で発せられる威圧感に、鵜は背中を冷や汗が流れていくのを感じた。

平均年齢は50〜60歳前後であろうか。

ただ、男達と同年代と思われる女が一人と、明らかに彼らより年上のしなびた老人が一人、列の端の方に座っていた。

「よし、全員そろったな。始めるぞ」

村長の号令で、その場の空気が心持ち緊張する。

「今日みんなに集まって貰ったのは他でもない、先日ロッド達が連れて帰ってきたこの……」

村長は鵜の肩をぽんとたたいた。

「キオラのことだ」

村長に促されて、ロッドがこれまでの経緯を話し始めた。

さすがに鵜の本名は伏せたが、取引のことや、脱獄時に起こった出来事を、ロッドは彼らに簡単に話して聞かせた。

「役人に引き渡せばいい」

全てを話し終え、さてこれから鵜をどう扱うかという話題になったとき、男達の中の一人が言った。

「その女は奴らの捕虜なんだろう？ 標的えものの捕虜は所有物扱いになるはずだ。ぶんどった所有物は戦利品として全部役人に引き渡すのが鉄則だぜ？」

「それはだめだ、ホイズ。キオラは《言語理解能力者》ピカラなんだ。《言語理解能力者》ピカラは珍しい。役人に引き渡したところで、研究者のおもちゃにされるのがオチだ」

「そんなの俺たちが知ったこっちゃねえだろう。何でそこまでその女を庇うんだよ、ロッド」

「元の世界に返してやることは出来ないのかい？」

そう提案したのは、キオラをのぞいたこの中での唯一の婦人だった。

「来る事が出来たんだから、帰るのだって出来るはずだろう？」

「それは難しいだろうな。世界を渡る術を持つのは役人共だけだ。あのカエルがどうやってその術を知ったのかは知らないが、今度世界を渡るなら正規のルートを通らないと、キオラの体が持たない」

「なら殺せ」

一人が言ったのを皮切りに、あちこちから「役人に渡せ」だの「殺せ」だのと言った声上がる。

それしか選択肢がないのか、と言いたいぐらいだ。

「なあ、ちょいといいかな？」

静かな声で彼らを遮ったのはグリーンである。

「俺あ今朝方、役所に行ってきたんだがよ。そこで聞かれたんだよ。『《能力者》の女を知らないか』てな。奴らが研究やら趣味やらで《能力者》を集めていたことは、既にロッドが報告書に書いて提出している。ロッド達が脱獄する際に解放した捕虜達の中には、《能力者》の女も何人か居たはずだ。あの実利主義の役人共が、わざわざキオラを元の世界に帰してやろうと思うほど親切だとも思えねえ。なのになぜ？　なあんで今更そんなことを聞くのかね？　おかしいだろ？　標的えものが《能力者》を集めていることはそう珍しい事じゃない。そんな中には珍しい《能力》を持つ者も大勢いるだろう。むしろ珍しいからこそ、標的えものは《能力者》を集めたがる。それが今回に限ってわざわざそんなことを聞くなって事はだ、役人共は何か企んでるんじゃないかと俺は思うね」

「何かって？」

「そこまでは知らん。一応理由を聞いては見たが、『おまえ達には関係ない』としか言わなかったしなあ」

「どうしてあのカエルがキオラを召喚することが出来たかと言うのも謎だな」

とロッド。

「召喚するにはそれなりの知識と技術がいるし、どうして召喚したのがキオラなのかというのも気になる。確かに《言語理解能力者^{ビカラ}》は珍しいが、この国を探しても全く居ない訳じゃない。召喚術は違法だし危険だ。そんなリスクを冒すくらいなら、国中を回って連れてきた方が遙かに安全だろう？ それに、役人共がキオラを探す理由もない」

「裁判の時の証拠にするためってのはどうだい？」

別の男が言う。

「それはないだろうな。俺たちが調べていた段階で分かっていたことだが、奴が召喚したのはキオラだけじゃないらしい。他にも何人かを召喚している。ただし、こいつ等は《能力者》ではないし、成功したかどうかも分からない。おそらく失敗したんだろうな。見るに堪えない死体が砂漠の外れに捨ててあったよ。まあ、中にはまだ生きてる奴も居たけど。召喚術は実行すると時空に跡が残るから、すぐにそれと分かる。だがそこを、いつ何が通ったかまでは分からない。だから役人共には死体の報告だけをしたんだが、裁判の証拠にするにはそれだけで十分なはずだ。わざわざキオラを探す必要はない」

沈黙が降りる。

「お前、今の自分の状況はどんくらい理解出来てる？」

ロッドに聞かれて、鵜はここに来て初めて口を開いた。

「えーと、ここが自分の居た世界とは違う異世界で、蛙人間が居るぐらいオレの常識から外れた所ってことぐらいかな？」

「の割にはずいぶん落ち着いているなあ。普通、異世界に来たりしたらもっと取り乱すんじゃないか？」

「そりゃあ、最初の頃はびっくりしたさ。正直今でも頭ん中じゃ得体の知れないものがお手々つないでラインダンス踊ってるよ。でもこっちに来て最初に見たのがあの蛙人間だったからなあ。かえって異文化に抗体が出来たというか……なあ」

そういう鵜の目はどこか遠くを見つめている。

「あゝあれなあ。ぶっちゃけ、こっちでもあそこまで気色悪いのはそういないから安心しろ」

そういわれても見てしまったものはしかたない。

もう蛇だろうがナメクジだろうがどんと来い、と言う心境だった。それだけあの蛙人間達のインパクトが強かったのだ。

「話を元に戻そうか。つまりキオラはこっちのことはほとんど分からないに等しいと考えていいんだな？」

「ああ、そうだな」

実際、すでにこの一週間で双方の文化の違いによるカルチャーショックを、鵜は何度も体験している。

「そろそろ結論を出そうかな」

村長が言い出した。

「グリー。おまえはどうするべきだと思う？」

「ひとまず様子を見るべきだろうな。キオラを下手に動かしたりせず、この村において暫く様子を見ておいた方がいいと思う」

「ロッドは？」

「右に同じだ。しばらくは役人共の動向にも注意しておいた方がいいだろうな」

「そうか：他には何かあるか？」

多少ざわめくが、何の意見も出なかった。

「では、採決をするぞ！ キオラを役人に引き渡した方がいいと思う者！」

ちらほらと手が上がる。

「村において様子を見た方がいいと思う者！」

婦人を筆頭に、これには半数近くが手を挙げた。

「これはあんまりやりたくはないんだが……殺した方がいいと思う者！」

一人分の手が上がった。

しなびた老人だ。

「理由を聞こうか？」

「足手まといだ」

もつともな意見ではあるが、これは村長が即座に却下した。

「それを踏まえた上での採決だ。今更そんなこと言わないでくれ、長老」

黙り込んだ老人を無視し、村長はみんなを見渡す。

「手を挙げてない者は中立ということでもいいんだな？ ……ではこれより後、キオラを村の元に迎え、表向きは村の一員として扱うこととする。ただし役所に報告することはない。あくまでも今の彼女の立場は要観察の状態であり、事がはつきりするまではロッドが身柄を預かる。なお、このことは各代表が村内にのみ伝達し、決して村外には漏らさないように注意しろ。以上、解散！」

オウツ、という返事は、これまた更に彼らのガラの悪さを際だたせる。

やがて男達はどやどやと集会場から出て行った。用が済んだので鵜たちも出ようとしたところ、扉のところで先ほ

どの婦人に呼び止められた。

「初めまして、キオラちゃん。アタシはマーサ。この村の婦人会の代表をやっているんだ。よろしくね！」

いかにも農家の女将さんと言った風の彼女は、にっこりと笑ってあかぎれだらけの手を差し出した。

「こっちの世界は元の世界とは色々と勝手が違うだろう？ 何か困ったことがあったらいつでもアタシの所に言いおいで。家は誰かに聞けばすぐにわかるから。ホントはルーチェが全部教えられたらしいんだろけど、彼女は良いところのお嬢様で、この村にとっては部外者よそものだからねえ……おっと。悪かったよ、ロッド。分かったからそんな怖い顔で睨まないでくれ。ともかく、アタシはアンタを応援してるからね！ 頑張りな！」

言いたいことだけを言うと、彼女は特に鵜の返事を聞くわけでもなく、じゃあね、と言いつつ残して去っていった。

嵐が去っていった後は沈黙があると相場が決まっている。今回も例に漏れなかった。やがて鵜が口を開く。

「なあ、もしかして老人会とか消防団もあったりする？」

「青年団や農協組合とかもあるぞ」

「……そうか」

思わず遠い目をしてしまう。

どこの世界でもそういう組織は存在するらしい。

そしてそこに所属する人たちも、それとなくそんな雰囲気醸し出している。

「面倒見の良さそうな人だな」

「ああいうのはお節介って言うんだ」

そう言うロッドをはじめとする三兄弟の顔は、疲れ切っている。恐らくこれまでも色々と言われてきたのだろう。

大の男達がそろってそんな顔をするので、鵜はおかしくてたまらない。

笑ったらさすがに失礼だろうと思って必死で笑いをこらえていると、村長がふと思い出したように言った。

「ああ、そうだ。キオウ、そう言うわけだからあまり村の外には出るなよ？ 特に村に人が来ているときは、出来るだけ家から出ないようにしろ。村の奴らはともかく、よそ者は何をするか分からないからな」

「分かった。ロッド、暫く世話になる。今更なんだけど、改めてよろしくな」

鵜が手を差し出すと、ロッドはその手を取った。

「こちらこそよろしく。ルーチェが喜ぶだろうな。お前のことをずいぶん心配していたから」

心配、というものをされたことは、生まれてからこれまでで両手の指の数にも満たない。

母親は鵜のことを心配したりしなかった。

鵜は気恥ずかしさを隠すため、軽くうつむいて肩をすくめた。

Sect. 8 身上会議の行方（後書き）

H23. 8. 15 改修

普段から荒っぽいことをしているので、面子も強面ばかりです。頭を使うよりも口よりも真っ先に手が出るような連中ばかり。鶯ちゃんも大概ヤンキーやってみました。が、チンピラとヤクザでは格が違います。

S e c t. 9 休息（前書き）

コスズガモ
【小鈴鴨】

カモ目カモ科ハジロ属。

体長約42cm。

北アメリカ大陸北部（アラスカ、カナダ）で繁殖し、冬季は北アメリカ中部から中央アメリカ、カリブ海の島嶼に渡り越冬する。

日本では迷鳥として冬季、北海道、宮城県、東京都、神奈川県、愛知県などで記録されている。

出典…W i k i p e d i a

Sect. 9 休息

例の会議の後、あまり出歩くなと言われたにもかかわらず、鵜はぶらぶらと外を歩いていた。

すると、きらりと光るものが視界の隅をかすった。

そちらに顔を向けると、そこにいたのは一人の少年――ユキだった。

剣を握り、汗を掻きながら一心に素振りをしている。

「ユキ！」

声をかけると彼は素振りを止め、こちらを向いた。

「キオラ！　もう良いのか？」

何が？　とは聞かない。

鵜は村に来てから一週間、高熱で意識を失うほどの重病人だったのだ。

さらに体力が戻ったのは一週間後だったから、彼に会うのは実に二週間ぶりだった。

「ああ。あ、そうだ。ありがとうな、足の手当」

「いや、別にたいしたことはしてないよ」

すっきりとした短髪だが、両サイドだけ長く伸ばした髪はダークブラウンで、茶色の瞳は大きくて濡れている。

はつきり言って年上のお姉様受けするような可愛らしい顔立ちを

していた。

真面目そうな性格も良いかもしれない。
つい苛めたくなりそうだ。

「剣の稽古か？ えらい熱心だな」

「うん……」

会話が終わる。
もっと続けやがれ！

「独学か？」

「いや、ロッドに習ってる」

「ロッドに？ あいつ、強いのか？」

「うん、元々彼は軍人だったし、そこでも剣の腕はそこそこ立っ
たらしいから」

「へー、軍人」

どうも今ひとつピンと来ない。

日本じゃそんな言葉は死語に等しいからだ。

自衛隊に所属する ” 自衛官 ” なら通じるだろうが。

日が暮れかかって辺りは夕焼け色に染まっていた。

それぞれの家から、夕食の良いにおいが漂ってくる。

鵜の所にも、ロッドが夕食ができたと呼びに来た。

今日も一日が終わろうとしている。

S e c t. 9 休息（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 5 改修

今回はちよつと短め。

ユキは？月のお氣に入ります。
だっていぢめると楽しいし！

Sect. 10 詰め込み授業（前書き）

【姫羽白^{ヒメハジロ}】

カモ科カモ目ホオジロガモ属。

全長32～39cm。翼開長54～61cm。

北アメリカ北部で繁殖し、冬季はアラスカ南部からアメリカ西部、南部に渡り越冬する。

日本では、まれな冬鳥として北海道、本州北部で記録されている。

出典…Wikipedia

Sect. 10

詰め込み授業

東方系ロナグ人、《盗族》。

ロッドたちの種族を生物学的一(?)に分けるとそういうことになるらしい。

この世界には大きく分けて、東西南北と中央という五つの行政区分がある。

東方系というのは読んで字のごとく、東方に住む種族ということ。ロナグ人は人間の一種で、寿命が200年以上の長命種の人間をいう。

ちなみに、寿命が100年前後の短命種の人間はスホルト人という。

この二種の人種はこの世界では最も多い生物で、二つ合わせて全体のおよそ3%に及ぶ。

少ないって? とんでもない!

極少で個体数が一桁の種族だってある。

これでも多いほうなのである。

この世界にはそれだけ多くの生き物が生息していることだ。

その内、人間は約15%足らず。

ロナグ人やスホルト人以外の人種は、また違った生態を持っているらしい。

《盗族》とは、グリー曰く「役人の下請け業者」だ。

説明しにくいので例を出して言うが、例えば、横領や賄賂などで不正に儲けている官吏や豪商などがいたとする。

大抵は役所が頑張って強制執行をしたりして解決するのだが、その手を通じない時がある。

そんな時、ロッドたち《盗族》が武力をもって標的えものを襲い、不正

の証拠となる物をつかっばらってくるという寸法だ。

報奨は、換金された戦利品の中から数割が支払われる。

ぶっちゃけた話、本来あってはならない超法規的措置なのだが、悲しいことにそれがたびたび起こってしまうのが現実だ。

ここまででわかるとおり、この世界の生物はなかなか個性的である。

参考のために例のガマ族を上げると、「西北系獣人、ガマ族」とされる。

「西北系」というのが出てきたのでついでに述べておく。

この世界では過去に大規模な戦争が二度あった。

一度目の『第一次政変戦争』、そして二度目の『第二次政変戦争』である（『第〇次政戦』という風に略す）。

第一次政戦は戦争というよりも一方的な革命だったらしいが、第二次政戦はそれはひどかったらしい。

その二度の戦争の首謀者たちの出身地が西北。

昔から反政府運動が活発だった土地である。

以来、戦争が終わってもそこは一種の独立国家のようになったしまったというわけだ。

「ここまでで何か質問は？」

「ありません」

鵜が答えると、ルーチエが鷹揚にうなずいた。

「結構です。ではキオラさん、休憩がてらお茶にしましょうか」

鵜は今、ルーチェを師としてこの世界のことを学んでいる。
やさしくて美人なこの臨時教師は、知的で明哲だがスパルタだ。
集会場の会議からすでに三日が経っていた。

この世界の生活水準レベルは、中世ヨーロッパ程度。

とはいえ、医療技術は元の世界以上に発展しているし、超自然現象もここでは当たり前のこととして受け入れられている。

公的な専門の研究機関があるほどだ。

科学技術もないわけではない。

電波を飛ばしてナンボの携帯やセンサーなどはともかく、車や冷蔵庫なども彼らは知っていた。

知ってはいるが、使ってはいない。

彼らは文明機器の便利性を知りながら、あえて自然と共存する道を選んでいるのだ。

電波を使うものは単純に使えないらしい。

電波を飛ばすのに環境が合わないそう。

やってみた者もいるようだが、雑音ノイズが混ざって大変なことになったという。

せっかくなので、衣食住の説明をしておこうと思う。

まずは衣。

鵜は庶民のものしか知らないが、なんだか元いた世界の様々な国の特徴が入り混じっているように思う。

上下に分かれていて、どちらも青緑がかった灰色に染め、汚れが目立ちにくくなっている。

和服のように前で合わせる形になっており、男女で違うのは袖の形だけ。

男物はストレートだが、女物は肘のあたりから徐々に袖口が広くなっている。

下は、男は少し長めのズボンを足首でくくり、女はふんわりとし

た長い巻きスカート。

共にゆったりとした作りになっている。

その上から袖のない上着を着て帯を締める。

上着の丈の長さは女物の方が長い。

スカートが広がるのを防ぐためだ。

色は特に決まっておらず、それぞれが思い思いの色を着用している、襟には独特の刺繍をしていた。

質素ではあるが、色合いは華やかだ。

次に食。

これはもう無国籍。

刺身から野菜のサラダまで、多少の見た目は違っても、それは鵜が今まで慣れ親しんできたものとそう大差ない。

食器もしかり。

そして住。

建築資材が土地によってまちまちなため、地域によってかなり違うそうだが、鵜が居候しているセタ村では、壁は石造りに天井は木でできていた。

東方は森林が多く、木の調達には困らない。

平原や草原も多いため、遊牧などをして暮らしている民族も居る。

樹上で野生の獣のように暮らしているものたちもいれば、高級ホテル並みの設備のあるところもある。

実に多種多様である。

ぼんやりしている鵜の目の前に、そっと陶器のカップが置かれた。中には薄く色づいた真珠色の液体が、湯気を立ててなみなみと注がれている。

“コア” という飲み物で、同名の植物を煮詰め、その煮汁をこして作った、この地方独特の飲み物である。

かすかにミントのような香りがして甘い。

そのカップを手にして、鶯は無意識のうちにため息をついた。
向かいに座ったルーチェが心配そうな顔をする。

「どうしましたか、キオラさん？ 何か心配事でも？」

「ああ、大したことじゃないんだ。ただ、この世界はオレが元いた世界とはあまりにも違うから」

とたんにルーチェが柳眉を逆立てた。

「『私』」

「へ？」

「『私』です、キオラさん。女の子が『オレ』なんて言うものはありません！」

「あ、ああ。『私』ね。わたしわたし……」

最近彼女は鶯の一人称を、『オレ』から『私』に変えさせようと頑張っていた。

ぶつぶつとつぶやきながら鶯は、やっぱり怒っても美人は美人だなあ、などと考えていた。

S e c t. 10 **詰め込み授業（後書き）**

H 23. 8. 15 改修

設定ばかりで会話がないと飽きますね。
自分で書いておきながら読んでて思いました。

Sect. 11 些細で大きな変化（前書き）

ニシコクマルガラス
【西黒丸鴉】

スズメ目カラス科。

カラス族では最小（体長34～39cm）の種の一つ。

北アフリカからヨーロッパのほぼ全域、イラン、北西インドおよびシベリアと、広範囲に分布している。ステップや森林、耕作地、牧草地、海食崖、都市部と生息地域も幅広い。

日本では1986年と1996年に北海道で観察されただけの迷鳥。

出典：Wikipedia

Sect. 11 些細で大きな変化

「なんじゃこりゃあ!」

ある日、朝から鵜は鏡を目の前にして絶句していた。

鵜は自分の鏡を持っていないため、この日久しぶりにルーチェに鏡を借りて自分の顔をのぞいてみたわけであるが。

「な、なあ。この鏡に映ってるの、オレだよなあ?」

思わず近くにいたロッドに確認してしまった。

「はあ? なに言ってんだ、お前?」

呆れながらも、彼はひよいと鏡をのぞき込んだ。

鵜は鵜で、何かを確認するかのように顔や頭をぺたぺたと触っている。

「別にいつも通りのお前だぜ? 一体どうしたんだ?」

「……色が違う?」

なぜか疑問系で、鵜は呆然とつぶやいた。

「色?」

鵜は前髪を書き上げて、髪が生え際を指さした。

「ほら、ここ。色が変わってる。髪だけじゃない。目も、肌もだ。こんなオレじゃない」

元々鵜は生まれつき色素が薄い。

髪や目は茶色だし、肌は急な日焼けには神経質にならないといけないほど白かったが、時に気にしなかったおかげで鵜の頬には転々とそばかすが浮かんでいる。しかし。

「灰色か、こりゃ？」

ロッドの言うとおりに、新しく生えてきた髪は、茶色ではなく灰色だった。

瞳も同じだ。

しかも奇妙なことに、右目だけは灰色一色に染まらず、虹彩の右半分は茶色いままだった。

肌は白さに磨きがかかって、透明感すらある。

「瞳に星が入っているな」

不意にロッドが言った。

「星？」

「灰色の中に白い”斑”が入っているだろう？」

「……ホントだ」

「肌もちょっと特徴があるみたいだ。そういう目や肌は、ここじゃあ”北”に多いんだがな。お前、本当に異世界人か？」

そういわれても鵜には答えようがない。

ここと、元いた世界しか知らないのだから。
しかしその前に。

「ロッド、顔が近い」

鵜の瞳を、鏡越しではなく直接のぞき込んでいるロッドの顔は、互いの鼻が触れそうなほどに近い。

朝で、しかも家の中なので、普段掛けている眼鏡を掛けていないからだ。

美形のどアップは大変結構だが、これ以上は目に毒だ。

指摘されたロッドはというと、今思い当たったという風に瞬きすると、「わりっ」と言って苦笑しながら鵜の頭をかいぐりまわした。

「いい加減慣れろよ、お前」

そういわれても、相手はこれまで短い人生であった中で一、二を争う美形だ。

そう簡単に慣れるものではない。

「髪はともかく、目も肌も、キオラさんがここに来たときからその色でしたよ？」

食卓に食器を並べていたルーチェが言う。

「灰色だった？」

「ええ。元はどんな色だったのですか？」

「茶色だよ。ていうか栗色かな。目も茶色と言うよりヘーゼルだって、誰かが言ってた。肌は元から白かったけど、ここまでじゃなかったな。なあ、こんなに急に色が変わることって、あるのかな？」

「なくはありませんね。精神的にショックを受けたり、頭を強く打ったりして髪などの色が変わってしまうことがあります」

「うーん」

変な病気だったらどうしようなんて、らしくもないことを考えてしまう鵜であった。

S e c t. 11 些細で大きな変化（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 5 改修

片方の瞳が左右で色が違うって、本当にあるみたいですよ？
さすがに灰色と茶色はやり過ぎでしょうが……

Sect. 12

頭から出る煙と息抜き（前書き）

【深山鵒】ミヤマシトド

スズメ目ホオジロ科

体長約17cm。

アラスカ、カナダ、アメリカ北部と西部で繁殖し、冬季はアメリカ南西部からメキシコに渡り越冬する。アメリカ西部では周年生息する。

日本では迷鳥として、北海道、群馬県、千葉県、埼玉県、東京都や日本海側の島嶼（飛島、舩倉島）で記録されている。

ちなみに、『シトド』というのはホオジロの異称である。

出典…Wikipedia・広辞苑

Sect. 12

頭から出る煙と息抜き

先に、この世界は東西南北と中央の五つに分かれていると言ったが、中央を除く四方は、さらにいくつもの区画に分けられている。

東方は、その土地のほとんどを森や山で覆われている。

あとは平地だ。

農業、林業、牧畜業などが盛んで、その暮らしぶりには何となく親近感を覚える。

民は皆、穏やかで争いを好まない性質であるといわれる。

対する西方は、土地の60%が砂漠であり、そうでないところには荒野が広がっている。

作物は育たず、人々の生活は貿易によって成り立っている。

神経質で生真面目な頑固者が多く、その反面、学者や政治家は西方出身者が多いとされる。

また手先が器用で、芸術家も多い。

基本的に西と西北は区別される。

西が中央の勢力下にあるのに対し、西北は半ば独立国家と化している。

理由は先に述べたとおり。

地図を見ると二つの違いがはっきりとわかる。

通常、区分けは住んでいる民族や地形などで分けられるが、西北はまず地図があり、その上で縦横に定規で線を引いたような分け方になっている。

戦争中の独裁政権だった時の名残だそうだ。

南方は湿地が多い。

鵜が元いた世界でいう、中南米あたりを想像するとわかりやすい。人々は陽気で大らか、タフで喧嘩も強い。

軍人は約半分をこの南方出身者で占められる。

強すぎる力を制御するため、唯一徴兵制のある地方としても知られている。

製鉄の技術に関しては随一という。

北方は閉ざされた空間というイメージが強い。

高くそびえる岩山が延々と連なり、水辺も多いため、水産業や鉱山業が盛んだ。

しかしその地形のせいで部族間の行き来は少なく、西とはまた違った意味で神経質で保守的、閉鎖的な民族が多い。

物を生産するにあたって、主に原材料を産出するのは北と東、加工は南と西が行う。

加工に関して、南は大きなものを、西は小さくて細かいものを作るのが得意とされる。

売るのはもちろん西の商人たちだ。

とはいえ、基本的にはほとんどの民は自給自足が多いため、もっぱら買い手は中央の者たちが中心となる。

中央には国の行政機関が集まっており、正規軍の本部もここにある。

四黒神嶺しこくしんれいという群山があり、この山の麓には町があるという。下級官吏たちの邸宅だそう。

山は幾重にも重なり高く切り立った岩山で、その山のあちこちの山腹を削って、ありとあらゆる研究所から役所が建てられている。

頂上には宮殿おうがあって、そこには皇が住んでいるらしい。

今まで触れなかったが、この国には四人の皇おうがいる。

それぞれが東西南北に相応しており、この世界の始祖にして、万物の創造者であるという。

こういふとまるで彼らが神のように聞こえるが、その通り、正真正銘の《神》である。

政府の公式発表によると、便宜上、この世界は《神界》と呼ばれ、今まで鵜が暮らしていた場所は《地上》という。

《地上》は無数にあり、それぞれに何らかの生命体が存在する。

《神界》にすむ生物は姿かたちに関係なく、総称して《神族》と呼ばれる。

《地上》には《地上の民》が住む。

他にも《天界》や《冥界》があるらしいが、普段生活している分には全くかわりがないので覚える必要はないと言われた。

話を戻そう。

この国には四人の皇おうがいる。

かといってこの国の政治体制が王政であるかというところではなく、宰相を頂点に置いた民主政権である。

しかし完全な民主性とは言えず、わずかに王政の名残を残していた。

皇おうは政には参加せず、また決して民衆の前には姿を現さない。

皇おうにはそれぞれ何人かの子供がいて、彼らはひつくるめて皇族おうぞくと呼ばれるが、これも実際のところどうなのは正式には発表されていない。

この国では皇族おうぞくは徹底的に秘匿される存在だ。

神格化されているといっても過言ではない。

民の心の拠り所、というわけだ。

役人の間でもその存在は信じられていない。

かくいう鵜も信じていなかった。

現在鵜はテーブルの上に突っ伏している。
今までつらつら並べてきたことは、全て ”今日の分” とされるルーチェの授業内容だ。

情報量の多さに、さすがの鵜も頭から煙を出してぐったりしていた。

鵜が居候している村は東方にある。

村は ”セタ村” という。

東方第十三区メタルシアにある村だ。

人口は200人余り。

先に述べたとおり、《盗族》である。

ルーチェは医師の資格を持っている。

そのため、よく村人たちがけがや病気を診てもらいに来る。

今回も、近所の若奥さんが産気づいたとかで、大急ぎで出かけて行った。

「専門は皮膚科なのですけれど」と本人は困ったように笑う。

外ではロッドが鋤をふるって畑を耕している。

二人とも、きれいな外見からは想像できないほどパワフルだ。

することもなく暇なので、鵜は外に出てぶらぶらと散歩をしていた。

素性のはっきりしない鵜に対して、村人の態度は決して好意的とはいえない。

鵜がこの村でできることは少ない。

火をおこすことはおろか、まき割りさえ満足にできないとなれば、彼らの態度もうなずける。

鵜はこの世界に来て、今まで自分がどれほど楽な方向に発達した世界で生きてきたのかを身に染みて知った。

そんな鵜の数少ない友人といえば……

「おー、ユキ！」

「キオラ、どうしたの？　いつもならこの時間はまだ勉強中じゃなかった？」

「ルーチェが、フェリオン家の若奥さんが産気づいたとかでそっちにいったから、しばらく息抜きに散歩」

ユキは剣を磨いていた。

何度かユキとロッドの稽古を見学させてもらったことがあるが、ユキは一度もロッドに勝ったことがない。

本人はそれがひどく悔しいらしく、ロッドに負けるたびに顔を真っ赤にして再戦を挑んでいる。

鵜はそれにヤジを飛ばしているのだが、剣に関しては素人の鵜が見る限り、ユキは決して弱くない。

ロッドが強すぎるのだ。

「なあ、ユキ。前からちょっと聞きたいことがあったんだが」

「聞きたいこと？」

「ロッドとルーチェのことなんだけどさ」

「あの二人がどうかした？」

剣を磨く手を止めて、ユキがこちらに向き直った。

「こう言っちゃあなんだが、あの二人を見てると、なんだかこの村には不釣り合いな気がしちまうんだよ。特にロッドはさ、元は軍人だったって話だけど、この村で生まれたにしては華がありすぎる

ような気がするんだ。ルーチェだって、もつとこう、深層のお嬢様
っての？ 屋敷の奥なんかで、使用人たちに傳かすかれてる方が似合っ
てるような。なんてーの？ 場違い？ みたいな？ 村人たちに混
じっていると、違和感ありありなんだよな、あの二人」

二人だけではない。

あえて名を上げなかったが、ユキでもある。

しかし、ロッドとユキの華やかさと、ルーチェの華は違う。

「ルーチェは、元は別の土地のお金持ちの娘だって聞いたけど？
ロッドがこの村で浮きまくってるのは、彼が《能力者》だからだ
よ」

「それ、《能力者》ってよく聞くけど、結局それって何なんだ？
そもそも《能力》そのものが、あたしにはよくわからない」

「《能力》って、時々それが特別すごいことのように言われたり
するけど、そもそも生命力のことなんだよ。だから《能力》そのも
のは、実は誰もが生まれつき持つてるものなんだ。《能力者》はそ
の《能力》が常人より強くて、しかも自分の意志で操れる人のこと
を言うんだよ」

「ロッドがその《能力者》だって？」

「キオラもだよ。ついでに言うと、俺もそう。キオラは《言語理
解能力》だったよね。俺の《能力》は《千里眼》。ロッドは《分身
》の《能力者》だ」

「人によって違うんだ」

「当然。使い方も人によって違う。キオラは便宜上、常に《能力》を解放している状態だろうけど、俺やロッドの《能力》は日常生活では必要ないから、普段は隠してるんだ」

「隠す？　なんで？」

ユキは苦笑いを来て軽く肩をすくめた。

「生き物って言うのはさ、本能的により生命力の強いものに惹かれるらしいんだよね。【生命力の強さⅡ《能力》の高さ】だから、俺たち《能力者》は人混みを歩くとすぐ目立つ。常人よりも強い生命力を完全に隠し切るには、かなり強力な意志の力と訓練がいる。加えて《能力者》には美形な人が多いから、たとえ隠していても、どうしても非《能力者》は《能力者》に魅せられてしまう」

「ユキも、隠してるんだ」

「一応ね」

鵜はそれを聞いて、ユキをじっくり観察してみる。

容姿は先に挙げた通り。

どちらかというと言童顔で、かわいらしい顔立ちをしているため、どうしても同年代に見てしまいがちであるが、こう見えて彼は48歳なのである。

短命種（と思われる）の鵜から見れば、立派な中年親父といってもいい年齢であるが、彼らの内では成人は50歳らしい。

年齢はおいといて、外見だけを見れば十分年頃の女の子たちにモテるだろう。

「キオラ？」

「隠すの、やめてみるよ。その ” 生命力 ” って言うの、どんなのか見てみたい」

「か、勘弁してくれよ！ 言っただろう？ 《能力》^{ちから}を解放すると目立つんだって！」

「いいじゃねえか。あたしはその ” 生命力 ” てのを見たことないんだから。あたしに身を以て教えると思ってさ！」

「いやだって！！」

「そう言わずに！」

粘ること数分、ユキは「ちょっとだけなら」といって、渋々《能力》^{ちから}を解放して見せてくれた。

ここだけの話だが、いやがるユキの顔を見るのが楽しくて、半分ほど嫌がらせで持ちかけた依頼であることは内緒だ。

「きれいだ」

《能力》^{ちから}を ” 解放 ” して見せてくれたユキに対して、鶴は思わずつぶやいた。

風もないのにユキのダークブラウンの髪がふわりと揺れたかと思うと、全身まわりつくようにして ” 生命力 ” とやらが彼の周囲に満たされる。

目で見えるわけではない。

ただ、何かが違うのだ。

強いて言うならそう、野生動物の持つ、あの堂々とした威圧感に似ている。

視線が釘付けにされてしまい、よそ見をするのがもったいないような気さえする。

しかしユキは、すぐにその《能力》を ” 封じて ” しまった。

「あ、何で隠すんだよ!」

「ちよつとだけって言っただろ」

「もったいぶるなよ、けちだな」

ごねる鵜に、ユキは顔をしかめる。

「けちって……別に見せ物じゃないし。それにキオラ、ロッドが探してるみたいだったよ? 何も言わずに出てきたんじゃないの?」

それにはキオラも焦った。

「やべえ、長居しすぎちゃったかな! ありがとよ、ユキ! オレ、帰るわ!」

「一人称が元に戻ってる。『オレ』じゃなくて『私』だろ? 気をつけてね!」

小走りに走りかけていた鵜は、ユキの指摘に一瞬しまったという顔をして肩をすくめたが、思い直してくりと振り返ると、ユキに向かつて大きく手を振り、また掛けだしていった。

日は半分ほど沈み、オレンジ色に染まった家々の煙突からは、夕食を作る煙が立ち上っている。

鵜がうちに帰ると、ロッドが玄関口に立っていた。

「さっきユキの気配がしたが、何かあったのか？」

「いや、あたしが《能力》を解放するのを見たことがないから、ユキに頼んで見せてもらってたんだ」

ロッドはそれで納得したようだった。

「やっぱり《能力》を解放すると、離れていてもわかるもんなんだ？」

「絶対ってわけじゃない。ただ、ユキの気配はよく知ってるし、知っている気配は追いやすい。《能力者》じゃないやつには分からないみたいだな。《能力》の気配に関しては、《能力者》のほうが敏感だ」

「へ」

「さっき見に行ったら、ルーチェはもうしばらく帰ってこれなさそうだから、俺たちだけで先に晩飯にするぞ」

「じゃあ、あたしもなんか作る！」

火おこしや薪割りは無理でも、料理だけは自信を持つてできる。

二人は連れだって家の中に入っていった。

とある日の夕方の出来事である。

Sect. 12 頭から出る煙と息抜き（後書き）

H 23・8・15 改修

一章終了です。

つらつら並べてみましたが、東西南北はそれぞれに特徴があり、中央は典型的な首都を想像して下さい。

王様（皇様）は滅多に国民とふれあいません。

ふれあってもいいけれど、事情があつてそんなことをすれば色々と弊害が出るみたいです。

なんとって《神》ですから。

S e c t. 13 悪夢の始まり（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 13 悪夢の始まり

そろそろ、鵜がこの ”セタ村” に来てから一年が経とうとしていた。

この日、村を一頭の早馬が駆け抜けた。
一年近くこの村にいれば分かる。

あれは役所からの仕事の依頼の使者だ。
しかし早馬を使うことは滅多にない。

よほどのことがあったらしい。

使者は、即座に村長の家へと通された。

ロッドは元軍人だった経験を生かして、この村では作戦隊長のような立ち位置にいるらしい。

そのため、今回の仕事の打ち合わせに呼び出され、帰ってきたのは日付が変わってからだった。

「何かあったのですか？」

眉間にしわを寄せて、帰宅以来ろくに口も聞かず、ずっと難しい顔で考え込んでいる夫を見て、ルーチェが心配そうに聞いた。

ロッドは少し逡巡した後、重々しく切り出した。

「今回の仕事だが、俺も出ることになった」

ルーチェがハッと息をのんで青ざめた。

村の重鎮とも言える彼は、滅多に現場には出ない。

それが今回は出るという。

「やっかいなことになりそうか？」

「ああ。この間依頼された仕事を、再びやってくれと言われた。相手が情報にはなかった傭兵を雇っていたらしく、先発組は全滅したそうだ」

「全滅!!」

この仕事は常に死のリスクがつきまとう。

標的はくすねた財産を守るために私兵や傭兵を雇っている場合が多く、それに対抗するために、この村の男達は幼い頃から剣術や弓術と言った武術を学ぶ。

おかげで実際に死亡する例はほとんど無く、怪我をする程度で済むのだが、全滅という話は聞いたことがない。

鵜とルーチェは顔を見合わせた。

「かなりでかい仕事^{ヤマ}になりそうだ。この村の男手はほとんど総出になるだろう。いつまでかかるかもわからない。ルーチェ、その間家を頼むぞ」

「……はい」

答える彼女の声は震えていた。

「相手が傭兵を雇ってるって、どうして役所は知らなかったんだ？ それだけ強い傭兵集団なら、逆に真っ先に分かってても良いはずだろ？」

そう、気になるのはそこである。

命をかけている以上、そういった情報は大切だ。

役所もそれを分かっているため、相手の防御能力関係の情報は、

依頼書の優先事項として取り扱う。

「無名の集団だったんだ。素性もはっきりしないような奴らばかりで、人数も注意しなければならぬほど多くはなかった。しかし、実際は奴らは少数精鋭部隊だったんだ。わずか50人弱の兵の中に、能力者が7人もいた」

「多いな。良くもそれだけ集めたものだ」

能力者は産まれにくい。

種族的なものとはかく、普通は一つの村に一人いればいい方だ。このセタ村には、250人にも満たない住民中、能力者は鷯を含め、ロッドとユキの三人しかない。

これでも多い方なのだ。

50人に7人というのは多すぎる。

「なあ、ロッド。死ぬなよ？」

そう言うのと彼はにやりと笑って鷯の頭を小突いた。

「生意氣言^{ナマ}ってんじゃねえよ。俺を誰だと思ってんだ」

翌朝、彼は村長自ら率いる男達と共に村を出た。

見送りには多くの人々が来ていた。

仕事に行くのは皆、働き盛りの男たちばかりだ。

結果、この村に残るのは、女子供と年寄りしかいなくなる。

村の掟で、別れを”惜しむ”ことは禁止されているため、見

送る側は無理矢理笑顔を作って手を振っている。

しかし、内心は穏やかではないだろう。

中には先発隊で殉職した者の家族もいるのだ。

始終笑顔のルーチェの隣で、鵜は素直に笑うことができずにいた。

「後を頼んだぞ、グリーン」

「任せといてくれ、兄貴。無事で帰ってこいよ」

村長も出るため、彼が留守の間の村の責任者は、補佐役のグリーンが任されることになっていた。

馬の上から、仕事に行く男たちが複雑そうな面持ちで、見送る家族たちを見つめていた。

背筋をぴんと伸ばして馬に乗るロッドは、その中でもひととき目立った。

鵜の不安そうな顔を見ると、軽く苦笑して馬を寄せる。

「なんて顔してんだよ」

「だって」

「別に戦争に行くんじゃないんだから、そんな深刻に考えることはねえよ」

「……うん」

ロッドは手を伸ばして、鵜の頭をかいぐり回す。

「ほら、笑ってみ？」

言われて、表情筋を総動員させてぎこちない笑顔を作る。それを見てロッドがきれいに笑った。

「無事のお帰りを待ちしています」

ルーチェが言った。

「これから収穫時だったのに、面倒なことだ。秋祭りまでには絶対終わらせるさ」

「決して無理はしないでください。無理をしてもしものことがあったら、大変ですから」

ロッドが返事をする前に、村長の号令がかかった。

「行ってくる」

馬の首を返して去ってゆくロッドを見るルーチェの目は、意外なほどしっかりとした輝きを放っていた。

S e c t. 13 悪夢の始まり（後書き）

H 23・8・18 改修

いきなりシリアスモード前回は。

断っておきますが、誰も死にません。

むしろ増えます。

増やすための作業がこの二章だと思って下さい。
あまり長くはありません。短いです。

S e c t. 14 退役の理由（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 14 退役の理由

普段賑やかな男達が居ないと、村の中はとても静かになる。

仕事に行ったほとんどの男達は働き盛りの者ばかりで、働き手を失った家は隣近所で助け合って生活する。

鵜が居候しているエイルナー家も例外ではなかった。

小さいとはいえ畑を持っている。

畑仕事はロッドの仕事だった。

女の細腕で力仕事は難しい。

村長の末息子が拙いながら手伝いに来てくれた。

年の頃はユキよりも少し下ぐらいだが、仕事に行くには若すぎるという理由で村に残った。

ユキも同じ理由で村にいる。

現在村に残っている男は、彼らのように若すぎるか、もしくは年をとりすぎているかのどちらかだった。

「キオラさん、お茶にしましょうか」

窓辺に座ってぼーっとしていると、ルーチェがそう声をかけてくれた。

彼女はここ数日で、心配のあまり少しやつれてしまったように見える。

元々儂げな印象だったのが、今にも消えそうなくらいだ。

ユキは他の家の力仕事を手伝っているため、剣の修行もここ最近
は休みがちだった。

しとしとと雨が降っているせいでもあまりなく、退屈で仕方無い。

そんな午後だった。

そう言えば、ずっと気になっていたことがある。

「ロッドって、確か元軍人だったんだよね？　どうして　”軍人だから”　という理由で年をとらないんだ？」

そう、それが聞きたかったのだ。

聞こう聞こうと思って、何時も機会を逃していた。

”軍人だったから”　と言う理由で、何故兄弟達と外見年齢がああも違うのか。

「それが役所勤めの特権なんですよ」

とルーチェは言った。

「役所勤めの方々は、ある一定以上の階級になると王の許可を得て、時間を止めてもらえるのです」

「時間を止める？」

「ええ。確か、文官なら五位以上、武官ならば少尉以上だったと思います。やはり、ある程度の官位の方は有能な方が多いですから、役所としても、より長く務めていただきたいのでしょうね」

「へー、そんなことができるのか。じゃあ、ロッドは少尉以上の位置にいたんだ？」

「ええ。少将でした。区軍の最高責任者です」

ちなみにこの国の行政区分は、大きい順に、中央・方（地方）・区・町・村の五つに分かれている。

そのうち軍を持てるのは、中央・方・区の三つだ。
鵜はヒュウ、と口笛を吹く。

「お偉いさんじゃん。何でまたこんな片田舎に」

そう言うとは何かルーチェは黙ってしまった。
聞いてはいけないことだったのだろうか。

「【カウサーレの知将】というのが通り名でした。戦略に長け、
人望も厚く、方軍からの引き抜きの話もあったのです。しかし、そ
れを妬む者もあって……」

「……はめられた訳か」

彼女はうなずいた。

「別区から、援軍の要請があったのです」

その区では、反王制派の一派が正規軍に対して、奇襲を主とする
ゲリラ戦で対抗していたのだという。

今までそんな戦いなどほとんど無かった土地で、いきなりの奇襲
に兵も民も疲弊しきっていたのだ。

始め、ロッドはその要請を断った。

頼むのなら近所の区軍に頼めと言うのだ。

慣れない土地での戦は負け戦になりかねない。

ロッドの所属していた【東方第四区・カウサーレ】と、援軍要請
のあった【東方第十八区・ゼガン】とでは、大きな差があった。

カウサーレが平地なのに対し、ゼガンは湿地が多い。

カウサーレ軍は湿地戦の訓練はしていない、と言うのがロッドの
回答だった。

それに対しゼガン軍は、『今は乾期で湿地はほとんど干上がってしまっているため、貴軍の任地と同じ条件で戦える』と返してきた。彼女は地図を見せてくれた。

地図を見ると、カウサーレとゼガンの位置関係がよく分かる。

北に隣接した、平地のカウサーレ。

北からも南からも遠いが、東の中でも端も端、半分以上が水辺のゼガン。

二つの区の間には、別の区が挟まっていた。

どうしてわざわざそんな遠いところに救援を要請したのか。

答えは簡単。

東の地方軍は基本的に弱い。

ゼガンにとって、近隣で一番強い軍がカウサーレ軍だったのだ。

ロッドもその事情を知らないわけではなかった。

だから、渋りながらもその要請を受け入れた。

しかし、いくらカウサーレ軍が強いとはいえ、規模で言えばゼガン軍より小さい。

と言うより、東で一番小さな軍といった方が良いか。

だからこそ有名なのだが、役所や村々の警備のためにいくらかを残し、カウサーレ軍はほぼ総出でゼガンに向かった。

着くなり彼らは絶句した。

ゼガン軍の司令官は無能者だった。

「呆れるほどお粗末な作戦で、これは素人に負けても仕方がないと思った」

とロッドは言ったという。

兵士個人の能力もまた然りで、一人殺されただけで全員がビビッて逃げ出す始末だ。

これが正規軍なのか。

まだ傭兵を相手にしている方がましというものだ。

カウサーレ軍の活躍には目覚ましいものがあつた。

しかし、ゼガン軍が足を引っ張る。

作戦通りに兵が動かない。

激怒したロッドは、此処まで軍を弱体化させた司令官を殺そうとさえしたのだという。

しかし、事が大きくなる前に部下に止められた。

しかたなく、ロッドはその司令官を脅す形で全権を自分に委譲させ、総指揮を執ることになったが、その事でようやく勢いを盛り返したものの、事態が好転することはなかった。

戦いは二ヶ月以上続いた。

そして、それは起こった。

夜、敵方の陣から閃光弾が上がった。

初めは退却命令かと思つたのだが、違つた。

その閃光弾は、ある程度の高さまで上がると、その光度を増した。一瞬の出来事だつた。

闇に目が慣れていたために、光が止んでも視界が白けて何もみえず、その間に、何と後から友軍によって攻撃された。

惨敗だつた。

最初からゼガン軍は、反王制軍と手を組んでいたのだ。

この戦争でロッドは、部下の大半を失つた。

事が発覚したゼガン軍は総辞職。

元より、反王制派の者ばかりを集めて作られた軍だつたのだそう
だ。

区の領主とゼガン軍の司令官は捕らえられ、投獄された。

ロッドはと言うと、彼もまた、退職せざるを得なかった。

閃光弾によって、視力が著しく低下していた。

日常生活には問題ないが、軍人としては致命的だ。

鵜は、ロッドが畑仕事をするとき以外は、眼鏡を掛けていたことを思い出す。

ルーチェは、今でもその頃の彼の様子が忘れられない。

声にならない叫びを上げながら、手当たり次第に物を壊していた。あまりの激しさに、彼女は止めることすらできず、その様子があまりに痛々しくて、見ていられなかった。

思えば、あの時初めて夫の涙を見たのだ。

卑怯な策略にはまり、多くの部下を失い、自分は軍を辞めざるを得ない。

それがどれほど苦しいか、悲しいか。

その戦いで負った傷も浅くはなく、左顎の傷もその時のものだそうだ。

退役した彼は、屋敷や持ち物はすべて処分し、使用人にも暇を出して、任地を去った。

彼は、妻であるルーチェとも離縁しようとしたという。

もとより政略結婚であった二人だ。

地位を失った彼に対して、彼女の実家は親切ではなかった。

しかし彼女は実家と縁を切り、無理矢理彼について来たのである。体の傷は癒えても、心の傷は癒えない。

それは、ロッドにとってもルーチェにとっても、大きな心の傷になった。

「今でも、昔の部下だった方があの方を慕って、時折ここを訪ねて来て下さいます。目のことさえなければ、上層部はあの方が退役なさるのを承諾なさらなかったでしょう。でも私は、この方がよかったと思っているんです。この村に来てから、あの方は前ほど難しい顔をなさらなくなりました。私にはそれが嬉しい」

彼女は、はにかむように微笑んだ。

実際、ロッドとルーチェは非常に仲が良い。

特に、ロッドが彼女を大切にしていることと言ったら、鵜の方が

居心地悪くなって、何かと理由をつけて席を外すこともしばしばだった。

「いいな、そういうのって。うちは母子家庭だったけど、母親とはそんなに仲が良くなかったから、あんたらが羨ましいよ」

「お母様と？」

「うん。ガキの頃からさ、顔を合わせれば死ねって、そればかりで。まあ、それだけっていえばそれだけなんだけどさ、やっぱガキにとっちゃつらいわけよ。親しか頼る者がいねえんだもん。その親にそんなこと言われちゃあな。小さい頃は、自分の何処がいけないのかわかって、真剣に考えたりもしたモンだけど、死ねって言うだけで、飯くれないとか家追い出されるとか、そういうのはなかったからな。最後の方はあたしの方からも言い返してて、挨拶代わりみたいになってたな」

ははは、と鵜は乾いた笑い声を上げる。

さらりと言っては見たものの、実はその内容がひどく重いものであることに、今更ながら気がついた。

同時に、自分の家の事情を、他人事のように語ってしまえるほど落ち着いている自分に驚く。

昔は母親との関係を話題に持ち出されるのが、嫌でたまらなかった。

こんなふうに自分のことを人に話すことはなかったというのに。鵜の家庭事情を知った者は、数日以内に怪我をするというジンクスまであったほどだ。

ルーチェは頬に手を当てて、まあ、と悲しげな表情になった。

「やはり、《地上》もこのこと大差ないのですね。親が慈しむべき

我が子に、そんなことを言うなんて」

「……《地上》、か」

《地上》は、鵜が元いた世界の総称である。

ほぼ無限にあって、一つ一つに名前が付いているはずだが、鵜は自分が住んでいた世界の名前など知らない。

今いるこの世界は《神界》といって、神々が住む世界だとされる。実際、ロッドやルーチェたちは、《神族》と呼ばれる神の一種である。

神といっても、世間一般に言う全能の神ではなく、《神界》に住む者たちを総称してそう言うのだ。

そのほか、浄化され、生まれ変わる魂の向かう《天界》と、死した魂が向かう《冥界》があり、これらは天国と地獄などと呼ばれることもある。

それぞれに付属する世界があったりするが、ルーチェ本人もあまり詳しくはないようなので割愛。

あくまでイメージとしてだが、無数に存在する《地上》が並列に存在するのに対して、ほかの三つは縦に存在している。

《地上》を一つとして数えると、上から《神界》《天界》《地上》《冥界》という風に存在しているらしい。

鵜は《地上》からこの《神界》へ来たというわけだ。

《地上》に住む者を《地上の民》という。

時間と空間を合わせて ” 時空 ” と言ったりする。

本来、この時空は安定していて、滅多なことでは揺らがらないのだが、ごく希にふとした弾みで、この時空に ” 歪み ” が生じることがある。

この ” 時空の歪み ” は、ほとんどが自然的に発生するもので、人為的なものはほとんどない。

しかし、この時空の歪みに偶然《地上の民》が行き会うと、その

歪みに巻き込まれてしまい、無理矢理元に戻ろうとする ” 歪み” に押しつぶされて、死んでしまうことが多い。

たまに無事に生きているものもいるが、そういうものは大抵、元の世界とは全く違う、異世界に迷い込んでしまうことになるのだ。

「あたしも、そうなんだよな」

「キオラさんは、人為的に歪められた ” 歪み” に巻き込まれたのでしょうか？ ですから、死亡する確率はかなり低かったはずです。ここでは、そうやって意図的に世界を渡ってきたものを《旅人^{ストレイア}》と呼びます」

「ああ、それってそう言う意味だったのか」

あの蛙の ” ジョ王様” が言っていた意味が分かった。
鵜の意志ではないにしても、人為的であることに代わりはないのだ。

「なあ、《旅人^{ストレイア}》って、元の世界には戻れないモンなのかな」

「さあ。戻った、と言う話は聞きませんし、戻れると言うのも聞きません。中央政府であればその方法を知っているとも言いますが、そもそも、《旅人^{ストレイア}》そのものがとても少ないのです。時空を渡ってきたものは大抵失敗することが多くて、ここにたどり着く頃には死体になっていることが多いですから。特に、《地上》同士を行き来する横の移動より、地上から《神界》や《天界》《冥界》に行き来する縦の移動の方が、リスクが大きいんです」

「そっか。じゃあ、あたしはまだ運が良かったのかな」

「それはどうでしょう。ガマ族の一件がなければ、キオラさんは今頃、普段通りの生活を送っていたんですよ？」

「ものは考えようだよな。あのカエルどもが大人しくしてくれたら、あたしはルーチェたちに会うことはなかったんだぜ？」

それもそうですね、と言ってルーチェは笑った。

「キオラさんは、元の世界に戻りたいですか？」

「そうだな、戻りたくないって言ったら、嘘になるな。糞ほど面白くもない日常だったけど、やっぱり少し未練もあるかな。あっちにいたときはそうは思わなかったけど、今みたいに離れて見てみたら、それなりに楽しかったような気がする」

「ものの有難味というのは、なくして初めて分かるものです。その時はつまらないと思っていても、後になってみると良い思い出になっているものですよ」

「確かに。その通りだな」

窓の外を見ると、雨は上がってきれいな夕日が輝いていた。

二人は立ち上がる。

そろそろ夕食の支度をする時間だった。

S e c t. 14 退役の理由（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 8 改修

会話が少なく、説明文が多いために大変読みにくいのですが、我慢して読んでください。

ロッドの過去話です。

ここまでで一応、世界観云々のお話は一段落しました。
これedyouやく物語が進む ^^

S e c t. 15 夜半に訪れる者（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 15

夜半に訪れる者

ある夜、そろそろ深夜と呼ばれるような時間に差し掛かったころ、二人の家にグリーが訪ねてきた。

村長不在の間、村長補佐であった彼は、今は村長代理として村をまとめている。

もしやロッドになにかあったのではと、二人の間に一瞬不安がよぎるが、彼の様子からして、どうやらそうではないらしい。

相変わらず村は閑散として、重苦しい空気が漂っている。

彼は今、それらの不安を一挙に背負っているのだ。

その重さというのはどれ程のものであるうか。

出された酒を飲みながら、彼は言った。

「実はなキオラ、今日はお前に頼みたいことがあったんだ」

「頼み？」

「ああ。今、うちの村は仕事で男どもが出ていて、人手が足りない状態だろう？」

「まあ、そうだな」

おかげで、日常の力仕事などが滞って仕方ない。

「そろそろ収穫の季節だというのに、村に残っているのは非力な女子供に年寄りばかり。なんとか男手がほしいと思っていた矢先に、夕方、役所から使者が来た」

役人が来たことは、鵜も知っていた。

下っ端ではあったが、何か悪い知らせでもあったのかと、村中でささやき合っていたのだ。

「で、なんて？」

彼は口元をゆがめて笑う。

「ありがたいことに、なんと近くの村から、作業のための人員を派遣してくださるそうだ」

皮肉気に言い放った彼は、ぐいと酒をあおる。

「ありがたい話だな」

「だろ？」

お互いに、乾いた笑みを交わしあう。

つまり、この村に一時期とはいえ大勢のよそ者が大挙してやってくるということだ。

閉鎖的、とまでは行かないが、村人たちは基本的に部外者を嫌う。自分たちの生活空間に他者が入り込むことを嫌がるのだ。

そのかわり、親しい者たちとのつきあいは、たとえ血はつながらなくとも家族同然に深い。

「でも、本当にありがたいことです。今は収穫と同時に冬支度もしないといけませんから。薪割りや家の補強などは、やはり男の方でないと」

ルーチェの言うことももっともであるが、基本的にこの村の人々

は役所を信用していない。

仕事を持ってくる使者の、あの人を見下したようなぞんざいな態度が気に入らないのだ。

「それで、あたしに頼みたいことって？」

「そうそう、それなんだがな？ 連中は来週の初めぐらいに数千人派遣される予定なんだが、そうなるちょっとまずいことがある」

「なんだよ、まずいことって？」

「キオラさんが見つかってしまう可能性がありますね」

「あー、そうだな」

鵜の立場は今、とても微妙なのである。

そのうえ戸籍もないため、素性を問われれば答えられない。

面倒事は避けなければいけない。

「じゃあ、あたしは何をすればいいんだ？ 事が済むまでどこかに隠れていればいいのか？」

「キオラには、村を出てもらう」

沈黙。

「グリッジ！！」

以外にも、一番に彼を責めたのはルーチェであった。鵜は啞然として反応できないでいる。

だいぶ馴染んできたはいえ、鵜は彼らにとっては部外者だ。
今でも鵜の存在を鬱陶しがる村人も少なくない。
しかしまさか、こんなに早く居場所を失うことになるうとは。

「待ってくれ、義姉さん。今のは俺の言い方が悪かった。何も出て行って戻ってくるなど言っているんじゃない。使いを頼まれてほしいんだ」

「使い？」

「ああ。今回の仕事がずいぶんと長引いている。そろそろ色々と足りなくなってくるはずだ。それをお前たちに届けてもらいたい」

「お前たちって？」

「お前と、ユキだ。なに、心配するな。場所はユキが知ってるし、あいつは旅慣れてる。最近じゃロッドから剣を習っているようだし、賊が出てても万が一なんてことはないだろう」

「あいつはいいと言ったのか？　こんな足手まといと一緒に構わないって」

「ほかにお前を隠す方法がないんだ。あいつには無理を言っでもうんと言わせるさ。まあ、あいつのことだ、まず断らないだろうがな」

「私は反対です。危険ではありませんか？　いくらなんでも、若い男女の二人旅なんて」

「ルーチェ。あいつにそんな甲斐性はないって」

「でも……」

それでも渋る彼女に、グリーはすまなさそうに笑いかけた。

「ほかに方法が思いつかないんだ。下手に隠せば、それこそ見つかった時が面倒だ。一度村を出てしまえば、俺たちが口を割らなければそれで済む」

それで何とか納得したのか、彼女はそれ以上は何も言わなかった。

出発は、翌日の夕方だった。

しばらく帰ってこれないため、色々と入用なものをそろえるのに、半日以上かかった。

見送りもあまり盛大にするわけにもいかない。

ルーチェとグリー、後は通りすがりの者が「頼んだぞ」と声を掛けてくれた。

徒歩で一週間ほどかかる目的地には、馬車で行くことになる。

申し訳程度の自分たちの荷物と、補給物資、それから、仕事に出ている男たちの家族から預かった手紙。

馬が疲れてしまうため、あまり多くは積めない。

それでも、積めるだけのものを積んだ。

道中はよく覚えていない。

ゴムのはまっていない馬車の車輪から伝わる振動で、すっかり酔ってしまったのだ。

とにかく気分が悪くて、それと同じくらいユキに心配されたのは覚えている。

目的地に着いたのは、そんな馬車の旅に慣れ始めた、二日後のこ

と
だ
っ
た。
。

S e c t. 15 夜半に訪れる者（後書き）

H 23・8・18 改修

ここにきていよいよ本格的に物語が始動します。

鵜ちゃんは？月に盛大に虐められることになりましたが、温かく見守ってあげてください。

S e c t. 16 キャンプの惨状とオンナのカン（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 16

キャンプの惨状とオンナのカン

森のそばに建てられたキャンプは、インディアンのそれによく似ていた。

キャンプは閑散としていた。

二人は到着するなり、眉根を寄せた。

森の木々のおい、土のおいに混じって、わずかに生臭い臭いがする。

血と肉の臭いだと、本能が告げていた。

見張りが二人を見つけて、駆け足で近付いてきた。

「ユキと……キオラか。グリーの使いか？」

ユキが黙ってうなづく。

「補給物資を持ってきた。そろそろ足りなくなるころだろうって」

「ありがたい。食料はともかく、医薬品が底を突いてきたところだ。やつら、思ったよりも強くてな」

「村長たちはいる？ 一応顔を見せておきたいんだけど」

「ああ、今会議中だから、本部にいるよ。誰かに案内させる。……おい。おい、ホイズ！ 悪いが、この二人を本部に案内してやってくれねえか！」

彼は、偶然そばを通りかかった男に声をかけた。

ホイズは、初めて鵜が村に来たときに、鵜を始末しろと言った男

だ。

その後も何度か村の中で顔を合わせてはいるが、いまだに彼には鵜を受け入れる気はないらしい。

すれ違うたびに不振な目で見られ続けると、鵜の方でもすっかりこの男には猜疑心しかわいてこない。

案内役を任されて、彼は一度鵜を睨みつけたものの、付いてこいと一言いったきり黙って歩きだした。

鵜は彼の後ろで内心思いつきり舌を出した。

そうとは知らずに、ホイズは二人を従えてズンズン奥へと進んでいく。

本部はキャンプの奥にあった。

入口の幕をあげて中に入ると、一斉に殺気のこもった視線を向けられた。

数人の男たちが、敷物を引いた地面に直接車座になって座っている。

真正面に村長。

その右隣にロッド。

入ってすぐのところにはいたのは、ユキの父親である。

約半分が顔なじみの者たちで、皆、村では鵜によくしてくれる者たちばかりである。

普段豪快でおおざっぱだが、優しい彼らを知っているだけに、そのギャップに鵜はショックを受けた。

皆どこかしらに怪我をしているようで、服のあちこちから包帯がのぞいているのが見えた。

「村から補給物資が到着したぞ」

ホイズは相変わらず無愛想に言う。

これはもう彼の性分らしい。

「おお、そうか。相変わらずあいつはタイミングがいいな」

警戒心を解いた村長は、思いっきりのびをして体の筋をのばした後で、ホイズの後ろにいる二人に気がついた。

「お前たちが運んできたのか？　ご苦労だったな。いまちようど会議が終わったところなんだ」

村長がそのいかつい相貌を崩して笑う。

こっちへ来い、と手招きされて二人はおとなしく従い、村長のそばに座った。

二人の頭をなでるしぐさは、父親というよりむしろ祖父が孫を可愛がっているように見える。

それを見たユキの父親が、甘やかさないでくれという旨の発言をしたが、周囲の男たちによってうやむやにされてしまった。

ユキが村の近況を伝えると、男たちはほっとしたような、それでいて困ったような複雑そうな表情をしたが、荷車に積んであった荷は、彼らをこの上もなく喜ばせた。

特に家族からの手紙は、彼らにとっては何にも勝る宝だろう。

年甲斐もなくはしゃぎ回る彼らを、村長がなだめている。

しかし、かくいう村長も、彼らに負けず劣らず嬉しそうだった。その光景を眺めていた鶴は、ふとあることに気がついた。

「なあ、ユキ。なんか、少くないか？」

そばにいたユキに囁く。

出発したときよりも、男たちの数が減っているような気がする。

「やっぱり、キオラもそう思う？」

各々に分担された、偵察や見張りなどの仕事があるとはいえ、いくら何でも少なすぎる。

それに、男たちのはしゃぎ様も引つかかる。

あれはほとんど空元気に近いのではないか？

怪我をしていて動けないのであればまだ良い（いや、よくはないが）。

だが、最悪の事態だけは想像したくない。

嫌な予感がした。

ひどく胸騒ぎがする。

村にいたときからしていたが、キャンプに来てから、息苦しいぐらいに強くなった。

「父さん、今回の仕事はどう？ 任務は成功してる？」

ユキに訪ねられて、彼の父親は一瞬ドキリとした顔をしたが、隣に立つ息子の肩に手を置くと、力強く言った。

「心配するな。万事うまくいってる。怪我人が多いのが難だが、切羽詰まるほどじゃない。秋祭りまでには帰れるぞ」

嘘だ、と鵜は直感的に思った。

それにしては血の臭いが濃すぎる。

キャンプに充滿する気も重い。

おそらく、何人かの死者も出ているに違いない。

根拠はないが、昔から鵜はその手に関する勘が非常に鋭かった。

それで何度か危機を脱したこともある。

経験により、鵜は自分の勘をある程度信用している。

とくに今回のような ”嫌な予感” というのはほぼ百発百中の確率で当たる。

”勘＝確信” といっても遜色ないだろう。

鵜は左胸に手を当て、握り込んだ。

服にしわが寄る。

その上で、一度大きく深呼吸をした。

これである程度は落ち着いた、と思う。

周囲を見渡すと、荷車から少し離れたところに、ロッドが立っていた。

別の男と打ち合わせをしている。

終わったのを見計らって、ルーチェから直接預かった手紙を渡すために近寄った。

「ロッド。これ、ルーチェから」

渡された手紙を礼を言って受け取ると、彼はそれを懐へしまい込んだ。

「読まないのか？」

「別に今読まなくても良いだろう？　後でゆっくり読むよ」

そう言う彼は微笑んでいた。

二人の夫婦仲が非常に良いのは、すでに前述したとおりである。これ以上突っ込むのも野暮な気がして、鵜は話を変えた。

「なあロッド、聞いても良いか？　本当は聞いちやいけないことなんだろうけど。今ざっと見たただから気のせいかもしれないんだが、どうも村を出発したときよりも、人数が少ないような気がするんだ。ユキも同じこと言ってた。でもあたし聞きたいのはそのことじゃなくて……なあロッド、相手の戦力はどれぐらい削れたんだ？」

ロッドは驚いたように目をしばたかせた。

「なんだ、藪から棒に？ そんなこと、知ってどうするんだ？」

「頼む、教えてくれ。状況はどうなってるんだ？」

ロッドは顔をしかめる。

当然だ。任務しごとに関してはド素人の者に口出しされて、気を悪くしないわけがない。

「お前が知る必要はない。作戦は成功している。余計な心配は無用だ」

「あたしを関わらせないようにするんなら、無駄だぜ？」

「そう言う問題じゃない。情報はどこから漏れるか分からんからな。いくらお前でも教えるわけにはいかない」

「どこにも漏らしやしねえよ。これはカンだけど、重傷者や死人も出てるんじゃないのか？ それも、予想してたよりも遙かに多い被害をこっちは被ひってる。仕事は長引きそうなんだろ？ 相手が思ったよりも強かったんじゃないのか？ ぶっちゃけ、《能力者》が一人も倒せてないとか」

彼は、鋭い目で鵜を睨んできた。

「……どこで聞いた？」

「聞いた訳じゃねえよ。カンだ、カン。このキャンプの雰囲気を見てそう思ったただけだ」

元から陽気なものが多いのは事実だが、鵜の目には、さっきの空元気がわざと明るく振る舞って、現実を楽観視しようとしているように見える。

すると彼は、苦虫を噛み潰したような顔をして、ため息をついた。

「おっそろしいな、お前の勘は」

ということは、今言ったことが少なからず当たっていると言うことだ。

「想定していたよりこっちの被害が大きい。お前の言うとおり、すでに何人か死者も出ている。このまま行けば、思った以上に長引くかもな」

「秋祭りまでには帰るって、お前言ってたよな」

ロッドの眉間にしわが刻まれている。

「無理、かもしれない」

彼は疲れている。

彼だけでなく、村長も他の男たちもみんなだ。

仕事で長引いて、その上終わりが見えないことへの精神的疲労が半端ない。

「グリーはお前を一時的とはいえ、ここに避難させたかったんだろが、ここも安全とはいえない。すでにこのキャンプは何度か敵の襲撃を受けている。おそらく、敵の中に退役軍人がいるんだ。おかげでこっちの基本的な手の内は全部読まれている」

「作戦が通じないってことか？」

「いや、そうじゃない。応用すればある程度は通じる。ただ一つ不可解なのは、俺の作戦に対応したとしか思えないような動きを、奴らが時々とることだ。俺が作戦を立てる際の癖を知ってやがる。あまり考えたくはないが、昔俺の隊にいたやつが混じってるとしか思えない」

「最悪じゃねえか」

「ところがそうでもない」

彼はにやりと笑う。

「相手が知っている俺の癖は、どうも俺の尉官時代のものらしい。ということはだ、もう百年以上も昔に、俺の下で部下をやっていたやつだと言うことだ。俺は自分の癖は自覚しているつもりだ。癖を悟らせるようなやつはいずれ自滅するのがオチだからな。普通は自覚した時点でそう言うのは直すものだ。襲ってきた奴らは全部、裏をかいて追い返してやった」

そう言う彼の顔はまさに、いたずらを企む子供のようだった。

ちなみに尉官というのは、軍隊で少尉、中尉、大尉の三官のことである（昔は准尉もあったらしい）。

彼の顔を見て、鵜は思わず吹き出してしまった。

うまくはぐらかされたことに気づいたときには、もう何もかもが遅かった。

S e c t. 16 キャンプの惨状とオンナのカン（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 8 改修

女のカンをナメちゃいけないよって話です（↑違う）

S e c t. 17

茶色い悪魔とラブレター（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 17

茶色い悪魔とラブレター

男だけで一ヶ月近く固まって生活していると、色々と偏った方向に滞りが出てくる。

主に後片付けの分野に。

ある程度は彼らもできるものの、何せ元がおおざっぱな連中だ、完璧を求める方がむごい。

鵜がのぞいてみると案の定、水回りを中心にとんでもないことになりかけていた。

一応担当者はいるはずなのに、もはやカオスと呼ばれる寸前である。

(案外、茶バネ何某様^{なにがし}がいらっしゃったりして)

繁殖力の旺盛な彼らのことだ、元の世界にもごまんといったが、この世界にもいないとは限らない。

基本的に虫は平気だが、これだけはどうしても好きになれない鵜である。

(触りたくねえな)

指先でつまみ上げた得体の知れないものは、明らかに異臭を放っていた。

彼らは一体これらをどう始末して帰るつもりだったのだろうか。

それよりも、今までよく平気でいられたものだ。

関係ないが、かつて元の世界で行われた幾度にも渡る戦争で出た戦死者の死因の内、?1は不完全な衛生管理による感染症や土地の風土病だったという。

不衛生な環境は病気になりやすい。

鵜も後片付けは得意な方ではないが、彼らよりかは得意だと自負している。

某氏が出たら即座に逃げようと心に誓い、意を決して洗濯物をまとめだした鵜であったが、いくらかもしれないうちに静かにその場から立ち去っていった。

「ゆき」

「わっ！　どうしたの、キオラ！？」

暗い顔で今にも消えてしまいそうな声の鵜に呼び止められて、ユキは飛び上がった。

飛び上がった拍子に、持っていた巻紙の束を落としてしまう。

「なあユキ。虫は、平気か？」

「え、虫？　虫は平気だけど、何で？」

「あの、茶色いやつは？」

「茶色いやつ？　そんなの、いっぱいいるけど」

ユキは、普段はしゃん背中を伸ばしている鵜が猫背なのを見て、だんだん心配になってきたようである。

散らばった巻紙を拾う手を止めて、不安げに顔をのぞき込んでいる。

しかし鵜も必死だ。

「主に台所とかに出る、茶色くて油光りしてて、かさかさ動くやつだよ！」

「……それって、もしかしてゴキブリのこと？」

「わ——その名称を口にするな——！！！」

聞きたくもない名前を聞かされて、鵜は半狂乱であるが、対するユキはやつと得心がいったような顔をする。

「苦手なんだ」

「に、苦手っていうか嫌いっていうか、他の虫はともかくあればっかりは生理的にダメなんだよ！あの形状といいあの動きといい奴らの生息場所といいああもう！何であんな奴らが何億年も我が物顔で地上を闊歩してんだよ！しかも形変わってねえとかありえねえ！ドンだけ優れた形なんだよドンだけ便利なんだよもう人間もあれで良いじゃねえか！そしたらこんな気色悪い思いしなくてすんだのによ！一匹潰してもあと百匹もいるとかドンだけ子たくさんなんだよお母さん頑張るすぎだろ！そんだけ産みやあ十分だろもう頼むから勘弁してくれよお」

「キオラキオラ！とりあえず呼吸しよう。息継しよう！深呼吸だ、ほら吸って……吐いて」

ユキの音頭で深呼吸をした鵜は、ようやく落ち着きを取り戻した。しゃべっている間中、一切息継ぎをしなかったのである。最後の方は半泣きだった。

このままでは窒息死すると、ユキは慌てたわけであるが、あながち間違っただけではなかった。

酸欠で頭がくらくらする。

しゃがみ込んでしまった鵜の背中をさすりながら、ユキはこらえきれずに吹き出した。

しかし今の鵜にそれを咎める気力はない。

「あゝおっかし。まさかゴキブリが苦手だったなんて。だってキオラ、他の虫は全然平気じゃん。何であれだけダメなわけ？」

「だからゝあのかたちとかゝ」

ついでに台詞を漢字に変換する気力もない。

「あーはいはい。で？ どこに出たの、そのゴキブリは？」

ユキは完全におもしろがっている。

「せんたくば」

「洗濯場ね。それを退治すればいいわけ？」

「うん」

「分かった。とりあえずこれを頼まれたところまで届けてくるから、キオラは先に行って待ってて」

「……ついてく」

この弱気な一言が、再びユキの笑いの発作を引き起こしたのであ

るが、鵜は怒らなかった。

否、怒れなかった。

害虫を退治してもらう方が重要なのである。

というわけで、再び洗濯場に戻ってきた鵜と、害虫退治を任されたユキの手にはパンのくずがある。

鵜はユキの背中に顔を出して隠れ、盾になるユキは苦笑するしかない。

仕方がないので鵜をできるだけ離れたところまで下がらせ、ユキは異臭を放つ洗濯物の周囲にパンくずを巻き始めた。

ちなみにこのパンくず、特性の薬をしみこませてある害虫退治専用の寄せ餌である。

用具用のテントの中にあっただが、こんなものを持ってくるぐらいならば、最初から害虫が寄りつかない環境を作ればいいのにと、これを見た時鵜は心底思った。

どのくらい効果があるのかは分からないが、餌を巻き終えたユキがまた明日見に来ようというので、二人はひとまず自分たちにあてがわれたテントに帰ろうとした。

とその時、鵜の視界の端に、彼女が嫌悪してやまない茶色い影が走った。

あ、と思うまでもない。

虫が鵜めがけて飛び立ってくるのと、ユキが剣を抜いたのはほぼ同時である。

気がついたときには、鵜はこの世の終わりとも思えるような悲鳴を上げていた。

鵜の悲鳴は一体どこまで届いていたのか、正確なことはわからない。

ただ、見回りをしていた者をはじめ、村長、ロッド、果ては洗濯

場とは正反対のテントで作業をしていたはず者たちまですっ飛んできたので、相当なものであったろうと推測される。

結果的に虫は、鵜の悲鳴に驚いて逃げていったものの、大声を上げて仲間を驚かせた鵜としては、ひたすら恐縮しっぱなしであった。真実を知ると、彼らはことを笑い話として許してくれたが、ユキが剣を抜いた理由については笑い話では済まなかった。

ユキは虫が飛んできたので剣を抜いたのではない。

虫が飛び立ったのとはほぼ同時に、洗濯の山のすぐそばに矢が突き刺さったのである。

というより、そもそも虫が飛び立った理由というのが、この突然の無礼な訪問者に驚いたからであつたらしい。

敵襲か、と全員が身構えた。

しかしそれをロッドが制す。

矢の中ごろに、手紙が結びつけてあつた。

俗に言う ” 矢文 ” というやつである。

手紙を読む役は、ロッドが仰せつかった。

ややして彼は手紙を読み終わると、低く唸ってと目を閉じ、こめかみのあたりを指でもみほぐした。

「なんて書いてあつたんだ、ロッド！」

急かすイディに、ロッドは何も言わずにひらりと紙を渡す。

イディはしばらく文章を目で追っていたが、やがて口元をひきつけさせた。

ごほん、と一つ咳払いをする。

「いいか、読むぞ？」

ロッドは無言を通している。

これを肯定と受け取って、イディは手紙の内容を読み上げ始めた。

曰く、

「愛しのアーロッド様へ？」

その一文で、周りがずっこけた。

イデイは構わずに読み続ける。

【愛しのアーロッド様へ？

お久しぶりです。この手紙が、万が一傭兵側の手に渡ることを考え、名を明かせずにいることをお許しください。私は以前、あなたの部下をしていたものです。これだけ言えば、あなたには私が誰かお分かりになったことでしょう。今回この手紙を差し上げたのはほかでもありません、豪商ドシユアの雇う傭兵部隊、ヘイジンのことでございます。今夜、ヘイジンはあなたの方のキャンプに夜襲を仕掛けるつもりです。二手に分かれて挟み撃ちにする作戦ですので、東西の方向にはお気を付けください。彼らは残りのほとんどの戦力を投入するはずですが、本部にも数人が残りますが、こちらには《能力者》は一人なので、あなた方が奇襲を仕掛けるにはよい機会でしょう。裏門の鍵に細工をしておきますので、そちらからお入りください。

いきなりこんなことを言われて、あなた方は戸惑うかもしれません。信じる信じないはお任せしますが、これも一つのチャンスであるということをお忘れなく。なぜ敵のはずのあなた方にこんな手紙を送るのか、あなた方はさぞ不思議に思われることでしょう。理由は単純です。私がアーロッド様を愛しているからです。昔はこんなことを言うたびに、貴方にしかられていましたが。しかし、今も昔と変わらず、貴方の勇姿は私の心をときめかせてくれます。先日貴方をお見かけしたときなど、心臓が破れてしまうのではないかと思ったほんです。貴方のことを思うだけで、私は息が詰まり、夢路へと旅立って行くことができるでしょう……

<中略>

ところで今夜の奇襲ですが、その中に私の姿はありません。なぜなら、私は今夜脱走するからです。貴方のお姿を見た以上、いつまでもこんなところにいる理由はありません。明け方頃にあなた方の陣へ合流するつもりですので、その時はぜひお仲間に加えてくださいませ。

貴方を想う者より、

愛を込めて?」

辺りは静まり返っている。

「ロッド、心当たりは?」

仲間の問いに、ロッドは心底疲れた風に答えた。

「ある」

「」「浮気だ!!!」」「」

「違うわ!」!

ロッドが吠えた。

「男の字だなあ、こりゃあ」

イデイの呟きに、男たちが凍りついた。

「ロッド、まさかお前、そんな趣味があつたのか?」

「んなわけあるか! あっちが一方的に言い寄ってくるんだ!」

半ば自棄になるロッド、というのとはなかなかにして珍しい。

彼はいつも冷静沈着で、物事を客観的に判断できる人物である。手紙の内容は男たちにとっては鳥肌モノだろうが、女の中にはこれを特別に好む者もいる。

鵜は好みこそしないものの、否定しようとも思わない。

「なかなか熱烈なラブレターじゃねえか」

「冗談じゃない、どこが！ 気色悪すぎなんだよ！ まったく、一体何を考えているんだ、あいつは」

鵜が茶化してみせると、ロッドは鳥肌をたてて全否定した。

「しかし何者なんだ、この手紙の送り主は？」

流石に村長はこのような場面においても冷静であったが、わずかに顔色が変わっているのを隠しきることはできなかった。

「手紙にもあっただろ？ 俺の元部下だよ。俺が除隊した後、あいつも軍を辞めたって聞いていたが、まさかこんなところで会うとは。最悪だ」

「……ホモなのか？」

確認するような村長の問いに、ロッドはゆっくりと首を振って答えた。

「いいや、そいつはバイだ」

バイ、つまりがバイセクシュアルは、男女を問わず恋愛対象にする者のことを言う。

男たちの視線が一斉に鶴に向けられた。

しかし鶴本人からしてみれば別段思うこともなかったもので、それらの視線は華麗に無視される。

「仲間に入れてくれて言ってるけど、どうするんだ？」

やや考えて村長は、手紙の忠告の事も踏まえて、改めて会議を開いて決定することを述べた。

会議には出席しない者たちに、念のためキャンプの防御を強化しておくことを指示すると、彼は主要メンバーとともに本部テントの中に入ってしまった。

Sect. 17

茶色い悪魔とラブレター（後書き）

H 23・8・18 改修

？月らしくなく、ノリで書いたコメディ性の強い内容になりました。

ちなみに？月も鵜と同じく、ゴ○ブリは大嫌いです。

ロッドはお気の毒様です。

でも、軍隊においてはこういう事があっても良いと思うんです。
単に？月の趣味ですけれど……

S e c t. 18 涙は心の汗だ! (前書き)

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 18 涙は心の汗だ！

「まだ不貞腐れてるのか？」

不愉快な思いを胸中にため込み、キャンプの外れの木にもたれかかって憮然としていると、ロッドがやってきた。

鷓はちらりと彼を見たが、すぐにそらしてしまう。

ロッドは小さくため息をついた。

会議が終わったのはおよそ二時間前、食事係が夕食の準備に取りかかった頃である。

キャンプはドーナツ状になっており、中心部に全員が集まれるようになっていいる。

男たちは一班から六班までの班ごとに整列し、それぞれの班の班長が作戦会議に参加できる。

昼間の事件を知らない者たちに一部始終を簡単に説明した後、手紙の忠告を信用することにした、と村長は発表した。

「全員を、襲撃組と防御組の二組に分ける。一班、三班、五班、六班を防御組、後の二班、四班を襲撃組とする。防御組のリーダーは俺、襲撃組のリーダーはロッドだ」

とここで、男たちの中から待ったの声が上がった。

「襲撃組の人数が少なすぎる。いくら警備が緩くなるとはいえ、ふたはん二班ではきついぞ」

それに対してロッドが進み出た。

「それは俺がカバーする。俺の《分身》で人数は十分すぎるほど補える」

「補うたって、お前も無傷じゃないだろう。《能力》だって万能じゃない。お前が倒れたら元も子もないじゃないか」

「傷を負っているのはみんな同じだ。俺の《能力》を使うのが一番効率が良いからそうするだけだ。このキャンプには怪我人もいる。女子供もだ。俺の《能力》は闘うことはできるが、守ることはできない。嚴重すぎるほどの防御態勢が必要なんだ」

異を唱えた男は決して納得したわけではないだろう。しかし、不満そうにしながらもロッドの言葉に言い返すことはできず、彼は引き下がるしかなかった。

村長が一同を見渡す。

こう言う時、彼の威厳は最大限に発揮される。

彼の視線が通り過ぎるたびに、男たちの表情が変わっていくのが分かる。

他者を萎縮させるほどの覇気は、指示を仰ぐだけの一兵士に備うるものではない。

上に立つ者、作戦の司令官でもある村長だからこそ成せる技である。

「あたしらは、どうすれば良いんだ？」

ユキと鵜は、先ほどロッドに「女子供」として一括りにされた。しかし黙って足手まといになるつもりは毛頭ない。

「お前たちはキャン^ップにいる。ミエスに任せてある」

ミエスはユキの父親である。

「黙って守られるのは性に合わないんだけど？」

「なら気絶させておく。意識がなければ性もへったくれないだろう」

無茶苦茶な原理である。

「俺の《能力》は使えないの？」

ユキは《千里眼》の《能力者》だ。

「敵の偵察をするにはちょうど良いと思うけど？」

しかしこれには村長が否を述べた。

「相手方に《結界》の《能力者》がいる。訓練を積んだロッドはまだしも、実戦経験のないお前ではいくら《能力》を使ったところで、結界に視界を遮断されて偵察にならないだろう。それなら肉眼視する方が正確だ」

ユキは悔しげに唇をかんで黙った。

反論は許されなかった。

二人が再び何か言う前に、ロッドの合図を受けたミエスによって気絶させられてしまったからである。

有言実行とはまさにこのことだ。

急速に遠のいていく意識の中で、数多くの罵倒語が鵜の胸中を流れていった。

「もうみんな準備が終わってる。お前も持ち場につけ」

ロッドは決して声を荒げるようなことをしなかった。
淡々と述べる彼に、鵜はキツと視線を向けた。

「あたしの役目はみんなに守られることだろ！」

「お前がそう思うのなら、そうだろうな」

「どういうことだ？」

彼の言葉の意味が分からない。

「この国には四人の皇おうがいるのは知ってるか？」

「ルーチェから聞いた。それがどうしたって言うんだよ」

「まあ聞け。この四人の皇おうはな、四人とも女なんだが、それは知ってるか？」

鵜は首を振った。

「知らない。初めて聞いた」

ロッドが笑う。

利かん子を諭すような目差しに居心地が悪くなって、鵜はもぞもぞと体制を変えた。

「他の世界は大概そうだし、ウチの村も仕事柄どうしてもそうなりがちなんだが、基本的に世間っていうのは男本位の世界だろ？」

でもな、この国じゃあ女が国のトップに立ってるモンだから、どちらかというとな女本位の傾向が強いんだ」

「女本位？　女の方が権力を握ってるってこと？」

「平たく言えばそう言うことだ。仕事場じゃあ部下に対して偉そうにしているやつほど、家に帰れば奥方に頭が上がらないなんてことは、ここじゃあそう珍しい事じゃない。ウチもそうだしな」

そう言えば、と思い返すと、ルーチェがロッドをうまく”操縦”していると思しき場面を時々見かける。

操縦されている本人は気づいているのかいないのか、結果を見るいつもルーチェの思惑通りに事が運んでいることが多いが、自覚があったのか。

「はつきり言って世間では、男は浅慮な馬車馬のようにしか思われていない。体を張ってナンボってわけだ。その代わり女は、男のフォローから家の世話から、細かなことをすべてこなしている。昔、宮廷付きの学者が『女は家の奴隷』というような事を言ったらしいんだが、女皇じょおうに睨まれて居場所を失ったあげく、精神を病んで横死したらしい。女を敵に回したら怖いということだ。【女房立てれば家が建つ】とも言うしな。」

「はあ」

初めて聞いた言葉だ。

この世界のことわざだろうか。

そもそも彼の言いたいことが分からない。

「確かに、戦いの中では力の弱い女は足手まといかもしれん。けどな、この男だらけのキャンプではお前は至宝なんだぜ？ 宝を守るのは力の強い男の役割だろうが」

鵜は思わず吹き出した。

「なんだ、それ？ 訳わかんねえ！」

どうやら慰めているつもりらしい。

行き着く先が「女は至宝」だなんて、彼は小説の読み過ぎなのではなかるうか。

しかし相手は「浅慮な馬車馬」である。

一応鵜を持ち上げているらしいので、及第点と言ったところか。拗ねている自分が馬鹿らしくなってきた。

「よっと」

小さなかけ声とともに、ロッドが鵜を抱き上げた。

前触れもなく急に視界が高くなったので、鵜は驚いて彼にしがみついた。

しかし彼は気にしない。

どころか、その長い指でまっすぐ彼方を指さした。

「あそこに今回の標的^{えもの}の屋敷がある。見えるか？」

よくよく目をこらしてみると、確かに遠くに小さく屋敷が見える。さらに目をこらすと、何人かの警備の人間が、蟻うごめのように蠢うごめいているのが見えた。

「豪商ドシユアは、表向きは食品貿易の仲介業者だが、裏では金銭の横領だけじゃなく、人身売買にまで手を伸ばしている。屋敷にはおそらくその被害者たちもいるだろう。彼らを見て、お前は正気を保ってられるか？ お前は感情的になりすぎる。一年前、俺たちが蛙どもを殺していたのを見て吐いたお前が、仕事の光景を見て耐えられるとは思えない」

そう言われてしまえば返す言葉もない。

「悔しかったんだ」

あきらめて、鵜は胸中を語ることにした。

「村にいたってここに来たって、結局あたしは足手まといだ。なんにもできやしない。守られてるばかりで、悔しかったんだ。あたしだって無力じゃないって思ってた。元の世界じゃ刃傷沙汰起こしたりしてたから、人が死ぬのも同じだと思って、何でもないことだと思ってた。でも、ただのケガと人が死ぬのでは全然違ってた。あたし、なんにも知らなかったんだ。なんにも知らない癖して全部知ったつもりになって、いざ事が起こってみると結局なんにもできなくて。それが悔しかったんだ」

その悔しさが、いつしか母親にかまってもらえない寂しさと相俟って、ルーチェとロッドを本当の父母のように慕っていた。

子供のいない夫婦は、鵜を抵抗なくすんなりと受け入れてくれた。彼らに甘えていた自覚がある。

それなのに、自分のせいで彼らに不自由な思いをさせていることがたまらなく嫌だった。

さらに、村を出され、仕事に参加させてもらえないということが、お前なんか必要ないと言われているようで怖かった。

「足手まといだなんて思っちゃいねえよ。第一、本当に邪魔だと思ったら、とうの昔にお前を役所に突き出してらって。グリーだって、大切な荷をお前に預けたりしなかっただろうよ。それに、キャンプは村とじゃまた環境が違うから、色々と勉強になったろ？」

確かに、キャンプに来てから臨機応変を言う言葉を身に染みて実感している。

あれもないこれもないと、ないものばかりなので、いちいち決まった形にこだわってられない。

臨機応変に代用品を使わなければならない。

野生動物たちが、時に驚異になりうることもある。

アウトドアというと聞こえは良いが、実際は常に緊張状態を強いられる生活であった。

充実しているといえなくもないが。

「てか、いい加減下ろせよ」

「下ろして欲しけりゃ、泣きやみな」

言われて初めて、鵜は自分が泣いていることに気がついた。

今キャンプに帰ったら確実にみんなに笑われる。

慌てて袖口で目をこすったら、瞼が腫れるからやめろとロッドに叱られた。

その口調がまるっきり父親のようで、この夫婦に子供がいなかったが残念でならなかった。

S e c t . 1 8 涙は心の汗だ！（後書き）

H 2 3 . 8 . 1 8 改修

ごめんなさい、タイトルはただ単に言ってみただけなんです。

戦いは数がものを言うんだよっていうお話です。（↑違う）

ロッドはお父さん。ルーチェはお母さん。

村長はおじいちゃん？ おばあちゃんは誰？

女皇陛下って怖い人たちなんだね！

そうじゃないと王様なんてやってられないか！

女の子は大事にしましょう！

S e c t. 19

作戦実行と《能力者》（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

※ 【R15】です。お気を付け下さい。

作戦決行の時になって、ロッドは《能力》によって二班分の人数をカバーしたのだが、ロッドがたくさんいる光景は他のメンバーの目から見てもあまりに不気味に移ったので、ともにマントを着せ、覆面をさせて顔を隠すことにした。

攻撃組が発発してしばらくすると、手紙の予告通り、キャンプは敵の襲撃を受けた。

真っ先にやられたのは見張りだ。

敵に気づいたときには遅く、彼は正確に心臓を矢に貫かれて死んだ。

わア、と双方から関の声が上がる。

敵の行動は迅速だった。

あつという間にキャンプへの進入を許してしまう。

それも作戦の内ではあったのだが、端から見れば戦況は圧倒的に盗族が不利であった。

あちこちで激しい斬り合いが始まった。

馬に乗っている者が、次々と敵をなぎ倒していく。

弓を持つ者はキャンプの外にいて、外から矢を打ち込んでくる。

鵜とユキも丸腰ではない。

鵜には、ロッドが発発時に護身用にと持たせてくれた短剣がある。

ユキは自前の剣で応戦するが、いかんせん相手はプロだ。

襲撃を受けると鵜とユキは、あらかじめ用意してあった塹壕へ避難することになっていたが、敵の攻撃をいなしてその隙に逃げるのが精一杯であった。

なかなか塹壕にたどり着くことができず、結果、数人の傭兵たちに取り囲まれてしまった。

ユキは鵜を背中にかばってはいるが、その背中側にも敵はいる。

鵜は不思議と恐怖は感じなかった。

ただいっになく冷静に、どうすればこの状況を切り抜けられるかを考えていた。

開き直ってしまったと言えいいだろう。

ユキと背中合わせになって、静かに傭兵たちを見据えていた。

こんな戦場じみた場所に女がいたことが意外だったのだろう、彼らは下卑た笑い声を立てながら、互いをつつきあって囁きあっていた。

それを見て鵜の背筋を悪寒が走る。

（女子高生じゃあるまいに！）

男という生き物は時々、女には全く理解不能な行動をとることがある。

じりじりと互いに睨み合いながら間合いを計る。

突然、一本の矢がこの奇妙な円陣の隙間を走っていった。

誰を狙ったわけでもない、流れ矢だ。

しかしそれが切っ掛けだった。

今までは互いの力量をはかって牽制しあっていたに過ぎない。

矢の出現に、ユキがビビッてしまった。

敵が二人を未熟者と判断したとたん、一斉に襲いかかってくる。

全方向からの一斉攻撃ではないなすのは無理だ。

かといってまともにやり合ったのではさらに無理だし、結局相手の隙を見てうまく逃げるしかなくなってくる。

ぐるりと自分が見える範囲の180℃を確認して、敵の弱い部分を確認する。

一瞬の判断だけが頼りなので、正確さにはいささか自信がないが、無傷とはいかなくても何とか五体満足で切り抜けられそうだ。

ユキを引っ張って鵜が駆け出そうとしたとき、円陣の一角が崩れた。

誰かが切り込んできたのだ。

「ユキ！ キオラを連れて森の中に逃げろ！」

間一髪の二人を救ったのは、意外なことにホイズだった。

ユキはその声を聞くなり、返事もせずに鵜の腕を掴んで走り出した。

走っていく二人を誰も気には留めない。

敵も味方も皆、自分のことで手いっぱいだった。

絶えず悲鳴と雄叫びが聞こえてくる。

あれほど気になった血のにおいは、すでに鼻が麻痺してしまっ
て分らない。

走っている最中に、キャンプの外れで人が倒れているのが見えた。

「ユキ、あれ」

鵜は思わず立ち止まる。

暗がりなので、顔の判別まではできない。

敵か味方も分からない。

腹を割かれ、腹圧で内蔵が外に飛び出していた。

すでに生者ではないことは明白である。

「見ちゃだめだ！」

ユキが鋭く叱責するが、すでに鵜の視線は彼に釘付けになっ
てい

動けない鵜の視界を、ユキは自分の手で目隠しすることによっ
て遮った。

「行くよ」

短い促しは、今の鵜にとっては大変ありがたかった。

森には行って少しすると、木々が音を吸収するのか、キャンプの喧噪はフィルターがかかったように聞こえる。

ユキの片手は相変わらず剣を握ったままだった。

鵜の片手も、護身用にと持たされた短剣を握って離さない。

何か身の安全を保証してくれるような物がないと、このまま二度と歩けなくなってしまいそうだった。

明かりを背後に、足下もおぼつかないような暗がりの中、突然二人の前に影が立ちふさがる。

確か先ほどのキャンプでの攻防の時もいた。

血色の唇に死者の肌色という妖しい美しさを持つ、《瞬間移動》の《能力者》であった。

「こんな時間に二人で手を取り合って、掛け落ちでもする気かな？」

ユキは有無を言わず切り込んでいく。

だが相手は腕の立つ殺人狂の傭兵だ。

軽くかわされて、ユキはたたらを踏んだ。

その首に迷わず刃が振り下ろされるが、鵜の短剣がそれを阻む。

まともに受けることはできなくても、剣の動線を見て横っ面から力を加えてやれば、よほどのことがない限りその軌道をそらすことはできる。

動体視力に自信のある鵜だからできることである。

鈍い音を立てて敵の剣が地面にわずかにめり込んだ。

そのすきを書いてユキの腕を引っ掴んで走り出そうとしたが、襟首を掴んで引き戻された。

勢いのついたまま地面に引き倒され、背中をしたたか地面に打ちつける。

衝撃で息が詰まり、すぐには起き上がれない。

即座にユキが相手の急所を狙って剣を走らせるが、相手はいとも簡単によけてしまった。

ユキの腹に鋭い蹴りが決まる。

ちょうど背後にあった木に叩きつけられ、反動で体が地面に沈む前に、男は彼の大腿を自前の獲物で突き刺した。

続いてどこから取り出した短剣で、肩口を突き刺す。

悲鳴が上がる。

ユキは痛みと、どうやら剣は足を貫通して木に縫い止められているらしく、その場から動こうにも動けない。

「ユキっ！」

叫んで跳ね起きようとしたが、男に胸元を踏みつけられた。

とっさに手に握った短剣で、相手の足を切りつける。

しかし敵はそれを間一髪で交わし、地面を転がって落ちていたユキの剣を拾い、体勢を立て直して構えようとしたが、そこで彼は動きを止める。

何とか立ち上った鵜の短剣が、相手の眉間を狙っていた。

敵はにやりと笑う。

「やるじゃないか、お嬢ちゃん。でもな！」

あっという間にはじき返された短剣は、宙を舞って離れた所に落ちた。

反応する暇もなく足払いをかけられ、押し倒されて地面に組み敷かれる。

ユキは手を出せずにいた。

「腰が引けてるぜ、お嬢ちゃん？　もしかして、戦いは初めてか

い？」

ククツと笑って男は、はじいた短剣の先を鵜の首筋にあてがった。

「きれいな肌だな。お嬢ちゃん、《能力者》だろ」

軽く力を加えられ、鵜の肌に小さな血玉が浮かぶ。

「最高の夜じゃないか？ あちこちから悲鳴が聞こえる。血のにおいに満ちている。……ああ、テントに火が燃え移ったな。かわいそうに。あれじゃ醜い死人が増えるだけだ」

鵜の位置からキャンプは見えないが、確かに周囲の高度は増し、煙と焦げ臭いにおいが漂い始めた。

「そっちの坊やお嬢ちゃんを助けようと必死だぜ？」

相手の体の陰からかうじて、ユキが何とか解放されようともがいているのが見えた。

しかし動けずにいるのは変わりないらしく、出血ばかりが増えていく。

思わず上体を起こしかけたが、力で抑えつけられてかなわなかった。

鵜の上に馬乗りになっている相手の顔は、互いの鼻先が振れそうなほど近くにある。

男の舌は、柘榴ほども赤かった。

思わず顔をそむけようとするが、頬に短剣が据えられていた。

「動くなよ。せっかくのきれいな肌に、これ以上傷跡なんか付けたかないだろう？」

「てめえ、何する気だよ」

すると相手はニイと笑う。

「さあ？ お譲ちゃんは どうしてほしい？ 切り刻んでほしい？
それともこのまま××してやろうか？」

ぞっとして背筋が凍りついた。

頭では敵わないことをわかりつつ、体は必死に逃げようとしている。

相手はそれを見えますます笑みを深くする。

「生きのいい女ってのは嫌いじゃないよ。むしろそうでなくては
楽しくない」

短剣が服の袷あわせに入り込んだ。

冷たく硬質な感触に、恐怖心がピークを乗り越え、体さえも動き
を止める。

「キオラ」

ユキがかすかな声で鵜を呼ぶ。

彼のほうを向こうと思うのに、視線が動かなかった。

視線を外してしまえば終わりだと、本能が警鐘を鳴らしていた。

その間にも短剣はどんどん奥に入り込んで、はだけた胸元から白
い肌がのぞく。

本来は何の曇りもない真っ白な肌に、赤く細い筋が一本、縦に走
っていた。

「や、やめろ」

声がかすれている。

鵜が嫌がれば嫌がるほど、相手ますますは喜ぶ。

《能力者》であるために、なお美しく、妖しく、そして猛々しい。村に來たばかりのときにユキに聞いた ” 生命力 ” というものを、鵜は今、肌で感じていた。

相手が意図的であるのかはわからないが、視線が外せないなんてものではない。

俗に言えば ” 色気 ” というやつである。

頭の奥では事を拒否しているのに、体は全く抵抗する力を失っていた。

ただ、服の中に入り込んで肌を這う刃の感触だけが、ひどく現実味を帯びていた。

とうとう、短剣が帯の下にもぐりこんできた。

ここにきてようやく体が少しだけ体の金縛りが解け、そろそろと腕で周囲を探る。

しかし残念ながら、手近に相手を害せそうなものはなかった。

石は小さく、小枝は枯れていて使い物にならない。

心の中で必死にユキを呼ぶが、現実にはなんの影響も及ぼさない。ユキはどうやら氣を失っているらしかった。

痛みと失血のせいだ。

鈍い音を立てて帯が切られた。

あらわになった体を、相手はまじまじと観察する。

短剣を喉元に突きつけて、鵜の動きを封じることにも忘れない。

いくら《能力者》とはいえ、不幸なことに鵜もユキも、相手に物理的攻撃を与えるタイプのものではない。

反撃できない。

相手の視線は、鵜の全身をなめまわすように見ていた。

くすぐられているような奇妙な悪寒が全身を這い回り、嫌悪感が

こみ上げてくる。

何をされるかわからないほど子供ではない。

「いやだ！」

鵜は思わず叫ぶ。

しかしそれを力ずくで遮るように、頸動脈すれすれに短剣が突き立てられた。

喉が小さく甲高い呼吸音を鳴らして沈黙した。

男の笑みは深くなるばかり。

「下手に動けば危ないよ。森の中は暗いから、うっかり手が滑っちゃったりして」

骨張った手が、ゆっくりと傷跡をなぞっていく。

背筋を、数百の蟲が列をなして駆け上がっていった。

指先についた血を、男は見せつけるかのようにべろりとなめた。

逃げたいのに、体が固まって動けない。

かろうじて目をつぶることはしなかった。

そんなことをすれば、己の敗北を認めているも同然だ。

妙なところで自尊心が働き、それだけはできなかった。

男はそれを見て喜んだようだ。

「知ってるかい、お嬢ちゃん？ 俺たち《能力者》の血は、《能力者》を強くする。お嬢ちゃんの血は最高だよ。見かけによらず、強いんだね」

不気味な笑い声を上げ、歯並びの悪い歯がむき出しになる。

舌を伸ばし、鵜の傷口を直接舐めようとした。

しかし突然、男は何かに気を取られたように視線をずらすと、鵜

の上から飛びのいた。

後を追うように、それほど大きくはない小石が、男の頭のあった位置を正確に飛んで行った。

Sect. 19

作戦実行と《能力者》（後書き）

H 23・8・18 改修

この小説って、台詞読みしてたら全くイミフだということに気づきました。

気づいたので急遽ストックの時点ではなかった台詞をいくつか投入しました。

かといって台詞中心に書くと物語が進まないし……ああ、難しい！

伏せ字を初めて使いましたヨ。

というか、この話を書き始めたときは伏せ字を使うことになろうとは思っておりませんでした。

二章はもうちょっと軽い話になる予定だったのになあ
それだけでは面白くないと、少々盛りすぎた感があります。

無駄に続きます

S e c t. 20 傭兵の男（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

※ 【R15】です。お気を付け下さい。

Sect. 20 傭兵の男

暗がりの中に人影が立っている。

《能力者》の仲間かと、一瞬考えた。

「こんなところでサカってんじゃねえよ」

低くハスキーな男の声。

知らない声だった。

「邪魔をしないでほしいな。結構いいところだったんだぜ？」

《能力者》の男の声からして、警戒しているのがわかる。

いったい何者なのか。

「関係ねえな。オレがその手のこと嫌いなのは、よく知ってるーが？」

どうやら仲間同士らしい。

「おいおい、おれたちは傭兵だぜ？ 正規軍じゃあるまいし、安い給料だけで満足なんてするかよ」

「そんなにやりてえんなら、娼館に行って女を買えばいい」

「御冗談！ 戦場でやるから楽しいんだろうが。ええ？ 軍人崩れの傭兵さんよ！」

言うなり《能力者》の男は相手に襲いかかった。
襲いかかられたほうも、無造作に剣を抜いて構える。
勝敗は一瞬だった。

《能力者》相手に切りかかる一瞬で姿を消し、直後に背後に《瞬間移動》して後ろから切りつけようとする。

しかし男は、それを読んでいたようにすばやく身をひるがえすと、姿を現した《能力者》を、袈裟がけに切りつけた。

崩れ落ちた《能力者》を、男は黙って見下ろす。

彼はまだ息があった。

内臓が傷ついたせいで消化器官に血が流れ込み、気道をふさいでいる。

そのせいで呼吸もままならないらしく、何度も咳き込んで大量に吐血していた。

男はそんな《能力者》を、足で蹴って仰向かせる。

「動きがワンパターンなんだよ、バーカ」

下に向けた剣を、まっすぐ振り下ろした。

剣先は物も言わずに、黙って《能力者》の喉元へ吸い込まれていく。

《能力者》はしばらく痙攣していたが、やがてピクリとも動かなくなった。

目を見開き、口の周りにどす黒い血泡の跡を残し、仰け反って強張らせた体は、石膏で作った彫像のようであった。

鵜はその光景を、上体だけ起こして無言で見ていた。

かすかな音がして、男がこちらに近付いてくる。

警戒心をあらわにする鵜を彼は触ることはなく、羽織っていたマントを脱いで、投げてよこした。

ユキに近付いて行ったので、鵜は寄せまいとして叫ぼうとするが、そこで声が出ないことに気がついた。

愕然とする。

漸く意識を取り戻したらしいユキも必死に抵抗しているが、動けないために意味がない。

男は懷から取り出した布でユキの大腿をきつく縛ると、足に刺さっていた剣を一気に引きぬいた。

悲鳴が上がる。

崩れ落ちる彼を支え、男はユキの羽織っていたマントを割いて、傷口に巻いた。

月の細い、暗い夜の森の中である。

互いの動作と、運が良ければ表情ぐらいしか分からない。

彼がどうして二人を助けたのか分からない。

先ほどのやり取りからして、この男はあの《能力者》の仲間だったはずだ。

仲間を裏切って、どうして彼は二人を助けたのか、その目的が分からない。

「大丈夫かい、嬢ちゃん？」

男が鵜のそばにしゃがみこんで言った。

警戒して後ずさりする鵜を見て、彼は苦笑する。

「オレの元部下が悪かったな。前から嫌な奴だったんだが、俺が殺した。もう怖い思いはしなくてすむ」

”殺す” と簡単に言ってしまう男が恐ろしかった。

男はマントを指差した。

「それ、羽織ってな。若い娘が肌晒していいわけがねエ。本当は傷の手当てもしてやりてエが、オレがやるわけにもいかねエしな」

自分のマントを見ると、どこかで引っかけたのか大きな裂け目がある。

ありがたく使わせてもらうことにした。

しかし断じて目の前の男を信じた訳ではない。

ふと、鵜の視線が男から外れたのを見て、彼はわずかに振り返った。

片足を引きずったユキが、彼に剣を突き付けていた。

「彼女から離れろ」

今までにない彼の硬い声は、対象者に逆らうことを許さない。

男は、両手を頭の横まで上げて降参のポーズをとった。

立ち上がってそろそろと後退する。

その間も、ユキの剣先は油断なく男を睨みつけている。

しっかりしているように見えるが、実は彼も失血で立っているのもやっとならずである。

思わず駆け寄って横から支えるようにすると、彼は驚いたことに歩き出した。

この場から逃げようというのである。

片足を引きずりつつ、ユキと彼を支える鵜は二人で森のさらに奥へと向かう。

傷のせいで歩くスピードはさほど速くはない。

彼の体が徐々に冷えてゆくのがわかった。

足にまかれた布は、既に元の色がわからないくらい血に染まっている。

このまま彼が死んでしまうのではないかと恐ろしくて、思わず立ち止まると、ほぼ同時にユキが前のめりに倒れこんだ。

そのとき鵜は、彼の名前を叫んだつもりである。

しかし喉から出てきたのは空気の音だけであった。

ユキはとにかく足の出血が激しい。

血が止まらない。

貫通していたので当然だが、大きな血管が傷ついているかもしれないのが怖かった。

一人で彼を運ぶこともできずにおろおろしていると、木の陰から先ほどの男が駆け寄ってきた。

二人のあとをつけてきたらしい。

「あゝあ、やっぱ倒れたか。大体、こんな傷で動き回ろうってのが無理なんだよな」

目が合った。

この男が信用ならないのは変わらないが、それでも今は頼れるものは彼しかない。

鵜の視線を受けて男はニツとわらうと、ユキをひよいと担ぎあげた。

「嬢ちゃんはもうちょっと頑張れるな。お前らのキャンプまで戻ろぞ」

鵜がうなずくのを確認し、男は歩き出す。

鵜も、落ちていた剣を拾ってあわてて男について行った。

歩いている間でも、男への警戒は怠らない。

少しでも怪しい動きを見せれば、持っている剣で即座に切るつもりでいた。

夜が明けかかって、東の空が白んできている。

あまり進んだつもりはなかったのだが、以外と森の奥まで来ていたらしい。

ようやく森を抜けた時には、どこかで一番鵜の鳴く声が聞こえた。朝日に照らされ、男の異様な容姿があらわになる。

癖の強い髪は鮮やかな朱金色で、前髪をあげ、ヘアバンドで留め

ている。

服装は全体的にラフな作りになっていて、鵜たちの村で着る上着の代わりに、ポンチョのようなものを着ていた。

何よりも異様なのはその肌である。

褐色の地に、額を中心にして放射線状に赤銅色の線が入っていた。露出部分が少ないので詳しくはわからないが、胴は胴でまた別に中心部分があるらしい。

二つの色の違いは目立たないとはいえ、異様なことに変わりはない、またこのような不思議な肌の色をした人種を見たことがない鵜にとっては、驚きでしかなかった。

「ちィとばかり南に出すぎたな。ま、こっちにとっちゃ好都合か」

周りを見渡して、男がぼそりと呟いた。

好都合とはどういう事か。

剣の先端を少し持ち上げて、男を威嚇する。

すると男は、鵜を見て苦笑した。

「直接キャンプに出ても良いが、そうするとオレア、嬢ちゃんたちのお仲間にミンチにされかねんのよ。ほら、オレって怪しさ満点だろ？」

確かに、と思わず納得しかけた。

自分で言っていれば世話はない。

もう少し北のほうだと言われて歩き始めると、キャンプの方から土ぼこりと共に、馬のいななきが聞こえた。

よく見ると、ロッドを先頭に数人の男たちが馬を駆ってくる。

いつから気づいていたのか、彼らは脇目もふらずにまっすぐこちらに向かってくる。

やがて三人の手前で馬を止めると、ロッドが男を確認するなりス

ラリと腰の剣を抜いた。

剣は血に染まっていた。

「その子を下ろせ」

ロッドは殺気立っていた。

肌を刺すような鋭い殺気は、先ほどの恐怖をフラッシュバックさせる。

鷗は思わず一步後ずさった。

男は彼の殺気にはこたえた様子はなく、へらりと笑ってかわす。

「お久しぶりっス、少将殿。とりあえずその殺気、納めませんか？
嬢ちゃんがおびえてますよ？」

「黙れ。その子を下ろせといっているんだ、バークス・イレイオ中尉」

それでも彼は殺気を納めようとしなない。

ロッドの声はあくまで淡々としている。

彼は普段、父親のような包容力を持つ男であるが、この時ばかりは別人のようだと思った。

おそらく、在軍時代はこんな感じだったのだろう。

覇気だけで人を失神させることもできるのでは無いだろうか。

凍り付くような鋭い視線が、心底恐ろしいと思った。

彼の後ろで馬から降りた男が一人、バークス・イレイオと呼ばれた男に抱えられているユキを受け取り、馬に乗せて一足先にキャンプへ帰って行った。

別の男が、今度はイレイオの腕を後ろ手に縛り上げる。

彼はされるがままになっていた。

「傭兵に襲われかけてたんで助けたンすよ。坊ちゃんが重傷なんです。嬢ちゃんも……後からなら尋問でも拷問でもなんでも受けますから、とにかく今はキャンプへ行って、傷の手当てをしてやって下さい」

鵜はただただ、立ち尽くすことしかできなかった。

目の前の会話が遠い所で成されているように感じる。

意識が遠のいている訳ではない。

今この状況が、はつきりと頭の中で整理できていない。

「嬢ちゃん？」

気がつくと、あの男が鵜の顔をのぞき込んでいた。

驚いて鵜は大きく一歩後ずさる。

直後に男の腕がひねり上げられ、男は抗議の声を上げる。

「キオラ、剣をこっちに渡しな」

ロッドがいつの間にか馬から下りていて、手を差し出してきた。

鵜はずっと剣を握ったままでいた。

ロッドに言われて離そうとしたが、手がこわばってしまっただけで離れない。

体が小刻みに震えているのが分かる。

「もう大丈夫だから。ちっとも危なくなんかない。もうその剣も必要ないんだ。だから安心しろ、な？」

軽く頭をたたかれた。

それで一瞬手がゆるむ。

その瞬間にロッドは、鵜から剣をもぎ取るようにして手放させた。

ゆっくりと深呼吸をする。

「怖かったな」

ロッドの声が優しい。

思わず鶴は、その場に泣き崩れてしまった。

Sect. 20 傭兵の男（後書き）

H 23・8・18 改修

待ってました、新キャラ登場!!

彼を出すためだけにこの章は存在するのです!

お名前はバークス・イレイオさん。

彼は一体何者なのでしょう?

明らかに異人種ですよね（笑）

ユキが気を失っている間に、彼に変わって変態《能力者》から鵜を救ってくれた命の恩人です。

ユキの出番が！

いえね、別にユキ君は弱虫なわけじゃないんです。

まだまだ未熟者ってだけです。

え、言い訳になってないって？

うゝん。

S e c t. 21 目覚めると（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 21 目覚めると

ふと目覚めると、そこはテントの中だった。

（なんか前にもあったな、こんなこと）

むくりと起き上がると、どうも動きにくい。

胸元を見ると、包帯が巻いてあった。

誰かが治療してくれたのだろうか、傷を負ったときのことを思い出しかけて、とっさに頭を左右に振って振り払った。

（泣き疲れて寝ちまうとか、ガキじゃあるまいに）

落ちてきた前髪を書き上げて、鵜は立ち上がった。

この世界に来て新しく生えてきた灰色の髪は、今では頭髮の内ではほとんどの割合を占めている。

この仕事が始まる前に、元の茶色の部分をロッドにばっさり切ってもらったので、今は毛先のわずかな部分だけが茶色いままだ。

ここだけの話だが、ロッドが切ったのは大雑把な部分だけで、後でルーチェに細かい部分を整えてもらった。

元の髪の長さは、女にしては短いほどのショートカットだったが、こちらではある程度長くしておくのが常識だと知り、現在肩に付くか付かないかの所まで伸びている。

正直鬱陶しい。

この世界では庶民はともかく、政府の高官になればなるほど、男も女も髪は長く伸ばしておく。

役人の服務規程に、髪を指定の形に結い上げなければならぬというのがあるかららしいが、それ以上に長い髪は、入念な手入れの

必要があることから、持ち主の生活水準が高いことを示している。
ちなみに男は年を経るたびに絶対量が減っていくのがお約束なの
で、その場合はカツラを着用。

大きな役所のある町には必ず一つはあるカツラ屋さん。
結構繁盛するらしい。

育毛剤の愛用者も多数いるとかいないとか。

どちらにせよ、女である鶇には一生縁のない話である。

胸元に巻かれた包帯ができるだけ見えないように服を着て、テン
トを出た。

とたんに啞然とする。

地面が所々黒く焼けていて、キャンプ全体が異様な臭いに包まれ
ている。

思わず袖で鼻を覆った。

テントの数が減ったように見えるのは、おそらく気のせいではな
いだろう。

ふらふらと歩き出す。

人影はあるが、みな疲れたように自失している。

「キオラ、目が覚めたのか？」

ミエスだった。

額に包帯を巻いている。

ユキは？ と聞いたつもりだった。

しかしどうしたわけか、声が出ない。

あのときは一時的なものだと思ったのだが。

喉元を押さえて放心している鶇を、ミエスは怪訝そうにのぞき込
む。

「どうした、キオラ？ 傷が痛むのか？」

鵜はハツとして急いで首を横に振った。

声が出ないのなら、相手との意思疎通はジェスチャーか筆談に頼るしかない。

しゃがみ込んで、地面に文字を書いた。

その土は赤黒く染まっていたが、嫌悪感を押さえて書き続けた。

『あたしは大丈夫。ユキは？』

ミエスはそれを見て、ひどく驚いたようだった。
無理もない。

「キオラ、お前……」

『ユキは？』

鵜は重ねて問いかける。

詳しい説明は求めないで欲しい。

鵜自身も、なぜこうなったのか分からないのだ。
それよりも、ユキは。

「大丈夫だ、命に別状はない。出血は多かったが、骨も血管も筋も無事だった。それよりもお前、声が出ないのか！」

鵜は黙って頷いた。

ショックではあるが、パニックっている場合ではないことぐらい承知している。

「ちょっと来い！」

ミエスが鵜の腕をつかんで歩き出そうとした。

しかし突然のことに、鵜は驚いてその手を振り払ってしまった。
一瞬、二人の間に沈黙が走る。

ミエスは難しい顔をしていた。

腕をつかむ代わりに、付いてこい、といって歩き出す。

鵜は大人しく従った。

ミエスはずんずんと先へ歩いていく。

歩くのが早い。

ついて行くのがやっとである。

歩いている間に様々なものを見た。

壊れた道具、破れたテントの切れ端、血に染まった葉、地面に突き刺さったままの矢。

腕が一本丸々転がっていたときは、さすがに前を歩いていたミエスを引きとめた。

ミエスは即座に近くにいた者呼び止め、腕の処理を言いつけると、自分たちは再び歩き出した。

着いたところはやはり周囲と同じようなテントである。

ミエス曰く、先日の戦いで本部テントが焼けてしまい、今はここが本部となっているのだという。

テントの中にいたのは村長とロッド、数人の主要メンバーと、昨夜会ったあの奇妙な男だ。

「キオラ、目が覚めたか。傷の具合はどうだ？」

ロッドが気遣ってくれる。

鵜は大丈夫だ、という意味を込めてうなずいた。

同時にミエスが、村長の耳元で何事かを囁く。

村長は大きく目を見開くと、鵜に座るように促した。

「キオラ、今丁度昨夜の話をしていたんだ。お前、声が出ないんだって？」

ロッドが目をむく。

テントの中の空気がどよめいた。

多くの意味ありげな視線が鵜に向けられる。

そんな中、一人飄々としていた男がいた。

昨夜会った奇妙な男こと、バークス・イレイオである。

「そりゃア、普通あれだけの目に逢えばそうもなるでしょうよ。

相手はオレが殺^やりましたがね、嬢ちゃんからしてみれば相当恐かったと思いますよ。なんせ未遂とはいえ、襲われかけたんスから」

無神経な発言をした男に、冷たい視線が突き刺さる。

彼は少し肩をすくめただけだった。

「キオラ、アイツのことは気にしなくていい」

ロッドがきっぱりと言い切った。

しかしこれ以上話を聞きたくない鵜は、表情を変えることなく黙ってテントから出た。

誰もそれを引き留めはしない。

「これは俺たちの手には負えん」と背後で村長がつぶやいたのが聞こえた。

この話はあつという間に男たち間に広まったらしく、その日の夕方には誰も鵜に声を掛ける者すらいなくなった。

皆が鵜を遠巻きにしている。

どう扱って良いか分からない、と言った雰囲気だ。

しかし、今の状態に最も戸惑っているのは鵜自身であった。

ミエスに腕を捕まれたとき、思わず勢いで振り払ってしまった。

だが男に触れることそのものが嫌な訳ではない。

現にその後、千切れた腕を見つけたときにミエスを引き留めるこ

とができたのは、鵜が彼の肩をたたいたからだ。

自分から触れることはできる。

前置きさえあれば、触れられることも嫌ではない。

けれども、強いて言うなればできるだけ触れたくはない。

男たちは鵜に構わないようにしている。

極力近づかないようにして、鵜を刺激しないようにしている。

しかし恐ろしい目にあつたからと言って、男に恐怖心を抱いている訳ではないのだ。

あえて言えば、できるだけ関わりたくないというだけで。

（でもこれってたぶん、時間がたてばある程度は薄れてくるんだよな）

声はともかく、対男性についてはそうなるはずだ。

彼らには悪いが、鵜からしてみれば、彼らの気遣いはありがた迷惑以外の何ものでもない。

（とはいえ、ロッドや村長は相変わらず忙しそうだし、ユキはまだ動けないし）

どうも先日の襲撃では任務を完遂したとは言い難いらしい。

捕虜となつたあの男——バークス・イレイオから敵方の情報を引き出して、次の作戦を練っている。

イレイオは喜んで情報提供しているという。

一応扱いは捕虜と言うことになってはいるが、手錠と見張りが付くなどの多少の行動制限をされているだけで、彼はキャンプの中を自由に歩き回ることが許されている。

（あ、お礼言わないとな）

危ないところを助けてもらったのだ。

そこら辺のけじめはきっちり付けておきたい。

イレイオは村への帰化を求めている。

しかし恐らくそれは難しいだろう。

セタ村はただでさえ閉鎖的な村だ。

鵜にしても、一部の者達には認めて貰ってはいるものの、それ以外の者達には牛馬同然の仕打ちを受けることもある。

彼の前歴を考えると、立場は非常に悪い。

敵方であつた彼が村に完全に受け入れられることは絶対にない。

ただ、戦いにおいては非常に優秀な男であることは確かだ。

それはロッドが保証しているし、村長も彼の实力は認めている。

問題があるとすれば性格だ。

外見はそう悪くない。

むしろ顔は良い方で、外見年齢も二十代後半から三十代前半ぐらいである。

もっとも、彼もロッドと同じく元軍人なので、実年齢は見た目の倍以上ある。

試しに年を聞いてみるとロッドとそう変わらなかった。

普通にしていれば何ともないのに、ことあるごとにロッドに猛アタックしている姿は滑稽ですらある。

そう、あの矢文の送り主はイレイオである。

ロッドに心底惚れ抜いているらしく、彼の言うことには嬉々として従う。

最初は気持ち悪がっていた周りの男達も、数日もすればすっかりそれを面白がるようになっていた。

ロッドはイレイオに用事がないとき以外は彼からひたすら逃げ回っている。

どうしてもイレイオと話さなければならぬときは、必ず誰かを同伴させる。

しかしイレイオはめげずにロッドにアタックを繰り返している。

それが無性に周囲の笑いを誘う。

ファルス
「笑劇だ」と誰かが言った。

実際その通りで、いつも冷静なロッドが青ざめて慌てふためく姿が、ハートを飛ばして彼を追いかけるイレイオとは対照的で、端から見ている分には非常に面白い。

ただし、人格が変わるのはロッドを目の前にしたときだけで、それ以外は普通の人である。

真面目な話、人柄は悪くない。

ロッドが絡むと豹変するだけで。

鵜はそれを、みんなと一緒にになって腹を抱えて笑いながら見ているだけである。

Sect. 21 目覚めると（後書き）

H 23・8・21 改修

なんだかちよつと大変なことになりましたね。

本当はこんな展開にする予定ではなかったのですが、ボックスが出てきた辺りから予定が狂いまくって……

鷗ちゃんの声をいつ戻そうか、ただ今検討中で御座います。

官吏の方々の髪型は、特に男性陣には優しくありませんね。

仕事中毒気味のおじさま達は、ほっとくとあつという間につるんといっっちゃうんで、カツラ屋さんは大繁盛しているそうです。

S e c t. 22 パークス・イレイオ（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 22 パークス・イレイオ

『助けてくれてありがとう』

ある日、イレイオにあてがわれたテントを訪れて、先日助けられた札を言った。

現在ロッドに石版とチョークを貰い、筆記によって意思疎通を行っている。

『どうして仲間を裏切ってあたしを助けてくれたんだ？』

「んゝ。別に仲間って訳じゃねエよ。軍を辞めて金に困ってたから小遣い稼ぎに傭兵やってただけで、他の連中も似たり寄ったりだぜ？ まア、中には戦いが趣味なやつとか、別の目的のやつも居たりしたケド」

あの《能力者》などは良い例だ。

「たぶんオレは軍人が天職だったんだろうナ。軍規では風紀が乱れるつつってそう言うのは禁止されてんだ。だからか知らねエが、どうもオレはあいつたことが嫌いでネ。ついつい嬢ちゃんを助けちゃった。ホントは無視して通り過ぎようと思ってたんだがなア」

軍規のおかげで鷓の貞操は守られたのだ。

軍規万歳！

『あのときアンタが助けてくれなかったらと思うとゾツとするよ』

「ぎりぎりで間に合ってヨかった。傷は大丈夫か？ 痕になって残りでもしたら大変ダゾ。若いんだから、嫁に行けなくなったらどうするよ」

以外と彼の頭の中はジジくさい。

短剣で浅く刻まれた傷は、場所が場所だけに直りにくい。

おとなしくじっとしていれば済む話であるが、鵜がそんなことをするわけがないので、未だに傷口は塞がらないでいる。

『大丈夫だ。元々そんなに深くないしな。痕が残ったら残ったで、その時はその時だ。嫁に行けないってんなら、一生独身でもあたしは別に構わないよ』

「独身のまま年をとったら悲惨ダゾ」

『あれこれ言いたいやつには言わせとけばいいさ』

彼はカラカラと笑った。

「ところで嬢ちゃんや。ちょっと気になってたことがあるんだが、いいかい？」

『なんだ？』

「単刀直入に言うとな。嬢ちゃん、あんた《能力者》だろ」

鵜は一瞬キョトンとし、それから眉根を寄せた。

それを見てイレイオは慌てた風に手をひらひらさせた。

「あー、気を悪くしたんなら謝る。何の《能力者》かなって思っ

ただけなんだ」

『見て分かるモンなのか、《能力者》って？』

「あゝ、人に寄るだろうな。オレなんかは仕事柄、何人か《能力者》を知ってっからサ。嬢ちゃんは《能力者》だけど、相手に物理的な影響を与えるタイプじゃないだろう？　もしそうなら、あのとき反撃できてたはずだからサ」

それでも眉間のしわが取れない鵜を見て、イレイオは困った顔をする。

「ただの興味本位なんだ。だからそんな怖い顔をしてくれるなんて。答えたくないならそれで良いからヨ。ただ、北方系の人間がこんな南にすることが珍しいなと思ってサ」

『……北方系？』

「違うのか？」

今度は鵜が困惑する番だった。

たしかに以前ロットに、鵜の髪や肌の色は北に多いものだと言われたことはあるが、ここまではつきりと断定されるとは思わなかった。

東方第十五区・メタルシアは、東方と南方の境にある区だ。

自分の村に引きこもっていることの多い北方人が、こんな所にいるのは珍しいと彼は言う。

難しい顔をして考え込んでいる鵜を見て、イレイオはそれ以上聞くのをあきらめた。

「言いたくないならいいぜ」

彼の言葉は訛っている。

聞き苦しくはないが、なんとなく外国人が日本語を話しているような違和感がある。

所々意味不明な単語は出てくるが、そこはそれ、鵜の《言語理解能力》がしっかりフォローしてくれる。

『《言語理解能力》だよ。あたしは《言語理解能力者》だ』

イレイオが目を丸くした。

「そりゃア、ますます珍しい……」

『それと、あたしは北方人じゃない。今答えられるのはそれだけだ。それ以上は色々事情があって言えない』

「それだけ聞きゃア十分だ」

彼は軽快に笑った。

『今度はあんたのことを聞いても良いか？』

「オレかい？」

彼自身のことというより、彼の種族について興味がある。

「名前は知ってるよな。バークス・イレイオ。種族は東方系短命種、グルゼリア人だ」

グルゼリア人は元は南方にいたのだが、第一次政戦が始まる少し前に、一斉に東に移住してきた種族らしい。

個体数が極端に少ない、少数人種である。

「南方の人種ってエのはだいたいがタフで荒っぽい奴らなんだが、オレたちはその中でも大人しい方でネ。長い間近辺の種族と戦争してたあげく、負けて土地を追いつちまったんだよ。それで東に移ってきた訳なんだが、東方人から見るとオレたちは凶暴な野蛮人に見えるらしいんだよなア、これが。で、結局そこでも居場所を失って、今では絶滅寸前の国家保護人種だヨ。ほとんどの奴らが家族単位でそこら辺をうろついてるか、傭兵や軍人として闘ってるかのどちらかダナ」

『それってますます数を減らすことになるんじゃないやあ』

「そうそう。だから国は大人数で一カ所に固まって生活しろって言უნだがヨ、いったん放浪生活が身に染みついちまうと、なかなか定住なんてできるもんじゃねエやネ。数は減る一方だ!」

彼は大口を開けて笑う。

よく笑う男だ。

『何でロッドを追いつ回すんだ?』

「そりゃア、お前……いいのか? 語り出すと長いぞ?」

いったん嬉々として話し出そうとしたイレイオだが、すぐに躊躇して訪ねる。

『そんなに長いのか?』

「一昼夜語り通せる自身がアル！」

胸を張って答える。

随分熱心なことだ。

『ロッドの部下だったって聞いた。こっちの作戦が傭兵側に筒抜けだったのは、あんたがいたからか？』

「ん？ あア、まアそれもあるカナ。傭兵隊の頭が、どこから聞いてきたのかオレが以前あの人の部下だったってことを知っていて、特徴なんかをいろいろ聞かれたナ。給料もらっている以上答えない訳にも行かないし、それにあの隊長はなかなか見所のある人だったンだよ。いざとなったらこの人言うことを聞いても良いんじゃないかって思えるぐらいにハ。だから、人づてに聞いてたあの人の癖を話したって訳だ。あの人が尉官だった時代は、オレはまだあの人の部下じゃなかったカラな」

『裏切りだとは思わなかったのか？ 仮にも元上司なんだし……』

あいつのこと好きなくせに、というのは言わなかった。
すると彼はにやりと笑った。

「あの人はそんな弱い人じゃねエよ。数千人の部下に様に慕われてた人ダゼ？　ソンぐらいでやられるような人なら、誰もついちやこねエよ」

もしかしたら、ロッドを追い回していたのはこのイレイオだけではなかったのかもしれない。

「あの人ならオレはどこまでだつてついて行くぜ。命預けても惜しかアない。身体も心もみんなくれてやらア。性別なんざ関係ねエ！」

だんだん発言が怪しい方向に向かつてきた。

どうやら純粹な忠誠心が高じて恋愛感情に発展したらしい。

鵜はわずかに顔を引きつらせる。

男が同性に向ける愛を熱弁されても、全然嬉しくない。

「お前、いい加減にしろよ。それで女房に逃げられてるんだろ
うが」

声とともに、開け放しになっていたテントの入り口が人影に塞がれた。

ロッドだった。

「少将殿！」

とたんにイレイオの目が輝き出す。
それを見てロッドは苦笑いをした。

『奥さん、いたんだ』

「男ばっか追い回してるこいつに愛想尽かして、子供連れて出て行っただけだな」

鵜は目をむいた。

「男ばっかりって、オレは少将殿以外は眼中にないっスよ。それに別れたつつつても、たまには会ってますカラ」

「子供の顔見るためだろうが」

「ま、そうなんすけど」

イレイオと話しながら、ロッドはちゃっかり鵜の隣に座っている。テントは一人用なので、大人が三人も座ると狭い。

『イレイオは独身かと思ってた』

「士官は独身の方が珍しいな。宮仕えをしている時点で顔は良いからモテるやつは多いし、なにより将来有望なやつは俺みたいに政略結婚とかな。中尉も確かそうだ。結局、どっちも見事に周囲の期待を裏切った結果になったがな」

最後の方を自嘲気味に呟く。

『何で宮仕えをしてるから顔が良いんだ？』

言われてみれば、《能力者》であるロッドはともかく、イレイオもどちらかという和美男子の部類に入る。ただの偶然だと思っていたが。

「仕官昇進その他諸々の選考基準に、容姿の項目があるからサ。だから階級が上がれば上がるほど、美男美女がそこら辺にゴロゴロ転がってるぜ」

鵜は呆れて眉をひそめた。

『不公平なんじゃないか？ 不細工なやつでも優秀なのはいるだ

ろうに、顔で判断してたんじゃ宝の持ち腐れだ』

ロッドがうなずいている。

イレイオは笑った。

「運も実力の内って言うダロ？ どうせ優先順位はそんなに高くないんだ。よほど醜いヤツでもなけりゃ下働きぐらいにはなれるって。どうしても昇進したけりゃ整形手術を受ければいい」

『そう言う問題なのか？』

「少なくともお上はそう考えてるし、今までそのことで問題が起きたこともない」

何というか、役人にはずいぶん大味な人が多いのだろうな、と鵜は考える。

「そう言えば少将殿、何が御用があつたんじゃないんスか？」

イレイオが思い出したように言い出した。

「ああ、そうだった。次の作戦を立てるから、会議の時間を知らせに来たんだ」

今は昼前。

昼食後に会議が開始されるという。

食事の後片付けが終わったら暇になる鵜は、未だ床を動けないユキの見舞いにでも行こうかと考えていた。

Sect. 22 パークス・イレイオ（後書き）

一転して台詞多めの話になりました。

一番苦戦したのがイレイオの口調ですね。

いったん全部普通に書いてから、主に語尾を中心に所々を適当にカタカナに直しました。

これでしゃべったかどうかというのが最近の課題です。

ちなみにイレイオの奥さんはグルゼリア人ではありません。

S e c t. 23 能力開花（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 23 能力開花

ユキはテントの中で、上体を起こして座っていた。

入り口付近には真新しい松葉杖が二本、そろえて立てかけてある。

「父さんが作ってくれたんだ」

『起きて大丈夫なのか？ 傷は？』

ユキは頷く。

「たいしたことないよ。骨も無事だったし、大きな血管もうまく避けてた。杖があればもう立てるよ」

鵜は肺の中の息を吐き出した。

『心配した』

傷はもとより出血がひどく、輸血しなければならなかった。

命に別状はないとのことだったが、怪我のために丸一日、熱を出して寝込んでいる。

流石に生まれたときからこの環境で生きているだけのことはあり、以前の鵜のように意識不明と言うことはなく、回復も早かった。

しかし、心配したのだ。

先日の作戦では五人の死者が出た。

負傷していないものはいない。

未だ意識不明のものもいる。

ホイズもその一人だ。

二人を逃がした後、あの人数に一人で立ち向かい、ひどい傷を負った。

「その……声が出なくなっただって聞いたけど、本当みたいだね」

ユキが鵜の持つ石版を見て言う。

『大丈夫だ。しばらくたてば元に戻るだろう』

当の本人はケロッとしている。

大きなショックがあったとき、周囲よりも当事者の方が以外と冷静であったりするものだ。

「ごめん」

ユキが呟いた。

「守れなくて、ごめん。その上、キオラに怪我までさせて」

鵜は項垂れたユキの背を軽くたたく。

『気にすんな。怪我つつてもたいしたことじゃない。あたしよりもお前の方が重傷なんだから。人のこと気にしてる場合じゃないだろう？』

それでもユキは項垂れたままだった。

「怖い思いさせたのに、俺は動けなかった」

鵜は小さくため息をついた。

『あのな、頼むからそのことはほっといてくれないか？ あんまり思い出したくないんだよ』

するとユキはますます項垂れてしまった。

勘違いさせてしまったかな、とこめかみを搔く。

『みんなが、できるだけあの夜のことに触れないようにしてくれてるのは分かるよ？ でもな、あからさまに視線をそらされたり同情の目で見られたり変に優しくされたりすると、逆に思い出しちゃうんだよ。氣遣われると、なんかこう、あたしは被害者なんだなっていうのが身に染みて、居心地が悪いというか。あたしとしては笑い飛ばしてもらった方がむしろ楽なんだよな。だからそんな深刻な顔をしてあの夜のことをまざまざと思い出させないでくれ。普通に話してくればいいから。あたしは気にしない』

「……俺が気にする」

鵜はがつくりと肩を落とした。

彼は真面目すぎる。

鵜は石版を置いてユキの肩をたたき、自分に注意を向けさせる。

「なに？ ……っ！」

振り向いた拍子に、鵜の人差し指が見事に彼の頬に突き刺さった。

（おお、やらかい！）

見事な手触りだ。

彼を驚かせることが目的だったのに、変なところで感動してしま

う。

一方のユキはと言うと、頬を突かれたまま膨れている。引っかったことが悔しいようだ。

鶯はその顔を見て思わず吹き出してしまった。

声こそ出ないが、腹を抱えて大笑いする。

するとますますユキはふて腐れてしまう。

鶯はさらに笑う。

堂々巡りで、とうとうユキは完全に拗ねてしまった。

そっぽを向いていじけている。

しかし鶯にとってはそんな姿も許容範囲。

悪いとは思うが、はつきり言ってカワイイ。

癖になりそうだ。

「笑いすぎ。いつまで笑ってるんだよ！」

怒られてしまった。

(悪い悪い！)

石版には書かず、心の中で謝り倒す。

書いたとしても、態度がそれを裏切ってしまったているため、誠意が伝わるどころか逆に嘘くさくなってしまう。

怒られるがままになっていた。

一応笑わないように努力はしてみるのが、プリプリ怒るユキの様子がまた可愛くて、やっぱりやめられない。

ふと、突然ユキの様子が変わった。

これまで景気よく怒っていたのとは打って変わり、なにやら怪訝そうな表情になる。

当然鶯も何だ何だ？ となる。

いつの間にやら笑いは引っ込んでしまった。

「キオラ、今何か言った？」

今度は鵜が困惑する番だった。

相変わらず声が出ないため、大爆笑と言っても実際に笑い声が聞こえている訳ではない。

（はあ？）

「ほら、やっぱり！」

ユキが反応する。

とは言っても、やはり声は出ていない。
石版も地面に置いたままである。

（空耳じゃねえのかよ？）

「空耳なもんか！」

驚きを含んだ沈黙が二人を包んだ。

今確かに、鵜は声を出さなかった。

しかしユキには通じている。

当然石版は使っていない。

鵜は唇を引き結んで考えた。

（ユキの《能力》は確か《千里眼》だったよな？　なんであたしの考えてることが分かったんだ？）

ちらとユキを見ると、彼も同じようにして考え込んでいる。
今のは通じていないらしい。

『読心術?』

石版に単語と疑問符のみを書いて見せてみた。

「まさか。俺の《能力》は《千里眼》だよ? 心の中まではのぞけないって」

通じたときと通じなかったときに、何か共通点があるはずだ。ユキに言われるまで、鵜はずっと石版を使って会話してきた。イレイオとロッドとの会話然り、その他然り。

鵜の《能力》は《言語理解能力》だ。

オーラルコミュニケーションをスムーズに行わせるのが本職で、副職内職はない、と言うか知らない。

「口、動かしてなかった?」

やがてユキが呟いた。

(くち?)

「そう、口。今も『くち?』て言っただろ? 口が動いてた」

とすると、思考と同時に口が動いていれば、話すのと同じことができると言うことか?

(あたしは何を言ってるか、はっきり聞こえるか?)

今度ははっきり口を開けて思考してみた。

「聞こえるよ。普通に話してるみたいだ」

ユキもはっきりと肯定する。

「キオラは《言語理解能力者》^{ビカラ}だよな？ 異言語を翻訳することができる。もしかして今の状況も、キオラが異言語を話してるってことになってるんじゃない……」

（そりゃいくら何でも拡大解釈しすぎだろう……）

「でも、それが一番可能性としてはあり得るよ」

（あたしは《能力》を使ってるつもりはないぞ？）

「キオラは普段から《能力》を使ってるじゃないか」

言われてみれば確かにそうだ。

聞こえる言葉はともかく、口元を見る限り、彼らは日本語を話している訳ではない。

最近発見したことだが、鵜が無意識に使っている《言語理解能力^{ヒコ}》のおかげで、公用語は普通に、方言はエコーがかって聞こえる。エコーは、方言がマイナーであればあるほど強くなる。

異言語であれば、聞こえるのは彼らの話す言葉だが、頭では公用語として理解できる。

実験の協力者はロッドとルーチェだ。

二人はロッドの仕事の関係で各地を回っている。

特に、ルーチェの故郷は主都から離れたところにあつたため、相当強烈な方言があつた。

実際にしゃべってもらうと、彼女のイメージとは全く違う、実に田舎くさいものとなる。

彼女があままできれいに公用語を話せるようになるまでには、並々ならぬ努力があったに違いない。

（それにしても、あたしの《能力》にこんな力があつたなんてな）

「俺もびっくりだよ。《言語理解能力》は得体が知れないな」

（普通《能力》ってそういう応用技みたいなのは無いんだろう？）

ユキは頷く。

「ないね。俺もロッドも、《千里眼》なら《千里眼》、《分身》なら《分身》オンリーだ。キオウみたいに滅茶苦茶なのは初めて見た」

彼の言葉に鵜は膨れてみせる。

（滅茶苦茶で悪かったな）

すると彼は勝ち誇ったように笑った。

「さっきのお返しだよ」

（こいつ）

一瞬、彼の頭を小突こうとして無言で拳を作りかけた鵜であったが、思い直してやめた。

なにやら外から殺気じみた気配がしたからである。
気づいたのはユキとほぼ同時であった。

Sect. 23 能力開花（後書き）

ユキが可愛すぎる／＼／

書きながら一人もだえていた？月でございます。

無事で良かったね、ユキ！

そして鵜、あなたは一体何者？

いつから《言語理解能力》はそんなにお役立ちな《能力》になったの！？

本当はこんなつもりじゃなかったんだけどな

イレイオを出したらすぐに任務を終了させて、みんなを無事に村に帰してあげるはずだったのに……

ホイズは意識不明だし、鵜に変な能力は芽生えるしで、随分遠回りな感じになってしまいました。

S e c t. 24 呆気ない終わり（前書き）

※ 作者の勝手な都合により、二章は『迷鳥図鑑』を掲載いたしませんので、悪しからず。

Sect. 24 呆氣ない終わり

「外が騒がしいな」

眩いたのはユキである。

どこかで言い争うような声が聞こえる。

「あれ、とってくれる？」

ユキは入り口に立てかけてあった松葉杖を指さした。

「外に出てみよう」

鵜は驚いて慌てて反対する。

（そんな身体で何言ってるんだ！ 無茶はよせ！）

しかしユキは聞き入れない。

「大丈夫だよ。ちよつとだけ」

（自分の顔色分かって言ってるのか？ 真っ青だぞ！ 無理に動いて傷が開いたらどうすんだよ！）

「キオラ、頼むよ。本当にちよつとだけだから」

たぶんユキは、鵜の言っていることを全然分かっていない。

顔色は悪く、端から見ているととても痛々しい。

（あたしが見てきてやるから。だからお前はここで大人しくしてろ。いいな！）

ユキの両肩をひつつかんで、言い聞かせるように言う。

（ぜってえ動くんじゃねえぞ！）

ユキが渋々頷くのを確認して、鵜はテントを出た。

言い争う声はキャンプの入り口の方で聞こえた。

物陰に隠れてそっと伺ってみると、服装から役人と思しき二人組の男と村長たちが、大声で言いあっている。

「だから、それが納得できないと言っている！ こっちは死人まです出してるんだぞ。今更おめおめと引き下がれるか！」

指を突きつけて、相手を脅すように怒鳴っているのはロッドだ。

「死人を出しているからこそ、だ。これ以上の損害はお前たちも痛かろう。次の死体を出す前に、役所に任せてとっと村に帰れ」

役人は《盗族》たちに、後は役所が引き受けるから、仕事を切り上げて村に帰れと言っているらしい。

しかしこちらは、ロッドの言うとおり死人も出ている。

任務を成功させないと、死んでいった仲間たちに顔向けできない。と言うのが《盗族》側の言い分だ。

鵜は眉を寄せた。

風の向きが悪い。

通常の音量の会話がよく聞こえない。

もっと近づこうとして、そっと隠れていた物陰から体をずらす。

「おい、嬢ちゃん！」

押し殺した低い声に呼び止められた。

同時に、二の腕を捕まれて強く引かれる。

一瞬、鵜は体を強ばらせた。

「今出てッたら、あの役人どもに見つかッちまうって。そりゃア流石にマズイだろ」

イレイオだった。

近くには彼の見張り役の男も居る。

とっさのことに未だ体は強ばったままであったが、知り合いだと言うことでいくらか落ち着く。

『役人たちはいったい何しに来たんだ？』

鵜は指で地面に書いた。

ユキと同じように話しても良かったが、《能力者》でない彼にも通じるか分からなかったからだ。

「数日前に、役所が標的ターゲットを正當に攻められるだけの証拠がそろったらしい。警固隊が踏み込むのに邪魔だからって、俺たちに引き下がるように言ってきた。それでさっきからずっとあの調子さ」

教えてくれたのは見張り役の男だった。

知らない顔だったが、どこことなく面影に馴染みがある。
すると彼は微笑んで、ユキの従兄だと名乗った。
言われてみれば、目元がよく似ている。

「あいつらは、俺たちが仕事をすることをあまりよく思っていない。手柄は自分たちで立てたいらしいね。でも、多くの人間が同じことを考えるから、様々な思惑が重なって、よく捜査をミスるんだ。それでにっちもさっちもいなくなって、結局俺たちを頼ることになるんだから皮肉なものだね」

『でも《盗族》はそれで食ってるんだろ？』

「金銭面で言えばそうだね。食料以外のほとんどは任務の報酬に依存してるから、仕事がなくなると俺たちはすごく困ることになる」

《盗族》の存在そのものが、超法規的な矛盾したものである。
雇い主の命令には極力従わなければならないのだが、荒くれ者たちは時として感情的になってしまい、役所の命令を無視してしまうことがある。

役所との折り合いが悪い原因の一つだ。

そもそも、未だ重体で動かせない者もいるというのに、引けと言われてはいそうですかと簡単に引くわけにもいかない。

『引くのか、こっちが？』

「たぶん。今までも、こちらの意見は通ったことがない」

彼は少し肩をすくめて見せた。

とすると、ロッドたちは不毛な争いをしていることになる。
利口な彼らしくない。

そう地面に書くと、突然イレイオが割って入ってきた。

「時間稼ぎに決まってンだろオが」

『どういうことだ?』

鵜は全く意味が分からずに混乱している。

「万が一、役人にオレらの姿を見られでもシたらどうすンだヨ。オレらがここに居ちゃマズインだって、さっき言ったダロ? だからオレらが完全に身を隠すまでの時間稼ぎをしてンだヨ」

確かに、見るからに異人種であるイレイオが、こんな所にいては不自然なのは分かる。

しかし、鵜は別にここにいるのも良いはずだ。

役所は鵜を探してはいるが、イレイオはそのことを知らないはずである。

「《盗族》は普通、仕事に女を連れ歩かねエ。だから嬢ちゃんがここにいと、こいつらが勘ぐられることになンだよ……なんで嬢ちゃんがコンナトコにインのかは知らねエが、隠したがるってことは、見つかったらヤバイってことでいいンダヨな?」

後半部分は見張り役を振り返りながら言う。

彼はそれには答えず、二人を促してこの場を離れようとする。

三人は歩き出した。

書くものがない鵜は、話すことが出来ないため、会話は自然と男二人のものになる。

とはいえ、見張り役は相当イレイオのことを警戒しているようで、二人の会話は決して穏やかなものではなかった。

先ほどイレイオが無理矢理割って入ったのも、彼は不愉快に思っただけらしい。

言葉の端々に鋭いとげがある。

イレイオを見下してると言ってもいい。

どうやら二人の会話の内容から察するに、本当は別の者が鵜を探しに行ったらしいが、その男が見つける前に二人が鵜を見つけてしまったらしい。

（ユキはもうちょっと穏やかな性格してるからなあ。こうとげとげしてると、雰囲気似てるだけにすげえ違和感があって……てえ、ユキ？）

特に目的もなく、あちこち彷徨わせていた視線の先に意外な人物を見つけてしまい、思わず立ち止まった。

同時に、前を行っていた男二人が振り返る。

「ユキがどうかした？」

見張り役の男に聞かれて、鵜は無言で数メートル先に立っているユキを指さした。

松葉杖を突いている。

鵜はヒクリ、と口元を引きつらせる。

早足でユキに突進すると、彼の胸元を人差し指できつくつついた。

（大人しくしてろつつっただろうが！ 忘れたのか、えゝえ?!）

歯を食いしばって全て舌だけで発音すると、迫力のあるものすごい形相になる。

ついでに声も低くすれば、ちょっとヤクザな脅迫者のできあがり。ポイントは全ての語にアクセントを十分効かせること。

少し下品ではあるが、齒をむき出しにして齒茎まで見せれば言うことはない。

遊んでいた時代に身につけた技である。

案の定、ユキはたじたじだ。

「き、キオラがなかなか帰ってこないから」

（オレは動くなつたよなあ。え？ 言ったよなあ？ てめえも領いたよなあ。それともナニか？ アレはオレの勘違いだったのか？ どうなんだ、オラ！！）

人差し指がついに拳に変わった。

巻き舌になって、迫力もup！

「キオラ、落ち着いて！ 一人称が『オレ』になってる！」

（んなことどうでも良いんだよ！！）

ユキの頭に拳固を落としてしてやった。

その様子を見た見張り役の男が慌てて飛んでくる。

「おい、小突きあつてる場合じゃない。キオラを早く隠さないと。ユキ、そちに迎えが行っただろう。そいつに事情を聞かなかったのか？」

「聞いたよ。だから慌ててキオラを探しに来たんじゃないか」

事の発端となった人物は、素知らぬ顔で明後日を向いている。

「とにかくよオ、とつとと隠れちまおうぜ？ 話はそれからでも

出来るじゃねエか」

もちろん否やを述べるものはいない。

話を遮られてまたもや見張り役は不機嫌そうだったが、あえて何も言うことはしなかった。

Sect. 24 呆気ない終わり（後書き）

グダりました。特に中盤。

ユキが出てくると少しはマシになるのですが……

そもそもこの話は当初の予定にはなかったんですよ。

プロット立ててるときには影も形もなかったのにい。

おかげで全然話の内容がはつきりと固まらなくて、このようにぐだぐだな展開となってしまうました。しくしく。

次からはちゃんとした内容ですから（あんま変わらないかもしれないけど）。

期待しないで気長くに生暖かい目で見守って下さい。

Sect. 25

帰還と悲しみ、喜び

結局、《盗賊》側は撤退せざるを得なかった。

不服に思う者はたくさんいたが、そもそもあの口論自体が、鵜やイレイオを役人たちから隠すためのパフォーマンスだ。

決定権など始めからないに等しい。

重体者は優先して荷馬車に乗せた。

遺体は火葬して、骨のみを持って帰る。

始末できるものはすべて処分して、馬車は行きよりもずいぶん軽くはなったが、彼らの心は重く沈んだままだった。

最終的な死者は八人。

重傷者が三人。内、一人が意識不明。

傷を負っていないものは居ない。

あまりにも犠牲が多すぎた。

みんな重く沈んだ面持ちで、列をなして進む姿は、葬式を連想させた。

一ヶ月ぶりの村は、全く変わっていなかった。

先に手紙をくくりつけた鳥を飛ばしていたので、村に帰ったときは大勢の人々が出迎えに出てきていた。

家族で肩を抱き合い、無事を喜ぶ者。

恋人同士で熱い抱擁を交わしあう者。

遺骨の入った壺を抱き、悲しみに暮れる者。

歓声を上げる者。

むせび泣く者。

皆反応はそれぞれであるが、共通することは、涙を流さない者は

いないということだ。

辺りは嗚咽の大合唱である。

「アーロッド様!!」

ルーチェもロッドの姿を見るなり、駆け寄ってきていきなり彼の首に抱きついた。

ロッドもロッドで、ためらいもなくルーチェの腰に手を回す。

二人はそのまま熱いキスをかましてくれた。

見てはいけないものを見てしまったような気分がして、指先で頬を掻きながら視線をそらす。

しかし、あちこちで似たようなラブシーンが展開されているのだ。

(目のやり場に困るな、こりゃ)

ユキは、大柄な母親の立派な胸に押しつぶされていた。

怪我人であるが、それ以前に窒息死しそうになっている。

イレイオだけが、手持ちぶさたな風にあちこちをキョロキョロと見回していたが、手鎖につながれていることをのぞけばそれなりに楽しそうだ。

(あ、何かデジャヴ)

確かセタ村に来たばかりの時も、今のように鵜一人が孤立していた。

「キオラさん!」

一人感傷に浸っていると、突然名前を呼ばれて振り向いた。
鵜の身長は日本女性の平均よりやや高いぐらいであったが、ルー

チエは鵜よりも背が高い。

気がついたときには彼女の腕の中だ。

「おかえりなさい。キオラさん」

最後の方は完全に涙声だ。

長い金の睫毛は雫で濡れ、潤んだ瞳が鵜を映す。

赤く染まった頬がまた悩ましげで、涙で化粧が崩れても、その美しさはさらに増すばかり。

美人の泣き顔は国宝に匹敵する。

率直に「おかえり」と言われて、鵜は気恥ずかしさにうつむいた。元の世界では「おかえり」はおろか、「いつてらっしゃい」すら言われたことはない。

いつも母親の瞳は、鵜を風景の一部として捕らえていた。

ルーチエたちは「ありがとう」や「いつてらっしゃい」などのお礼や挨拶を欠かさない。

《この世界神界》に來たばかりの頃、そうした習慣のなかった鵜は、そんな彼らに激しく違和感を抱いた。

今でもお礼や挨拶をされるたびに、なんとなく背中がむずがゆくなる。

「本当に、無事で良かった」

実はあんまり無事ではないのだが、それを知ったら彼女はまた泣くだろうと思われるので、あえてなにも語らずにおく。

心配されるのも悪くない、と最近思うようになった。

以前は、心配されるのが鬱陶しくて腹立たしくてならなかった。今から思えば、精一杯虚勢を張ってひがんでいただけなのだが、当時はそれでいいだったのだ。

面はゆいのは変わらないが、以前よりも幾分か素直に受け止めら

れるようになった。

ところが「ただいま」と言おうとして、鵜はハタと気がついた。

（声が出ないなんて知られたら、絶対泣かれる。さらに泣かれる）

それは勘弁願いたい。

しかし何も言わない訳にも行かないので、どうしたものかと悩んでいると、鵜が何か言うよりも先にルーチェが異変に気づいた。

一旦離れて、鵜の顔をのぞき込む。

「キオラさん、どうかなさったのですか？」

目が見開かれ、眉尻が下がり、驚きと心配が半々といったところだ。

頼むから泣かないでくれることを願う。

「いろいろあってな。キオラは今、声が出ない状態なんだ。たぶん一時的なものだとは思うんだが……」

ロッドが言葉を切ったのは、ルーチェの瞳に再び大量の涙があふれたからだ。

あつという間に強く抱きしめられてしまった。

「そんな、なんてこと……かわいそうに」

正直痛いし苦しい。

ルーチェってこんなに力が強かったっけ？

ぽろぽろ涙を流してなく彼女を見て、もらい泣きをしそうになって慌てて上を向く男の姿を視界の端で捕らえた。おい！

ギブアップの意味も兼ねて、彼女の背中を慰めるように優しくた

たいてやると、漸く少し落ち着いたようで、やっと鵜を解放してくれた。

小さく鼻をすすめる様が可憐なお嬢様を連想させる。

そう言えばルーチェって、お金持ちのご令嬢だったっけ。

「声は出ないけど、話せない訳じゃないよ」

松葉杖の音とともにやってきたのはユキだ。

漸く母親に放してもらえたようだが、へろへろになっている。

「たぶん《言語理解能力^{言語理解能力}》の影響だと思うんだけど、声が出ているのと同じように会話することが出来るんだよ。な、キオラ？」

「な？」と言われても、唯一通じたユキは《能力者》なので、《能力者》でなければ通じないかもしれない。

そう地面に記すと、ユキは首を振った。

「大丈夫だよ。マキもキオラの声を聞いたって言ってたから」

マキって誰だ？ と聞きかけて、ユキの従兄に思い当たった。

そう言えば、頭で考えていたことに聞き返されたな。

彼は《能力者》ではない。

しかし、まだ不安は消えない。

通じなかったらどうしようとか、もしかしたら二度と声が出ないんじゃない、などと思考がマイナス方向に向かってしまう。

「どういう原理なんだ？ 《言語理解能力^{言語理解能力}》は異言語を翻訳する能力だろ？」

「実際にしゃべっているように振る舞うんだ。たぶん、口パクが

異言語と見なされてるんじゃないかなって、俺は思うんだけど」

「……そんな無茶苦茶な」

涙声のルーチェが、困惑したように頬に手を添える。

「とにかく、やってみれば良いんだよ。大丈夫。二回同じことが起こったんだから、三回目もあるって」

励まされた。

二度あることは三度ある、と言う訳だ。

鵜は小さく息を吐く。

それから再び息を吸い込んで。

『ただいま!』

ロッドが驚いたように目を見開いて、ルーチェが花の咲くように微笑み、「おかえりなさい」と言ってくれた。

S e c t . 2 5 帰還と悲しみ、喜び（後書き）

ルーチェとロッドは相変わらず仲が良いですね。

ユキは末っ子なんですよ。

お母さんは旦那ほっばらかして、ユキにべったりです。

そう言えば、何かもう一人キャラの名前が出てきましたね。

たしか『マキ』とかなんとか……

限りなくガヤに近いモブなので、これから出番は全くありません
（笑）

「いったい、なにがあったのですか？」

エイルナー家のリビング兼ダイニングで、ルーチェが鵜とロッドを前に、事の次第を訪ねていた。

悪いことはしていないのに、尋問されている気分になる。

二人はしばしの沈黙の後、顔を見合わせた。

鵜はこの話をしたくない。

ロッドは鵜が居ると言いにくい。

ということ、鵜は自室に戻ることになった。

エイルナー夫妻と鵜の住むこの家は、言ってしまうと2LDKである。

リビングとダイニングは兼用となっていて、収納は屋根裏と、外付けの倉庫がある。

二つある部屋の内、一方は夫婦の寝室で、もう一方を客間として使われていたのを、今は鵜の自室に当てられている。

鵜の部屋はベッドと小さなテーブル以外、大きな家具はなににもない。

備え付けのクローゼットの中にも、必要最低限の衣類しか入っていない。

かろうじて壁にタペストリーが掛かっているが、これも複雑なばかりで何が描いているのかも分からない、地味な意匠のものだった。質素の一言に限る。

ルーチェは女の子なのだからと、服も含めて華やかなものを揃えたがるが、鵜が断固拒否しているのだ。

押し問答の末に、時々花を飾ることがあるぐらいである。

化粧品は……いらないうつたのだが無理矢理押しつけられたものが、引き出しの奥に眠っている。

きれいな顔を毎日見慣れているせいか、今更下手なメイクをしたところで、彼らには絶対かなわないと思う。

せいぜいが化粧水を塗るくらいだ。

不思議なことに、こちらに来てからあれほど嫌だったスッピンも、さして気にならなくなった。

肌荒れや髪が傷むこともほとんどない。

気候や生活習慣の問題かもしれないが、それにしても一切の手入れを必要としないのは、非常に楽で良い。

流石に今回の遠征で多少荒れたが、主にストレスが原因だと思われる。

気丈に振る舞ってはいるが、あの夜のことは未だ夢に見る。

男性と普通に話す分には良いが、触られることには非情に抵抗を感じる。

声が出ないことに対する不安もある。

薬でどうこうなるものではないので、こればかりは時間が解決してくれるのを待つしかない。

ベッドに寝転がってため息をついた。

そう言えば、この家に来て始めて見たのはこの天井の梁だった。

一年も経ったんだなあと、なにやら感慨深い気分になる。

毎日が充実しているので、何年もここにいたような気がした。

（あたしはこれからどうなるんだろう？）

将来を考えてもう一度深いため息をついたときだった。

「キオラさん、服を脱いで下さい！」

ルーチェが医療袍を片手に、ドアを蹴破らん勢いで入ってきた。

突然のことに鵜がぽかんとしている間にも、彼女は手際よく鞆から器具を出してテーブルに並べてゆく。

「さあ、早く。服を脱いで。傷を見せて下さい！」

秀麗な柳眉がつり上がり、語気も荒い。

これは間違いなく怒っている。

（ロッドのヤツ、何しやべったんだよ！）

傷のことを知っているということは、鵜の傷の手当てをしてくれたのは彼なのだろう。

実は、胴の傷はまだ完全に治りきっていない。

塞がりかけたと思っても、鵜が元氣よく動き回るので、またすぐに開いてしまうのだ。

場所が場所だけに、固定もしにくい。

治っているところもあるが、微妙に盛り上がった肉芽が生々しい。仕舞いには、傷口がぱっくり開いたまま薄皮が張ってくる始末で、治っても痕が残るのは確実だった。

ともあれ、鵜は今、無理矢理服を脱がせようとするルーチェから身を守るので必死であった。

儚げな印象の彼女だったが、なんのその。

腹も肝もしっかりと据わっている。

あれよあれよという間に、上半身ををはだけさせられた。

鵜の引き攣れた傷を見て、ルーチェは表情の一切を消す。

しばしの間無言だったが、急に立ち上がって部屋を出て行った。

これ幸いと鵜は服を着出すが、すぐに戻ってきた彼女の手には鈍い輝きを放つものが。

鵜はそれを見て心底驚いた。

『縫うのか?!』

「ええ。一番手っ取り早い方法です」

『いいって。そんなことしなくても、ほっときや治るから!!』

その一言が彼女の逆鱗に触ったらしい。

「口答えしない! 放っておいた結果がそれでしよう! それ以上悪化して、傷口が壊死でもしたらどうするんです!」

鵜は思わず首をすくめた。
本気で怒った彼女は怖い。

「化膿していないのが不思議なくらいです。どうせキオラさんは少しもじっとしていないのですから、縫ってしっかり傷口を固定しておくのが一番確実なんです!」

『たいした傷じゃないから……』

「そのたいしたことのない傷を、たいした傷にしたのはどこの誰です! ごちゃごちゃ言ってるで、さっさとベッドに横になって下さい!」

どうしよう。針が凶器に見えてきた。

彼女の後ろで、鬼が牙をむいているのが見えるようだ。

『こんな傷、すぐに……』

「治りません!」

ルーチェの剣幕に、鵜は閉口する。

鵜の傷は、浅いが長いのが難点だった。

傷の周囲は赤く腫れ、再生仕掛けた皮膚が痛々しい。

麻酔のために、数カ所に渡って注射をする。

局所麻酔なので、意識ははっきりしている。

ルーチェが小型のメスを取り出したのを見て、鵜はギョツとして声を上げた。

『縫うだけじゃなかったのかよ!』

「傷口がボロボロなので、いびつな部分を切除します」

『そこまでするのか!』

「自業自得です」

『そんな!』

嘆いている場合ではない。

麻酔のおかげで感覚はないが、側に置かれているトレーに、切り落とされた肉片が並べられていくのは、流石に直視できなかった。

手術が終わるのに、三十分とかからなかった。

胴にはきちんと包帯を巻かれ、鵜はルーチェに数日間の外出禁止を言い渡された。

鵜はぐったりと疲れ切っていた。

これは絶対、人生の恐怖体験ベスト10に入る。

鵜はベッドに座り、ルーチェが器具を片付けて居ると、ドアが小さくノックされて、ロッドが控えめに顔を見せた。

「終わったか？」

「ええ。先ほど」

ルーチェはニコリともせずに行った。

ロッドはベッドの側に寄つてくると、椅子を引き寄せて背もたれを前にして座った。

「お疲れ」

『……余計なこと言うなよ、ロッド』

「お前の様子から言って、まだ傷は治ってないんだろうなと思ってな。間違ってたかったろ？」

にやりと笑うロッドを見て、鵜は無性に、目の前にあるきれいな顔を張り倒してやりたくなった。

「治っていないどころか、炎症を起こして悪化していましたよ」

ルーチェの冷たい声が突き刺さる。

「どうせろくに消毒もせずにしたのでしょうか？　傷そのものは深くありませんが、傷跡は一生消えませんよ」

「……だってよ」

ルーチェの声を背に、ロッドが無責任にも言い放つ。

『だってよ、じゃねえし』

ツグミはすっかりやさぐれモードだ。

「いいですね、一週間は外出禁止です。それから、少なくとも今日と明日は、部屋で大人しくしててください」

『一週間！ さっきは五日って言ってたじゃねえか。なんで増えてんだよ！ しかも部屋にいろって、ほぼ軟禁じゃねえか！』

とたんにルーチェにキツと睨まれる。

「麻醉が切れても知りませんよ」

声に抑揚がない。

視線でロッドに助けを求めるが、彼は諦めろと言わんばかりの表情だ。

「アーロッド様、貴方もです。一週間とまでは言いませんが、キオラさんのためにも、数日間はできるだけ外出を控えてくださいね？」

「おいおい、なんで俺まで」

「貴方が出入りしていると、キオラさんも外に出たくなるでしょう？ お目付役も兼ねて、家にいてください」

「俺は仕事の後始末があるんだ。家に籠ってるわけにはいかねえ

よ
」

「その時はどうぞ、お出かけになっただいて結構です。ただ、可能な限り出歩くのは遠慮してくださいといっているだけです。なんなら、お義兄様がたに家に来ていただいても構いませんよ?」

ロッドは、とんだとばかりに恨めし気に鵜を見るが、鵜はザマーみろと舌を出してやった。

Sect. 26 エイルナー家の受難（後書き）

以外と腕っ節もありましたね、ルーチエ。

お医者様を敵に回してはいけません。それが奥さまならなおのこと。

とぼっちりを受けたロッドはお気の毒さまです。

そもそも傷を放置しておいた鵜が悪いんですよ。

ばい菌が入ったら大変ですからね。

秋祭りは、いわゆる収穫祭だ。

毎年、その年に採れた作物などを祭壇に捧げ、翌年の豊作を願う。年に一回の、年末年始に並ぶ大行事だ。

去年は熱を出して意識不明だった間に終わってしまったため、鵜は今年初めて参加する。

元の世界では祭りなんて、近所のちゃんい花火大会か地藏盆ぐらいだった。

それも子供の数が減ったとかで、鵜が小学校の低学年のころになくなってしまったので、鵜にとっては実に久しぶりの祭りである。

鵜はルーチェに謹慎を喰らっていたが、一週間がたつや否や、家を飛び出して積極的に準備に参加していった。

なぜか仕事から帰ってきてから、村人たちが以前より親しげに接してくれるようになり、実はそれも鵜は嬉しかったりする。

イレイオの処分は、鵜が自宅に籠っていた間に既に決まっていた。監視などを含めた一定の行動制限と、村のはずれに小さな小屋を与えられ、そこに住むことを許されたそうである。

彼は祭りの準備にも関わっていた。

反対する者もいたそうだが、村長が特別に許可を出したらしい。

たまには新しいものを取り入れるのも悪くないだろう、とのことだった。

風の噂では、祭りの余興である夜の演目で、ロッドと組んで剣舞を踊るらしい。

それを聞いて目を輝かせたのは、ルーチェである。

「お二人が舞われるというのですから、きっと軍隊式の剣技演舞でしょうね。一度見たことがあります、それはすばらしいもので

した」

なんでも、何通りもある剣の型を表したものが元になっているらしく、本来なら十数人で舞うのが正式らしい。

「伴奏に合わせて剣舞を舞ながら、即席で模擬戦を行うのです。とても複雑な上に危険なので、よほど熟練した剣士でないと、大怪我をしてしまう恐れがあるのですよ。選りすぐりの精鋭の戦士が、微妙なバランスをとりながら舞う様子は、胸に迫るものがあります」

ルーチェがここまで言うからには、よほどのものなのだろう。

祭りと言うだけあって、村全体が浮き足だった雰囲気をもとっている。

あちこちで夜の演目のための練習が始まっており、楽器をかき鳴らす者、歌や踊りの練習をする者など様々で、聞いているだけで今にも体が動き出しそうだ。

村の中央にある広場が、祭りの舞台となる。

祭壇が設置され、広場の中心には出し物のための舞台が設けられた。

この舞台の上で、歌い、踊り、今年の収穫を感謝し、来年の豊作を願うのだ。

祭壇の骨組みを設営するおは男たちの仕事だが、飾り付けはセタ村出身の年配の女たちによって行われる。

小さな村では血が濃くなることを恐れ、村の中での婚姻は行われない。

セタ村も例外ではなく、女たちは大抵年頃になると、村の外へと嫁いでいく。

年をとっても生まれた村に残っているということは、他村へ嫁ぐことが出来なかったと言うことである。

とはいえ、嫁ぐ村は大抵決まっているそうで、周囲の二、三の村

々はほとんどが親戚同士らしい。

変な言い方だが、祭事の際の村の暗黙の掟に【祭壇を飾るのは年を経た処女であるべし】とある。

祭壇とはつまり神への捧げ物を祀る場所であるので、神に仕えるのは清い者でなくてはならないと、そう言うことらしい。

なら若い娘でも良いのではないかと思われるが、そこはそれ、若いとこれから嫁ぐかもしれないので、早々と神にその身を捧げる必要はないということだ。

なので祭壇を飾る女たち（飾女かざりめと呼ばれる）は、婚期を逃した処女に限られるのだ。

祭を取り仕切る ” 祭衆 ” と言う集団があり、飾女かざりめはその内の女性集団を言う。

鷗は男たちの建てた木組みの祭壇が、女たちの手で色とりどりの布や花や供物などで飾り付けられていくのを、遠目に眺めていた。そこで気がついたことがある。

『なあ、なんで祭壇をまっすぐ建てねえんだ？』

祭壇は、台形の形をした広場の正面とは少しずれた向きに建てられていた。

元々正面は北西に向けて建てられているのだが、それよりも若干西にずれている。

激しく違和感があって気持ち悪い。

「大地を司る東の神皇様がいらっしゃる四黒神嶺が、あの方向にあるからさ」

近くにいたグリーが教えてくれた。

「昔は四人の神皇様方は、それぞれの地方の神殿にいらっしゃる

たんだが、第二次政戦が終わってからは、全員が中央の山にお集まりになって暮らしておられるんだ。広場は第二次政戦以前に合わせで作ってあるから、どうしても正面がずれるんだよな」

いっそのこの際作り直すか、と彼はぼやいた。

祭りまであと二日。

日も暮れかけて、あちこちで明かりのための篝火が焚かれ始めている。

村は、闇が混じり始めた夕焼けと松明の明かりで、幻想的な雰囲気醸し出していた。

* * *

夕暮れも近いので、秋祭りの演目に出す剣舞の練習を終え、イレイオとロッドは、水で濡らした布で汗をぬぐっていた。

「村長に口を聞いて下さって、ありがとうございます」

「別に。俺は切っ掛けを作っただけだ。後はお前が口八丁でみんなを丸め込んだんだろうが」

ロッドは振り向かずには答える。

「ソレでも、少将殿のおかげで随分助かりましたヨ。やっぱり協力が居るのと居ないのでは全然違いますからね」

イレイオは笑うが、ロッドは眉根にしわを寄せた。

元部下の笑顔が信用ならないことは、在軍時代からよく知ってい

る。

「お前らのシゴトはどうも気に入わねえ」

「そいつアどうも。汚いのだけが取り柄でしてネ」

ロッドが、体を拭く手を止めてイレイオを見た。

「そう言やあ、俺が軍を辞めてから昇進したんだったか？」

「ちびーっと給料が増えたくらいっスよ。少将殿がウチに入って下さってたら、もっともらえたンすけどネ」

ロッドは笑う。

良い意味ではない。口端をつり上げた、あざけりの笑いだ。

「残念だったな」

「全くっスよ。査定の時点でウチに入るための必要事項、全部クリアしてる人間なんざア、そういないンすからネ？ その点、少将殿は貴重な人材だったンすよ？ それなのに、せっかくスカウトしたってのに、見事にフツてくれるンすカラ。後でオレがドンだけ長官にイヤミ言われたか」

「そいつは悪かった。だが、一度《墮天使たちの庭》^{ヘルズ・ゲート}に入ってしまったら、二度と出ることはできないと聞く。そんなのはゴメンだ」

イレイオは後ろ頭を掻いた。

「そりゃア、ウチは終身雇用が基本っスから。色々バイ情報握

ってるから除隊は許されませんし、殉職するしか自由になる方法はありませんがネ。殉職するにしても、ロクな死に方出来ないでしょウシ。でも正直なハナシ、マジで人手不足なんですってば。部隊長が最前線に出てるなんて、本来ならあり得ないことっスからネ？」

わざとらしく溜息をつく。

「じゃあ聞くが、今回の任務は故意に、か？」

「まア、半分は。まさか嬢ちゃんの方から出向いてくれるたア、思いませんでしたかネ。ドシユアの件に関して役所が頭を抱えていたのは事実ですし、傭兵隊は実にいい陽動になりマシタ。役人たちもうまく立ち回ってくれましたヨ」

イレイオは悪びれもせずと言う。

二人は、練習に使っていた剣を片付け始めた。

素人ではない二人は、練習にも木刀ではなく真剣を使う。

「キオラのこと、上に報告するのか？」

「それが仕事っスから」

「どうして役所はあいつを探してるんだ。探してどうする？」

ロッドは語気を強めたが、イレイオは飄々と受け流すだけだ。

「知りませんよ。オレたちはただ、《旅人》^{ストレイア}の女を探せって命じられただけっスからネ。探して報告して、それからどうするのかなんてなア、オレたち下っ端は知らなくていいことっス」

パチン、と音を立てて、きれいに磨かれた剣が鞘に収まる。

「キオラに手を出してみろ。ただじゃおかないからな」

凄むロッドに、イレイオは肩をすくめた。

「ずいぶんあの子の肩を持つンすね。非情な『カウサーレの知将』と恐れられた、貴方らしくもない」

「あいつは俺たちにとって、娘のようなものだからな」

鞘に収めた剣で地面を突き、遠くを見つめて言う。

「奥方は確かスホルト人でしたよね。異人種同士の混血は難しいなんて、酷い話っスよねェ」

ロッドは手のひらを見た。

土いじりに荒れた、剣ダコの並んだ手だ。

「あいつは、ルーチェは、俺よりも早くに年をとって死んでいく。それでも、俺は最後まであいつと一緒にいるって決めたんだ」

イレイオは薄く笑う。

「それも ” 愛 ” ってヤツですかイ？」

「ほざけ。お前が言うとか散臭いんだよ」

ロッドは吐き捨てるように言った。

Sect. 27

剣を手にして愛を語る（後書き）

あつれゝ、おつかしくなく？

イレイオってば、何か裏の顔っぽいもんがあるし……

せっかく裏表のない、素直なキャラにしようと思ったのに。

何だよ『ヘルズ・ゲート墮天使たちの庭』って。

意味と訳があってないじゃん！

タイトルほど内容が立派でないってのは、いつものことです。
だいたい、愛を語ってるのは最後の部分だけだし……

祭りは昼過ぎ、太陽が真南を少し過ぎた頃に始められた。

例年と違い、今年の秋祭りは少し特殊で、まずは先日しゅうとの任務で殉死した仲間たちの追悼式から始まった。

まずは村長が殉職者たちの名簿を読み上げ、続いて村人たちの前で長々と弔辞を述べ、数分間の黙禱を促す。

葬式は既に各家が出しているので、これはほんの儀礼の一部ではない。

飲んで騒ぐだけが祭りではない。

むしろ、そちらの方は余興でしかない。

祭りの本来の目的は、神を祀ることだ。

村長とグリーが祭壇に向かって座り、祭壇の前では、神官の役割も兼ねる祭衆の長が、日本の神道で言う祝詞を読み上げていた。

皆肅々としてそれを聞いている。

やがて、祭長まつりおさが読み上げる文句に合わせて、祭壇前の舞台では神に捧げる鈴の舞が始まった。

さらさらとなる鈴の音と共に、伴奏となる謡いも開始される。

いつの間にか、祭長まつりおさの声が止んでいた。

それでも舞は止まず、それどころか、伴奏に笛や太鼓も加わって、ますます盛り上がりを見せている。

エクスタシーというかトランス状態というか、そこら辺の区別は付かないが、明らかに正常な状態ではない。

セタ村のある東方第十五区・メタルシアは、東方の中でも南方との国境に位置している。

そのせいで、南方文化の影響が強い。

手を叩き、足を踏みならして打楽器を中心とした伴奏で踊るのは、南方のやり方だ。

これが北方になると、バイオリンやフルートに似た楽器を使った、いわゆるケルト音楽のようなものとなる。

文化が元の世界と同じ配置で存在しているというのは、ほととすの半面、とても面白いと思う。

東は相変わらず自然重視の考え方だし、西は水の確保が大変だと聞く。

元の世界のそれぞれお国事情には詳しくなくても、それぐらいはわかる。

秋の爽やかさではなく、夏のむっとした熱気がまだずいぶん残っていた。

老若男女を問わない独特の歌と踊りが、興奮をさらに拡大させる。フォークダンスとはまた違う、足踏みと手拍子だけで、よくもここまで盛り上がるものだ。

彼らの表情は恍惚としていた。

彼らの中に眠る原始的な感覚が、祭りという形を借りて、弾けんばかりに充ち満ちている。

しかし鵜はそんな中、急激に自分の気持ち冷めていくことに気がついた。

途中までは、この高ぶっていく感情を惜しむことなく発散していたのだが、急に興が覚めた。

何がきっかけなのか。

おそらく、伴奏に弦楽器が入りだしたところだ。

何かが違う。

そんな不安に襲われた。

夢心地だったのが、突然覚醒させられた。

そんな感覚だった。

周囲を見渡すと、相変わらず村人たちは何かに取りつかれたように手を打ち鳴らし、足踏みをして歌っている。

その時の鵜の表情は、明らかに困惑したものだったのだろう。

気がつくと、ルーチェが隣に立っていた。

目が合うと、にっこりと微笑んで袖をひかれる。

輪の外へ出ましよう、と言っているのだ。

拒否するはずもなかった。

導かれるままに輪を外れ、広場の外に立つ。

そこで改めて祭りの集団を眺め、その異様さに思わず身震いをした。

「こいつアまた、凄まじいなア」

腰に手を当て、額に手をかざしながら呟いたのはイレイオである。鵜の隣でルーチェも苦笑していた。

「この村に小さいときから住んでいないと、ちょっと入っていませんね」

考えてみれば、鵜もルーチェもイレイオも、セタ村どころかメタルシアの生まれですらない。

「うゝん、強烈。ここいらの祭が珍しい形をしてるってエのは聞いてたケド、まさかここまでたアな」

『これって珍しいのか？』

「珍しい珍しい。祈りから舞に発展していくのはまアよくあるから良いとして、普通そのままトーナにまで持ってくかねエ。見ろヨ。まつりおさ祭長なんてエ、意識飛んじまってるじゃねエか」

確かに彼は、白目をむいて口からは泡を吹いている。

しかし、それでもやめようとしなない。

流石に村長などはまだ意識を保っているようだったが、それでも

目は血走って鬼のような形相になっている。

『トーナって？』

「あゝ、なんて言ったらいいのかねエ。神に捧げる呪術的舞踊の一種なんだが……祈って神に対する信仰の念を証明する……違うな。幸せになりたいから、《神皇》サマに祈ってかなえてもらう。これだな。それをオレたちは ” トーナ ” って呼んでるんだが……奥方、セタ村^{ここ}じゃア何て言うんデス？」

最後の問いはルーチェに向けられたものだ。

「さあ。私が生まれたところでは ” ササリナ ” と呼んでいましたが、ここでの呼び方は知りません」

『地域によって呼び方が違うのか？』

「へたをすると、村ごとによっても違いますよ」

祈ることによって願いを叶えてもらう。

しかも歌と踊り付き。

似たようなものが、日本にもあった気がする。

『踊り念仏みたいなモンか？』

「……の一種だ」

イレイオは少し考えてから答えた。

テレパシーじみた話し方をするようになってから、以前よりも会話が楽になったような気がする。

使い物にならなくなった発声機能を補うためか、《能力》に目覚めた当初よりも《言語理解能力》が発達しているらしく、言葉に含まれた意味を何となく読み取れるようになった。

それは相手も同じらしく、日本にしかないはずの概念が、説明せずに通じることもある。

翻訳されると、時々カタカナの中に日本語が混ざったりして微妙な単語ができあがったりするのが難だが、それ以外では不自由はしていない。

「形式も地域によって違うぜ。ここのはやっぱり、南の色が濃いな。トーナも似たようなモンだけど、弦楽器は使わねェんだ」

「ササリナは逆に打楽器を使いませんよ」

「それもまた、また珍しいっスね」

「北方に近かったので、そちらの影響がかなりありましたから」

にこやかに交わされる会話について行けない。

「実際はどうであれ、神は絶対的な力を持っていて、祈れば願いを叶えてくれるってエ考えがどっかにあんだよナ。都会なんかに行くとそうでもないんだが、ここみたいな田舎では未だに根強く残ってたりスるぜ」

『《神族》も《神皇》も、同じ”神”じゃねえのかよ』

今の話を聞いていると、《神皇》だけが神であるように聞こえる。

「《神族》といっても、本質は《地上の民》とそう変わりはありません」

ませんから。格が違います」

『じゃあ、《神皇》だけが神ってことなのか？』

「神をどう定義するかに寄りますが、全てにおける創造主、という意味ではそうです。特殊な能力などを上げる学者もありますが、それは《能力者》も同じですからね。具体的な違いを示せと言われて、実際に示せるものはないと思います」

「そもそも、《神皇》サマが人前に一切姿を表さないんじやア、比べようがないわナ。ただ唯一分かってるコトと言え、オレら《神族》と同じ姿をしてるッてエコトだけサ」

そこら辺の概念は、現世にいた頃とあまり違いはない。

”神は己に似せて人を造った”とはキリスト教の旧約聖書の記載であるが、《神皇》が《神族》を造ったとするのなら、ルーチェの言う『全てにおける創造主』というのにも当てはまる。

「祈りと鈴の舞は純粹に神を讃えるためのものですが、ササリナは私たちのエゴで行うのですから、この二つは別物として扱うのが普通なのですが……」

『この村ではなぜか一緒くたになってる、と』

「何でそうなったのか、調べてみるのも面白いかもしれませんがね」

祭りは今、最高の盛り上がりを見せている。

勢いがあるのは結構だが、年寄りなどが、血圧が上がりすぎて倒れたりする者は居ないのだろうか。

この騒ぎに混ざれない鶴は、早く終わってくれないかななどと思

う。

二人の話を総合して考えると、この踊りは最高潮から突然終わるものらしい。

ということは、もうじきに終わりを迎えると言うことだ。

夜と言うにはまだ早い、日は西の山にかかろうとしている。

鵜が楽しみにしている夜の演目は、この後に行われる。

日も暮れかかって辺りは夜の香りを放ち始め、篝火の不安定な光が、それを際立たせている。

赤々と燃える火は彼らの気分を高揚させ、掛け合いの言が飛び交い、楽器の音が響きわたる。

その時、円の一部がわずかにざわめいた。

見ると、老人が一人、胸を押さえてうずくまっている。

しかし、ざわめいたのはほんの一瞬だ。

すぐに皆、踊りに夢中になってしまう。

鵜は駆け出そうとした。

老人を円から引き出そうとしたのである。

しかし、イレイオがとっさに腕を出してそれを遮った。

『おい、なんだよ。この腕は！』

「手を出すんじゃないよ。今が一番大事な時だ」

そう言われても、老人は地面に倒れこんだきりピクリとも動かない。

あわてて周囲を見渡すと、老人を助けてくれそうな人どころか、あちこちで気を失って倒れている者がいる。

『なんでみんな止めねえんだよ。人が倒れてんのに！　なんで誰も助けねえんだよ！』

するとルーチェが鵜の肩に手を置いて、静かに首を振った。

「無駄ですよ。どうせ助けたところで、彼らはもう死んでいます。キオラさん。これは祭りなのですよ」

意味がわからない。

祭りだから、なぜ彼らを助けてはならないのか。

「なんでもアリなのさ。祭りだからナ。」神がそれを望んでる”
って考えちゃうんだよ、ここの連中は。神が望むんなら命だって
捧げる。奴らは自然発生的な生け贄だ。ましてやここは ” 《盗族
》の村” だからな。この村じゃア他の村より神は身近な存在なん
ダ。奴らにとって神は絶対なんだヨ」

イレイオに続き、ルーチェも含み聞かせるように言う。

「キオラさん。これはあくまで特殊な例です。ほかの村もこうだ
とは限りません。ここが少し特別な風習を持った村だというだけな
んです」

だからと言って納得できるものではない。
怒りで握ったこぶしがわなないている。

『《盗族》だからなんだってんだよ。人が死んでるのに、なんで
みんな知らんぷりできるんだよ!』

ルーチェとイレイオが困ったように顔を見合わせた。

「嬢ちゃん。許せねエのは分かるが、踊りが終わっても、何でも
なかったふりしとけよ。それが彼らに対する礼儀ってモンだ」

冷静に言うイレイオの顔をぶん殴ってやりたい衝動を、鵜は必死にこらえなければならなかった。

S e c t. 28 祀り、祭り、奉り（後書き）

読後感想は散々でしょうね……

後味の悪い話です。

言い訳させて下さい！

祭りって、楽しいばかりが祭りじゃ無いと思うのです！

……言い訳終了（x x）

続きます。

ひととき大きな太鼓の音が鳴り響いた。

村人たちの動きが一斉にとまる。

どうやら終わったらしい。

この時点で、地面に倒れているものは六人ほど。

彼らは、近くで倒れている者を介抱し始めた。

これで彼らは助かるはずだ。

鵜はほっとする。

ロッドがやってきた。

汗だくで、肩で息をしている。

「二人だな」

ややあって眩いた。

ルーチェが痛ましそうな顔をする。

六人のうち、二人は助からない、という意味だろう。

鵜と目が合うと、複雑そうな顔をした。

「ビックリしただろ。大丈夫か？」

『なんでそんなに平然としてられるんだよ。人が死んでるってのに』

ロッドはルーチェに手渡された布で、汗を拭っている。

「この村を出て軍に仕官する前までは、この光景が当たり前だと思ってた。今はこれが普通だとは思ってねえよ。おまえの気持はよ

くわかる」

わかる訳がない、と思った。

ロッドはこの風習を当然のようにして育ったのだ。

鵜はくると背を向けると、森に向かって歩き出した。

ルーチェが呼び止めようとするが、ロッドに静止される。

鵜は怒っているわけでもなかったが、悲しいわけでもなかった。

頭の中でいろいろなことがぐちゃぐちゃになって、整理できない。

できるだけ何も考えず、無心で足を進める。

気が付いたら、いつもロッドとユキが剣の修業をしている場所に
来ていた。

村の外れで、森にも近いその場所で、鵜は森に向かって地面に座り
込んだ。

風に乗ってかすかに広場の喧騒が聞こえてきた。

イレイオの言った ” 自然発生的な生贄 ” は、毎年どれほど出
るのだろうか。

人が死んでいるのに、どうして平気でいられるのだろう。

確かに、元いた世界に比べれば、この世界は身近に ” 死 ” が
存在する。

人だけでなく、家畜も死ぬ。

コンクリートジャングルと揶揄される都市部で暮らしていて、 ”

死 ” というものを一種の仮想物のように感じていた。

テレビやネット —— メディアを通して報じられるものか、物

語の中でしか見たことがなかった。

” 死 ” というものは教育上良くないものとされ、死からは完全
に隔離された空間で生きてきた。

それが当たり前だと思っていた。

しかし《神界》^{こちら}では、当たり前のように ” 死 ” が存在する。

非日常的なことであるのは元の世界と変わらないが、少なくとも
こっちの人々は ” 死 ” というものがどういもののかをよく

知っている。

”死”の概念の違いが、鵜がこちらに來た時からの一番のカルチャーショックだった。

今回がいい例である。

生贄だなんて言語道斷だと鵜は思う。

ましてや捧げるのは人間の命だ。

彼らにとっては当然のことが、鵜にとっては当然ではない。

イレイオは知らないふりをしろと言ったが、感情がそれを許さない。

膝を抱え込んでぼんやりしていると、背後から人の近づいてくる気配がした。

気配で相手がだれかを知る。

ユキだ。

《能力者》であるせいか、彼の気配はとても読みやすい。

「どうしたの、そろそろ余興が始まるよ？　キオラ、楽しみにしてただろ？」

本気で心配しているような口ぶり。

生け贄のことは何とも思っていないのだろう。

『人が死んで、何で平然としてられんだよ』

「キオラ？」

今は彼の無垢な声が腹立たしい。

『可笑しいだろ、絶対。人の命を何だと思ってるんだ。何で神に殺されなきゃなんねえんだよ』

鵜の言葉に、ユキは驚いたようだった。

「……神は人を殺さない。どうしたんだよ、キオラ。何か変だよ？」

『人を守るのが神じゃねえのかよ。何で自分を祀る者たちの命を奪うんだよ！』

後ろでユキが重く息を吐くのが分かった。

おそらく今の彼は、眉間に皺を寄せて難しい顔をしているのだろう。

「ごめん、キオラ。俺にはキオラの言っていることがよく分からない」

そう言い残すと、彼は黙って去っていった。

怒ったのだろうか。

心なしか、気配が荒々しい。

森から漂ってくる夜の香りは鵜の心を癒すどころか、小さなさざ波を立ててわずかに苛立たせる。

抱え込んだ膝に顔を埋めた。

（森なんか大嫌いだ）

唐突にそう思った。

無性に、水の流れる川の水面を見たくなった。

残念ながら鵜の知る限り、村の近くにそんな川はない。

森の中にある小さな川は、ある決まった季節にしか出現しない。

生活用水は全て井戸水で補っている。

泣きたい気分なのに涙は出ず、鵜はただただスカートを握りしめ

るだけ。

こんな気持ちはこの村に着たとき以来だ。そう言えば、もうあれから一年が経った。

毎日が充実しているおかげで、一年という月日をあまり長く感じない。

どれほどそうしていただろうか。

かすかに下草を踏む音が聞こえた。

しずしずと進む軽やかな足音は、この村で育った者には絶対にまねできない。

ルーチェは歩み寄ってくると、静かに鵜の隣に腰を下ろした。

「少し、落ち着きましたか？」

鵜は黙って頷いた。

うつむく鵜の頭に、そつとたおやかな手が置かれた。

「つらかったでしょう？」

何度か頭を撫でられ、はっと気がつく、ルーチェは鵜の頭を自分の胸に抱き込んでいた。

「キオラさんにとっては残酷なことかもしれませんが、分かっただけです。あげて下さい。彼らはただ、純粹に神に仕えているだけなのです」

漸く涙が流れた。

母親に優しくされた記憶はない。

しかし、今彼女が鵜にしてくれていることは、母親が落ち込む娘にするはずであろうことだと言うことは分かる。

ロッドと言いいルーチェと言いい、どうして二人は鵜をここまで甘やかしてくれるのだろうか。

実の娘ではないのに、どうしてこうも優しいのだろうか。

声が出なくて良かった。

もし声が出ていたら、大声で号泣していたかもしれない。

もし二人に子どもがいたら、彼らはとても良い親になっただろう。

ロナグ人のロッドとスホルト人のルーチェでは、人種の違いから混血は難しいのだという。

ロッドが軍にいて時間が止まっている時は問題なかったが、軍を辞めてしまったことによって、ロッドよりもルーチェの方が先に年をとって死んでしまう。

それでもかまわないと、ルーチェとロッドは共にいる。

鵜は二人に申し訳なく思っていた。

本来なら赤の他人である鵜を、ここまで受け入れてくれた二人には感謝している。

しかし、今回の祭りを筆頭に、鵜にはどうしても許せない風習がこの村には他にも多く存在する。

少し落ち着き、袖でゴシゴシと涙をぬぐっていると、ルーチェはその手を押さえてやめさせた。

「そんなに強くこすっては瞼が腫れてしまいます」

そういつて小さなハンカチを差し出してくれる。

とてもキレイな刺繍がしてあって、使うのがもったいない。

ハンカチを眺めて複雑そうな面持ちをしていると、ルーチェが小さく笑ってパッと立ち上がった。

「さ、そろそろ広場に帰りましょうか。ちょうど剣舞が始まる頃です。せっかくのお祭りなのに、こんな所でいじけていてはもったいないですよ」

彼女に軽く腕を引かれ、鵜はやっと立ち上がった。

泣きすぎたからだろうか、頭が痛い。

「ところで、さっきユキが来ませんでしたか？ 余興が始まる頃に、少し様子を見てきてくれるように頼んだのですが」

ルーチェが歩きながら言う。

『ああ、来たぜ。あたしがあんなだったから話がかみ合わなくって、結局怒らしちゃったけど』

「それであんなに不機嫌そうだったのですね」

彼女はクスクスと笑う。

本人には悪いが、怒ったユキはカワイイ。

元が元なので何をしてても可愛いのだが、感情をむき出しにした様子が一番カワイイ。

たとえば、怒らせてみたり、泣かせてみたり。

可愛いからついつい虐めたくなるのだが、それがこの村のお姉様たちは気にくわないらしい。

彼はモテるのだ。

広場に戻ると、ちょうど四人の少女が華麗なダンスを披露しているところだった。

酒を片手に見ているオヤジどもの鼻の下が伸びているのが、遠目に見えても分かる。

ロッドとイレイオは広場の外れに居た。

彼らが着ている衣装は、この日のためにルーチェと鶯が二人で仕立てたものだ。

誰がどこを縫ったのかは、明かりに照らしてみれば一目瞭然である。

「今やってるのが終わったら、俺たちの出番だ」

ロッドが舞台を見ながら言った。

その衣装は数枚重ねで一番上を緑、二枚目を白を基調としていて、一枚目にはあちこちに金糸銀糸が散りばめられ、二枚目はワンピーストとして袖口を赤い布で継ぎ足してある。

袖はいつもより広く大きく、片方の袖をぬいてしまうことによつて、二枚目の衣装が露わとなる。木製の面を懐に入れておき、わずかに見えるようにする。

下は、足首を絞ってはあがるが、袴としか形容しがたい。

動いたびに互いが打ち合つて鳴るように、様々な装飾品があちこちにぶら下がっている。

顔には舞台用の化粧を施し、頭にも金属製の飾り物を付ける。

舞に使われる剣は始終手に持っているため、腰に佩く必要がない。

イレイオはともかく、ロッドは美しさに磨きがかかったような気がする。

普段は差すことない口紅を引いているからか、目尻に朱を刷いているからか。

一瞬女かと思ったが、近くで見ると間違いなく男だった。

イレイオは言うまでもない。

衣装は良いとして、本人の肌色のこともあって、化粧が全く映えない。

それでも美男二人のツーショットは、いい目の保養になる。

「こっちの暮らしはツライかい？」

イレイオが言った。

鵜は首を振る。

『悪く、ない』

彼は笑った。

それはもう、晴れ晴れと。

「そう来なくっちゃナ！」

彼は鵜に向けてグツと親指を立てる。

ロッドがイレイオを促した。

漸く二人の出番だ。

今年の祭りには、余興にこれまでとは違った新しい風が吹く。

篝火に照らされて舞台に上がっていく二人の背中を、鵜はルーチエと並んでまぶしげに眺めていた。

Sect. 29

生と死、時間と空間（後書き）

あの、とりあえずごめんなさい、です。

剣舞を期待なさっていた方がいらっしゃったら、本当にごめんなさい。

最後をイレイオが綺麗に締めてゆきました。

それはもう、鮮やかに。

「剣舞書くつもりでいたのに、何してくれんだよ！」よ彼に一言もの申したい。

畜生、あの自立型キャラめ！

ということで、剣舞は時間があつたら短編で書きます。

ロッドとイレイオの衣装についてですが、モデルは舞樂の蘇利古そりこと青海波せいがいばの衣装を足して割った感じです。

蘇利古そりこと青海波せいがいばの衣装については各自ネットでお調べ下さい。

皆様のすばらしい想像力で、あれをもっとシンプルにして動きやすくした上で、飾りを一杯付けている感じを想像していただければよいかと。

あの、こっちでもごめんなさい、です。

ただ単にあの配色に嫩萌した？月の趣味です。

そう言う部活をしているので、どうも思考がそちに引っ張られていつちやうみたいです。

雑面ぞうめんと言うのを被っていますが、アレは彼の有名なジブリ映画『千と千尋の神隠し』に出てくる神様が被っていた面のモデルです。

あ、この話の剣舞では面は被ってませんよ？

コッソ……、コッソ……。

”男”の指は、机の上で一定のリズムを刻み続ける。

「一年」

ただ呟いただけであつたが、目の前に立っていた男は、冷水にさらされた気分になった。

彼の上司は頭ごなしにガミガミと怒鳴りつけるタイプではない。タイプではないがしかし……。

「一年って言うのは、ちょっとねえ。時間かかり過ぎじゃないかな？ たかが素人の女を捕まえるのに一年。いくら寛大な僕でも、限度ってものはある」

この部屋は寒すぎる、と男は考える。

「僕もね、暇じゃないんだ。立場上やることはたくさんあるし、一つのことには、長々と時間を掛けるわけにもいかないんだよね」

わかるよね、と続けられて、男はますます体を硬くする。

「別にね、君たちの無能ぶりを責めている訳じゃないんだよ。仕事もこの一件だけじゃないだろうし、忙しいのは分かるよ？ こういふご時世だし、大変だろ。でもねえ……」

コッソ。

今まで続いていた音がやんだ。

次に何ができるのかと、思わず身構えてしまう。

しかし、彼の意に反して ”男” はお茶を一口飲んだだけだった。

カップを支える長い指や、慣れた様子の優雅な一連の所作に、男は思わず唾液を飲み込んだ。

出生に関して様々な噂のある ”男” の、その両目は固く閉ざされている。

カチャンと、カップをソーサーに置く音が室内に響いた。

「あと一回だ。あと一回だけ、君にチャンスをあげよう。期間は三ヶ月。三ヶ月以内に、女を捕まえてここに連れてくるんだ。いいね？」

そう言って、彼は笑みを深くした。

瞳は閉ざされていても、彼の行動を見ていると、そんなことは全く気にならない。

廊下を歩くにも不自由はないし、書類だって読む。

なぜそんなことが可能なかは、お付きの侍女にも分からない。

男が姿勢を正して了解の意を示すと、彼の上官は表情の一切を消し、執務に専念する。

その後いくつかの報告と指示を受けた後、彼は上官の部屋を後にした。

「いいんですか、彼に任せちゃって？ かわいそうに彼、貴方の覇氣にあてられて、すっかり怯えちゃってましたよ？」

男と入れ違いに執務室に入ってきたは、”男” の副官であった。

「ちゃんと独自のルートをお持ちなのに、どうしてわざわざ彼に

任せるんです？」

”男” は微笑した。

といっても、彼は常に微笑んでいるので、元の顔に戻っただけであるが。

「だって、すぐに見つかったらおもしろくないじゃないか。あちらにもこちらにもまだ余裕はあるみたいだし、もう少し時間を掛けて事を運ぼうと思ってね。それに、あれはもう後がないんだよ。この仕事に失敗したら、間違いなくあれはクビだね」

「あらら。ずいぶんとまあ、お優しいこと」

副官は衣装の袖を口元に当てて笑った。

「いい加減煩わしいんですけどね、あれもこれもみーんな。早く片付かないかな、と思っちゃいます。これが片付いたら、貴方は中央にお戻りになるんでしょう？ 私はそれが楽しみでしょうがないんです！」

「君は単にこの椅子がほしただけなんだろう？ こんな汚い地位がほしいだなんて、お前もたいがい変わり者だね、ジェミニ」

「うふふ。だあって、面白そうなんですもの。」 東方守護殿法務執行部部長” だなんて、堂々と人をいじめなさいって、言ってるようなものじゃないですか」

これには流石に ”男” も苦笑する。

その顔を見て、副官はまたしても衣装の袖を口元に添えて、うふふと含み笑いをした。

Sect. 30 東の策略（後書き）

これにて、第1部終了となります。

もっと短くで終わると思っていたら、三十話も使うことになりました。

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。

次回から第2部が始まりますので、引き続き、ご愛読いただければ幸いです。

*** 裏設定満載の登場人物紹介 〈第1部〉 〈前書き〉**

出てきた人物はとりあえず片っ端から全員記載しました。

本編には出していない裏設定が盛り沢山な登場人物紹介です。
でもネタバレはしません。

* 裏設定満載の登場人物紹介 〈第1部〉

〈主要人物〉

十 キオラ（本名…井垣鵜^{いがきつぐみ}）

主人公。《地上の民》。

年齢は物語開始時で17歳、高校二年生。身長は166cmと、日本人女性にしては長身。

髪は栗色から灰色へ。目はヘーゼルから髪と同色へ。ただし、目の右半分は茶色で、全体的に白い斑^ふが入っている。元々色素は薄いが、肌はトリップしてから白さに磨きがかかった。

《言語理解能力^{ビコ}》を持つ《言語理解能力者^{ビカラ}》のはずだが、なんだか最近色々副産物が出てきてしまっている模様。

現世から《神界》に無理矢理連れてこられた異世界トリッパー。元不良娘で、両利き。ナイフが得意らしい。現在エイルナー三兄弟の次男宅に居候中。ゴ○ブリが大嫌い。

主人公のくせに？月にもっとも嫌われているキャラ。

十 アーロッド・エイルナー（通称…ロッド）

東方系ロナグ人。《盗族》。

実年齢168歳、標準年齢56歳。外見年齢20代半ば。

エメラルドグリーン^{エメラルドグリーン}の髪と深緑の瞳。右頬に入れ墨。左側の顎から首にかけて、刃物による傷跡がある。常時は眼鏡を使用。

《分身》の《能力者》。

キオラが《神界》に来る原因となった人。元・軍人（世規軍東方面第四師団カウサー^{カウサー}基地司令。階級は少将）。通り名は『カウサー^{カウサー}の知将』。剣は強い。エイルナー三兄弟の次男。

？月のお気に入りの五指に入る人。

十 ユキ・マレゼル

東方系ロナグ人。《盗族》。

実年齢48歳、標準年齢16歳。

ダークブラウンの髪と茶色の瞳。可愛らしい顔立ちをしている。

《千里眼》の《能力者》。

真面目な性格でいじられキャラ。末っ子で兄と姉が居る。現在剣の修行中。師匠はロッド。

？月のお気に入りの子。

（セタ村の住民たち）

十 ルーチェ・エイルナー（旧姓…リヒテリア）

東方系スホルト人。

年齢はヒミツ。

髪はプラチナブロンドで瞳はグリーンだが、全体的に淡い色彩。

ロッドの妻。一見儂げな美人であるが、芯は強い。実家は名家でロッドとは政略結婚であったが、ロッドの退役と共に実家とは縁を切った。実家は都市部から離れた土地にあるため、本来は強烈な外国言葉がある。医師で専門は皮膚科だが、必要であれば何でも看る。

十 イデウス・エイルナー（通称…イディ）

セタ村村長。実年齢170歳、標準年齢56・7歳。

エイルナー三兄弟の長男。最近長女が嫁に行ったらしい。

＋ グリッジ・エイルナー（通称…グリー）

セタ村村長補佐。実年齢164歳、標準年齢54歳。
エイルナー三兄弟の三男。最近孫が生まれたらしい。

＋ ミエス・マレゼル

Sect. 16、18、21に登場。名前が出たのはSect. 18。

ユキの父親。最近、妻が末息子ばかりを可愛がっているので面白くない。

＋ ホイズ

Sect. 8、16、19に登場。

はじめは鵜を殺そうとしていた。第二章で意識不明の重体を負ったが、その後の経過は不明。たぶんまだ生きている。

＋ ハンセル

Sect. 4に登場。

強面の寡黙な男。寡黙すぎて？月にすっかり忘れられ、出番を全部ホイズに持って行かれてしまった可愛そうな人。

＋ ドット、ガット

Sect. 4に登場。

むさ苦しいひげ面の双子。

十 マーサ

S e c t. 8に登場。
セタ村婦人会代表。

十 長老

S e c t. 8に登場。
セタ村老人会会長。

十 マキ

S e c t. 24に登場。名前が出たのはS e c t. 25。
ユキの従兄弟。限りなくガヤに近いモブ。

十 フェリオ

S e c t. 12に名前だけ登場。
彼の家の若奥さんに子供が生まれたらしいが、彼の子なのか、彼の息子の子なのかは不明。

くその他く

十 バークス・イレイオ

第二章から登場。
グルゼリア人。

元・世規軍東方面陸部中尉で、元・ロッドの部下。ロッドに恋しているバイセクシュアルの男。妻子に逃げられた過去あり。《墮天^{ヘル}使^{ズ・ゲート}たちの庭》なる組織に所属しているらしいが、詳細は謎。一応、公務員。

十 カエル（その一）

Sect. 1、2に登場。

西北系獣人、ガマ族。

諸事情により、鵜を《神界》に召喚した張本人。

『ベード』という名前がありながら一度も呼ばれたことがなかったりする（そしてこれからも呼ばれることはないだろうと思われる）。科学者で無免許術師。

十 カエル（女王）

Sect. 2に登場。

西北系獣人、ガマ族。実は女王ではなく族長。

美形と珍しい物が好き。醜い。

十 豪商・ドシユア

Sect. 17、18に名前だけ登場。

表向きは食品貿易の仲介業者だが、裏では金銭の横領や人身売買を行っていた。

十 《瞬間移動》の《能力者》

Sect. 19、20に登場。名無し。

豪商・ドシユアの雇っていた傭兵部隊『ヘイジン』に所属。鵜に

ちよっかいを出してイレイオに瞬殺された。一応《能力者》なので、美形ではある。

十 ”男”

S e c t. 5、S e c t. 30に登場。

東方守護神殿法務執行部部長。何かを企んでいる模様。近々中央へ移動するらしい。

十 ”男” の部下

S e c t. 5、S e c t. 30に登場。

今回の仕事を失敗するとクビらしい。詳しい職務などは謎。

十 ジェミニ

S e c t. 30に登場。

”男” の副官。上司の地位を狙っている。

＊ 裏設定満載の登場人物紹介 〈第1部〉（後書き）

ゝえ、それここで言っちゃうの？ 的つぶやきゝ

【鵜】

？月は元氣なキャラが嫌いなんです。自分から進んで厄介ごとに首突っ込んでいくようなおバカキャラのほうが、動かしやすいちゃあ動かしやすいのですが、見ててイライラするんですよね。不自然にチートなのもまた然り。その点、鵜ちゃんは多少抑え気味になっています。

無駄にはしゃいでガンガン突っ込んでいくようなキャラは、これから誰かに押しつけてやろうと思っています。でも？月の性格上、基本的に主人公は嫌いです。

【ハンセルとホイズ】

ハンセルは不憫ですね。マジで？月に忘れられてたんですよ。忘れられた上に出番をホイズにとられるなんて…… 本当はホイズの出番は S e c t . 8 だけのはずだったのに、いつの間に出世したんでしょうか。本当に図々しい野郎です。

【ボックス・イレイオ】

あれだけ出張っているのに、彼は『その他』扱いです。理由は、すぐに消えていなくなってしまうから。ホントはもっと陽気なキャラにする予定だったのですが、《墮天使たちの庭》^{ヘルズ・ゲート}なる組織に所属しているという設定が出来てしまったので、どうしてもちよい説教臭い変な人、という感じになってしまいました。反省（へ、；）

【傭兵部隊・ヘイジン】

何の気なしに、傭兵部隊『ヘイジン』を漢字変換すると、『兵人』と出ました。意図して付けた訳ではないのですが、以外と面白かったので『ヘイジン』の漢字表記は『兵人』とします。

*** その他諸々の設定集 〈第1部〉 (前書き)**

一部ネタバレしております。

＊ その他諸々の設定集 〔第1部〕

〔世界観〕

十 《神界》

理論上、各世界の最上部に位置する。《神族》と彼らを統べる世界の創造主《神皇》が住む世界。

十 《天界》

理論上、《神界》の下《地上》の上に位置する。《冥界》で浄化された魂が再び生まれ変わるまで待機している世界。

十 《地上》

理論上、《天界》の下《冥界》の上に位置する。パラレルワールド 平行世界や異世界などを含め、無数に存在する。

十 《冥界》

理論上、各世界の最低部に位置する。《地上》や《神界》で死んだ魂がはじめにやってくるところ。ここで前世の記憶などを浄化し、罪を犯した魂は罪を償うために労働を科される。

> i 3 6 5 8 1 — 2 9 2 6 <

＊ 常時の干渉行為は禁じられている。

（地図）

＞i36591—2926＜

＊ ×＋●↓各主都（神都）

・各首都（神都）は区の名前ではなく、街の名前です。

・（○）内は名前の意味です。鵜が《言語理解能力^{ビュ}》で聞くと、そのように聞こえるそうです。

＋ 中心…四黒神嶺

《神界》の中心地であり、政府機関が集結している。頂上には《神皇》の住む神殿がある。

＋ 中央

首都…トレルⅡファンネル（生死と時空が調和したもの）

“トレル”Ⅱトル（空）＋エル（生）、“ファンネル”Ⅱファン（時）＋エル（死）↑たぶん生と死はLとRぐらいの差。

四黒神嶺の麓にあり、内側から、下級官吏の邸宅群、商業都市、貧民街が同心円状に広がっている。

＋ 東方

全二十二区

主都…コンカート（小人蟻）

第四区カウサーレ、第六区クヅアルトニア、第十五区メタルシア、第十八区ゼガン

気候は安定している。土地は森や山、平地で構成されている。農業、林業、牧畜業などが盛ん。民は、穏やかで争いを好まない性質であるといわれる。

十 西方

全十三区

主都…ディンカ（砂嵐）

雨がほとんど降らない。土地の半分以上は砂漠で、それ以外は荒野。作物が育ちにくく、貿易などによって生計を立てている。神経質で生真面目な頑固者が多く、その反面、学者や政治家が多いとされる。また手先が器用で、芸術家も多い。

十 南方

全二十区

主都…マンブラム（鍋職人）

降水量が四方で最も多く、ジャングルが広がっている。人々は陽気で大らか、タフで喧嘩も強い。軍人は約半分をこの南方出身者で占められる。強すぎる力を制御するため、唯一徴兵制のある地方としても知られている。製鉄の技術に関しては随一。

十 北方

全十三区

主都…サハ・リヨンド（水の橋）

第四区ウォンバニア

寒冷で乾燥した気候。高い岩山が延々と連なり、水辺も多いため、水産業や鉱山業が盛んだが、その地形のせいで部族間の行き来は少なく、西方とは違った意味で神経質で保守的、閉鎖的な民族が多い。

十 西北

全？区

神都…ロー・テ・ミニア（王妃の乳房）

雨は少なく大気は乾燥している。土地はほとんどが礫砂漠か岩山。中央政府の支配を受けない、半独立国家。元首号は《神王》で、代々世襲されている。反鎖国状態のため、内部で何が行われているか

はほとんど分らない。

十 ^{タウ}τ∴白亜の砂漠。鵜が召喚された土地。

ゝ人種ゝ

十 短命種

寿命が100年前後の種。

十 長命種

寿命が200年以上の種。

十 精霊種

誕生、生息、もしくは死亡するのに特定の条件を必要とする種。

十 獣人

精霊種。半人半獣の人間。

例) ガマ族

十 植人

精霊種。半人半植物の人間。

十 スホルト人

短命種の人間。寿命はおよそ100年。

例) ルーチェ・エイルナー

十 ロナグ人

長命種の人間。寿命はおよそ300年。

例) セタ村の人々

十 グルゼリア人

東方系短命種。絶滅寸前の国家保護人種。

第一次政戦開始直前に、近隣の種族と縄張り争いに負けて南方から移住してきた人種。髪は朱金色で、虹彩は濃いオレンジ。肌の色に特徴があり、褐色の地に、頭は額、胴は左胸を中心にして赤銅色の放射線状の筋が入る。

例) バークス・イレイオ

く 部族 く

十 盗族

まれに『盗賊』とも書き換えられる。役人の手出しできない強制執行を行う。

＊ その他諸々の設定集 〈第1部〉（後書き）

物語が進んでいないがために、もっと多くのことを書こうにも書けないというもどかしさが……

北方の地図がカオスだし、特に六区はすんごいことになってるよ
う。

Sect. 1 胡蝶の夢

—— 気がついたらそこにいた ——

うつすらと目を開けると、そこは見慣れた天井だった。

白い壁紙の貼られた、自分の部屋の天井。

カーテン越しに入ってくる朝日がまぶしくて、鵜は内心毒づきながらのそのそと体を起こした。

時計を見ると、午前六時。

二度寝をしたがる己を叱咤しつつも、眠気に負けて、起こした上半身を前のめりに倒す。

顔が布団に埋もれる形になる。

あまりの心地よさに、そのまま夢の世界へと旅立っていかうとする意識を引き留め、鵜は必至で頭を回転させた。

学校に行かなければ、と眠い頭で考える。

確か今日は、英語の単語テストがあったはずだ。

指定された範囲は、既に覚えてしまっているので問題はない。

あとは、通学時間を利用して軽く復習をしておけばいい。

半覚醒状態のまま、鵜は深く息を吐いた。

そして素早く、肺いっぱい空気を吸い込む。

「おっし！」

軽くかけ声を掛けて、己を誘惑する布団をはねのけ、ロフトベッドから飛び降りた。

着地の際に床に響いたが、特に気にしないこととする。

どうせこの部屋の下に住民は、こんなことでは起きやしない。

うん、と伸びをする。

パジャマ代わりのジャージを脱ぎ捨て、学校の制服を着た。

黒のブレザーに、グレーのチェックのプリーツスカート。

リボンも黒とグレーのストライプ。

左胸にエンブレムは付いているけれど、これも黒の地に銀糸で文字をデザインされたロゴが刺繍してあるだけ。

徹底的にモノクロで統一された制服は、もう少し華やかな色が欲しいと、おしゃれな女子たちが騒いでいた。

染髪も禁止されているため、朝礼では完全に生徒群は黒と灰色の二色に絞られる。

そんな中で、鵜の栗色の髪はよく目立った。

染髪はしていない地毛なので、毎年春になると、母親にその旨を生徒手帳に書いてもらうのが恒例となっている。

生活指導の先生に文句を言われるのも、最早恒例行事。街を歩くと外国人に間違われる。

洗面所で髪をとかしながら、重くため息をついた。

中学の頃はわざと脱色したり、逆に焦げ茶に染めてみたりもしたが、ナンパしてくる男連中は、大抵鵜を外国人だと勘違いしている。英語は得意だが、やはりしゃべってみるとネイティブの発音とはほど遠い。

日本人に見られないのは髪の色だけではなさそうらしい。

そのことに気づいてからは、頭髪を下手にいじるのをやめた。

まず身長が、同世代の女子たちよりも頭半分ほど高い。

肌も日本人にしては白いし、目の色も茶色ではない。

そもそも色素が薄いのだ。

顔立ちも日本人らしくない。

小さい頃から自分の容姿が嫌いだった。

容姿が原因でよく虐められたが、片っ端から返り討ちにしてやった。

外国人でないのならハーフでは、と言われるが、鵜は父親のことを全く知らない。

母親に聞いても教えてはくれない。

ただ以前、酒に酔ってぼそりと呟いたことがあった。

「ハリー」と。

明らかに日本人の名前ではない。

鵜はハーフだ。

自分の出生を確信できたところで過去が消える訳でもなかったが、長い間胸の中で固まっていたしこりが、少し小さくなった気がした。母親の趣味であるが、この家は鏡が非情に多い。

洗面所にドレッサー、他に手鏡や壁掛けの鏡など、家中のあちこちに置いてある。

置いてある場所に規則性はない。

主に母親の部屋に多いが、他の場所にも普通に置物感覚で置いてある。

たとえば、台所の壁に。

たとえば、トイレの扉の内に。

たとえば、リビングのサイドボードの上に。

時々、視界の端に映る自分の影にドキリとさせられる時がある。

どうしてこんなに鏡が多いのだろうか。

流石に異常だと感じるが、鵜は部屋に引きこもっていることが多いので、部屋から出さえしなければノープロBLEM。

しかし学校に行くためには、身支度のためにあちこちを動き回らなければならない。

出来るだけ鏡を見ないようにして、鵜はリビングを横切る。

ちらちらと映る自分の姿は、慣れてしまえばなんてことはない。

怖いのは不意打ちだ。

時々鏡の配置が変わったりするので恐ろしい。

ふと、呼ばれたような気がして辺りを見渡した。

母親は夜勤で家には居ない。

今この家にいるのは鵜だけのはずである。

どこにでもある、なんの変哲もないアパートの一室。
気のせいかな、と思った。

何事もなかったようにして、鵜は鞆をひつつかんだ。

戸締まりをチェックし、玄関で靴を履く。

ドアノブに手を伸ばして、そこで鵜は動きを止めた。

扉に掛けられた鏡に映る自分。

自分の後ろに、何かが居る。

珍しいことではなかった。

小さい頃からたまにあったことだ。

何かが何かは知らない。

ただそこに居るだけ。

これが出るといっても必ずと言って良いほど、その日は良くないことが起こる。

出るから起こるのか、起こるから出るのかは分からない。

ただ、これが出ると気をつけようという気になる。

またか。

鵜にとってはその程度の認識だった。

形も不明瞭で、かろうじて人の形をしていると言うことだけが分かる。

この人型が出るのは家に限ったことではない。

公園の池の水面や、店のショーウィンドに映っていたこともあつた。

白いもやのような何か。

しかしこの日に限って、この姿がいつもと違っていた。

どうしたわけか、徐々にその姿をはっきりしたものへと変えていく。

男だった。

三十を少し過ぎたかと思われる年頃の男。

試しに振り返ってみるが、背後には誰もいない。

鏡の中にのみ、男は存在する。

彼は不思議な格好をしていた。

着ているものはボロボロで原形をとどめておらず、ザンバラの髪は伸び放題で真っ白。

肌も、生まれてから一度も日の光に当たったことがないんじゃないかと思うほど青白くて、不気味な幾何学模様の入れ墨が、腕と言わず顔と言わず、黒々とその存在を主張していた。

目だけがギラギラと灰色に光っていた。

細くてつり上がった目つきは、小さな子どもなら睨まれただけで絶対に泣き出すだろう。

唇も薄くて、体つきも華奢。

全体的に薄幸そうに見えた。

男は、鏡越しに鵜が自分を見ていることが分かると、ゆっくりのその腕を持ち上げた。

何だ、と思う暇もない。

一度、瞬きをしただけだ。

その一瞬で男は、鵜の数メートル後ろから、肩が触れるほど近くへと移動していた。

鵜の背後にいることに変わりはない。

思わずびくりと肩を揺らしたが、男は黙って、じっと何かを指差している。

爪は長く伸びてボロボロで、指先はひび割れていた。

どうやら鵜の胸元を指しているらしい。

鵜は制服の胸元を握りしめた。

何だ。何が言いたいのだ、この男は。

体の芯が震えているのが分かる。

その場に突っ立ったまま、鵜は鏡に映る自分と男を見つめ続けた。いた。

やがて、男がゆっくりと口を開いた。

何かを呟いている。

声は聞こえない。

いや、聞こえる。ような気がする。

ゆっくり、一言づつ、男は何かを呟く。

“つぐみ”

やっと聞き取れた。

唇の動きを平行して読み取ったのである。

男が呟いていたのは、鵜の名前だった。

ここ一年ほど呼ばれていない、普段は呼ばれることのない本名。

久しぶりに呼ばれた。

目を閉じる。

なぜか、肩の荷が下りた反面、一種の喪失感のようなものを感じた。

そのまま、体が崩れ落ちるに任せる。

そこで鵜は目が覚めた。

S e c t. 1 胡蝶の夢（後書き）

ということ、夢オチでした！

夜中に洗面所に行けません。

洗面台の鏡が怖いです……

窓ガラスに映る自分の影にビクつくこと早数回。

Oh！ 小心者の己が嘆かわしい（T^T）

Sect. 2 ある日の午後

この日、鵜はロッドを相手に、二本の短槍を汗だくになって必死に振り回していた。

いつもの森の側の練習場である。

少し離れたところではイレイオが腕を組んで見ている。

ユキはというと、つい先ほどイレイオによって失神させられたばかりで、いまだ彼の足もとで伸びている。

護身術を教えてほしい、とロッドに直接頼み込んだのが十日ほど前。

面白がって見物に来ていたイレイオが、この修行に加わったのが七日前。

流石、戦闘が得意な元南方人種の出身だけあって、剣術はロッドと同列かそれ以上である。

在軍時代には士官学校の教官を務めていたこともあるとかで、なるほど確かに彼の教え方にはそつがない。

護身術を習うはずだったのに、試しに素手でやりあってみると意外と粘って見せたので、本格的な武術訓練になってしまった。

修行開始一日目で、早くも剣は向いていないと一蹴されてしまった。

その後あれこれ試した結果、これならばと落ち着いたのが短槍である。

左右を同じように使えることから、ならば二本持てと押し付けられた。

ヤンキー娘全盛期だった中学時代、威嚇も兼ねてナイフを使うために練習していたことが、意外なところで役に立った。

馬に乗れ、と言われて乗ってみると、見事に落ちた。

たった一回のことなのに、ロッドとイレイオ二人して、二度と馬

には乗るなと言ひ渡されてしまった。

乗っても走らせるな歩かせるだけにしろお前が手綱を握ると馬が怯えるなどと、素人相手に散々な言いようで、そうすると移動手段はどうしても馬車か荷車に限定されるが酔うから嫌だというと、アホぬかせお前は馬とは相性が悪いんだ自覚しろと、訳のわからない理由で禁止された。

ロッドは馬術と剣術を得意としている。

イレイオは剣術はもちろん、一般に実戦で使うものは一通りできると豪語している。

はつきり言おう。

訓練に対してロッドは鬼だが、イレイオはさらに鬼だった。

怖いなんてものじゃない。

『鬼逃法』とかいう情けないような名前の、昔からあるという方法を使って、相手を肉体的精神的に追い詰めていく。

修行が完成すれば、技術的にも人間的にも立派に成長しているという優れたものだそう。

ただでさえ胡散臭いののに、発案者は女皇その人だというから、胡散臭さも倍増である。

修行過程は厳しいなんてものじゃない。

その名の通り、鬼が泣いて逃げ出すほどだという。

下手をしなくても命を落とすのがオチで、完遂できたものはこれまで片手で足るほどだとか。

いくらなんでも、いきなりそんなものを素人相手に施すのは非常に危険なので、今回はずいぶん加減をしてくれたようだったが、すぐにやめてくださいと泣きつくことになった。

まず、休憩がない。

そして食事を取らせてもらえない。

ひたすら攻め込まれ、食事も休憩もその攻撃をいかくぐって自分で何とかしなければならぬ。

絶え間なく続くその攻撃は、見事なまでに鵜のすきを突きまくっ

てくる。

流石にイレイオにも都合があるので、四六時中とまではいかなかったが、鵜は二日で音を上げた。

そこからは主にロッドが指導をしてイレイオが補佐をするような、いたって平凡で普通の武術訓練になった。

「おら、脇が甘い！」

ロッドが怒鳴るとともに、すかさず脇腹を突いてくる。

普段は剣を握る彼が、今回は鵜に合わせて槍を振るっている。得意ではないからといって出来ないわけではないらしい。

どうせ士官学校では剣以外にも習うんだから、と言っていた。体をひねって紙一重でかわすと、ロッドは槍を真横に薙ぐ。もろに入って一瞬息がとまった。

思わず体をくの字に折り曲げると、ロッドの蹴りが容赦なく飛んできた。

「うえゝえ！」

半ば生理的に出た奇妙なうめき声をあげて、鵜は見事に吹っ飛ばされた。

それを見てイレイオが呆れた声を上げる。

「女の声とは思えねェな」

ほっとけ、とは言いきれない。

なんせ自分でもそう思う。

地面に転がって呻くことしかできない鵜を、ロッドは石突きで地面を突き、腰に手を当てて見下ろした。

「もつと自分の武器の^{えもの}ことを考えやがれ。明らかにお前のほうがリーチは短えのに、遠くからチンタラ突き出してんじゃねえ！ 剣相手ならそれでもいいが、長槍と短槍じゃあ懐に入らねえと届かねえに決まってるだろうが！ 何度も同じこと言わせんな！」

明らかに全然体格の違う女相手に本気^{マジ}になんたって。あたしは護身術を教えてくれって頼んだはずだぜ？

何て言おうものなら、修行内容がさらに厳しくなることを鵜は経験で知っている。

「いってえ……」

骨が折れていても不思議ではないはずなのに、不思議なことに一度も骨折したことがない。

酷くて白い肌に青黒いあざを作る程度だ。

ルーチェはそれを見て不機嫌そうに溜息をついていたが。

そうそう声だが、あの大仕事から一月後、とあることを切っ掛けに、なぜだか普通に出るようになった。

倉庫整理をしていたら、突然例のあの Cockroach さまが顔面めがけて飛んできた。

ビックリして大声で悲鳴を上げてしまい、向こう三軒両隣のご近所様ご一行が驚いてすっ飛んできた、というのがホントの話。

ルーチェ曰く、声を出すことを精神的に抑圧されて云々……分からないからとりあえず割愛。

「おい、どうするんだ？ 続き、やるのか？」

いつまでも地面にうずくまったままの鵜を見て、ロッドが声をかける。

「……やる」

いつまでも負けっぱなしなのは非常に悔しい。

今ならユキの気持ちかわかる気がする。

起き上がって改めて双槍を構えなおし、鵜はロッドに向かって突っ込んでいった。

ちょうどそのころになってようやく意識を取り戻したユキは、したたか打たれた首を抑えながら、ゆっくり上体を起こした。

「オ、気づいたか坊ちゃん」

隣に立っていたイレイオが声をかけるが、ユキはあえて無視した。

「拗ねてンのかイ、坊ちゃん？ オレに気絶させられたから」

「坊ちゃんって言うな」

すると彼は、その場にしゃがみこんでニイと笑った。

「そうやってふてくされてる内は、まだまだ『坊ちゃん』だよ。

……筋は悪くなかったンだがなア。余計な事に気を取られすぎたなア」

ユキはイレイオを睨みつける。

「どういふこと？」

しかし彼は答えず、ユキの眉間を指先でピンと弾いた。

「そんなんじゃないア、いざという時に大事なモンを守れないぜ」

「……意味がわからない」

「ホ」

イレイオが顎をさすりながら笑っている。

ロッドに弾き飛ばされた鵜の槍が、風を切って回転しながら二人のほうへ飛んできた。

イレイオはそれを難なくキャッチする。

「ツぶねエなア、おい」

「わりー、大丈夫かー！」

少し離れた所から鵜が叫ぶ。

しかしすぐにロッドに攻め込まれてたたらを踏んだ。

鵜が見事にしりもちをついたのを見て、ユキが痛そうに顔をしかめる。

「オレたちも、もっかいやるかい？」

「やるにきまってるだろ！」

「機嫌が悪いなア。ちゃんと牛乳飲んでるかイ？」

立ち上がるなりきりかかってきたユキの剣を軽くいなしながら、イレイオはあきれた表情を作る。

「大きなお世話だ！」

ユキの剣先がイレイオの肩をかすめた。

「ホイ、坊っちゃん。足元がお留守だ、ぜっ！」

しゃがんだイレイオに足払いをかけられ、ユキは横ざまに転倒する。

倒れたユキのこめかみに剣先を突き付け、イレイオは宣言した。

「チェックメイト」

ユキはというと、イレイオをにらみつけて歯ぎしりをしそうな勢いだ。

生来の負けず嫌いも手伝って、視線だけで相手を射殺せそうである。

「もう一回だ」

再度勝負を挑む。

しかし今度も結果は変わらなかった。

「だからさア、相手のスキを突いたからって油断しちゃ駄目だつてエの。さっきも嬢ちゃんが似たようなことやって、少将殿に怒られてたダロ？ 坊ちゃんは嬢ちゃんよりも修業期間長いのに、なアんで今さらそんなミスするかね？」

ユキに手を差し伸べてイレイオが言う。

しかしユキはその手を払いのけ、自力で立ち上がった。

剣を構えなおす。

「もう一回……」

「ユキ、そろそろ終わるってよ！」

ロッドと稽古していた鵜が声を上げる。

「だってヨ。残念だったナ、今日はもうこれで終しまいだ」

ユキはイレイオに指を突き付けて宣言した。

「いつか絶対お前に勝ってやる！」

イレイオはニツと笑った。

「楽しみにしてるヨ」

Sect. 2 ある日の午後（後書き）

と言う訳で、ある日の日常でございました。

第2部に入ってちょっと文体が変わったかな……

いつの間にか鶯の声が出るようになりました。

もっと深刻になろうとしましたが、最近あのGが我が家に頻繁に出没しますので、どうやらそれがこちらにも反映してしまったようです。

後半……初めて書きましたよ、ユキメインなんて。

可愛いんですよね、彼。真面目で堅物っぽいところが特に！

書きながらにやにやしてたら、妹に不気味がられました。

そしてやっぱりイレイオが出張る！

ちなみにユキは、子ども扱いする彼のことを嫌っています。

Sect. 3 動き出す者

「キオラを移動させる？ 何でまたそんな急に」

突然の元部下の提案に、ロッドは反射的に声を潜めた。

場所はいつもの練習場の側の森。

時間は夕食の後である。

イレイオがあらかじめ時間と場所を指定して、ロッドを呼び出した。

「お恥ずかしながら、上層部がエラくこんがらがってましてネ。

みんな好き放題言って勝手に動き回るモンですから、情報が錯綜しちゃって。何度本部に問い合わせても、ハッキリした答えが返って来ないンすよ」

イレイオが参ったという風に後ろ頭を掻きながら言う。

「とりあえず、まっすぐ降りてきた情報によると、どうも西北がキナ臭い。しかも奴らは、嬢ちゃんの大まかな居場所の検討を付けているらしい、と」

「ちょっと待て、西北？ どういう経路で急に奴らが出てくることになるんだ。今の西北は、中央でさえ簡単には手出しの出来ない不可侵領域になってるんじゃない………おいまさか、去年のカエルの一件は陽動か！」

ロッドが目を見開いた。

「ご名答。奴らの犠牲者にはご愁傷様としか言いようがありませんが、下から上がってきた報告書を見る限り、あの女王ガエルは本当に何も知らなかったんでしょうネ。首謀者だけが、西北の本体と繋がってたみたいっス。何をトチ狂って嬢ちゃんを狙ってンのかまでは知りませんが、わざわざ高いリスクを犯してまで、違法な召喚術を行ってるンす。嬢ちゃんの《能力》が目的なンじゃねエかってトコまでは、だいたい予想は付くんすけどネ」

役所の目を違法な術の行使ではなく、無節操な種族故の本能的活動の結果に向けさせる。

さらに、常に警戒されている西北ではなく、外部にはじき出された傍流のものに術式を行わせる。

例え傍流がつぶれても、西北にある本体は無事である。

証拠は役人が踏み込んでくる前に処分してしまえばいい。

ただ一つ計算外だったのは、傍流の者たちの食欲が彼らの予想を遙かに上回っていたということだろう。

西北にいた頃は政府との制約によって、狩りの回数や規模を厳しく制限されていたため、誰も彼らの食欲を満たすために必要の食料の量を正確に把握していなかった。

おかげで早々に東の役人に目を付けられることとなったのだ。

夜なので森の中は暗い。

満月である月の明かりだけが唯一の光源であるが、二人ともわざと木の陰に身を隠している。

互いに顔を見合わすことはなく、二人とも好き勝手な方向を向いて会話を交わしていた。

「実行したのはガマ族ですが、主犯はもっと深いところにあると見て間違いないでしょうネ。西北が動けば、奴らを常時監視している中央が感づきマス。嬢ちゃんだけじゃなく、この村までをも危険

に晒すことにナル。東もあちこち嗅ぎ回ってるようっスが、この三つの権力がこの村に一気に集中すれば、取りつぶしどころじゃ済みませんヨ。下手すりゃア、一族郎党みんなまとめて地獄送りっス。なんせ、政府が血眼ンなって探してるお尋ね者を、一年も匿い続けてるンすからネ。それも政府直属の被支配組織が」

逆に言えば、よくも一年間隠し続けることが出来た物である。

実際に鵜が罪を犯した訳ではないが、この一年で政府は以前よりもあからさまに彼女を捜すようになった。

《盗族》は政府の依頼を受けて仕事を請け負い、報酬を受け取る。その他にも、日常生活における様々な事柄を政府によって保証されているが、その代わり、いくらかの規則に縛られている。

鵜を《盗族》が匿うのは役所にとって灯台もと暗しとなり、結果的に良い目くらましとなった。

「今のままじゃア早晩、西北に見つかって嬢ちゃんをかつ攫われるのがオチだ。かといって上層部が動くのを待っていたんじゃア遅すぎる。実際に方々が動き始めてコトがややこしくなる前に、現場の判断で嬢ちゃんを移動させマス。証拠隠滅は任せて下さい」

「任せろって、そりゃあ命令違反じゃねえのか？ お前の任務はキオラを探すことだろ？」

「だから現場の判断でって言いまして。それに、探したあとの命令は受けてないンすヨ。報告しても毎回指示が変わってるってコトは、上層部も西北の真意はつかめてないンでショウ。安心して下さい。オレたち《墮天使たちの庭》^{ヘルズ・ゲート}は、それ自体が独立した隠密機関っス。裏で隠れてこそそやることに関しちゃア、プロっスよ」

ロッドは腕を組み、眉根を寄せて考え込む。

「……分かった。俺が適当に理由を付けて、キオラをこの村から出るように仕向けよう。だが、キオラにこのことは知らせない方が良いだろうな。特に西北のことに關しては」

「そうっスね。嬢ちゃんって、斜に構えて突っ張ってる割には、時々ビックリするぐらい警戒心って物がありませんからネ」

《神界》に来るまで平和に慣れてしまった社会で生まれ育った鵜は、本人にそのつもりはないにしろ、彼らの目から見れば驚くほど不用心である。

ましてや、最近ようやく例のトラウマから立ち直ってきたばかりだ。

ロッドは妻と同じように鵜のことを大切に思っている。

だからこそ、いらぬ心配をかけたくない。むしろ、このままずっと何事もなく今まで通りの生活が続き、時期が来ればそれに合わせ……と彼は思う。

これはもしかすると、親馬鹿に分類される感情なのだろうか。

ロッドは月光の当たらない木陰のうちに、わずかに苦笑した。

その頃鵜は、食後にコアを飲みながらルーチェと談笑していた。ロッドがイレイオに呼び出されて出かけて行ったので、今家にいるのは二人だけ。

女同士のおしゃべりは、男がない分普段よりも内容がディープになる傾向がある。

「ロッドってさあ、イレイオから逃げ回ってる割には結構仲いいよな」

「そうですねえ」

コアのさわやかな香りが室内に漂い、妙に気分もすっきりする。

「アーロッド様は、追いかけられるのを嫌がっていらっしゃるだけで、別にイレイオ中尉を嫌っていらっしゃるわけではありませんからね」

「だよなあ」

最近鵜たちの修行のせいで一緒にいることが多くなったせいか、イレイオは前ほどロッドに対して愛を叫ばなくなった。

ただ、ロッドが関わりと人格が変わるのは相変わらずで、鵜たちの修行に付き合っているもの、恐らく少しでも長く彼の側にいたいからだと鵜は踏んでいる。

「あいつって、昔からああだったのか？」

鵜の問いに、ルーチェが可笑しそうにクスクスと笑った。

「ええ、そうですよ。イレイオ中尉はとても優秀な方ですけど、あの容姿のこともあるって、アーロッド様のファンの中では一際目立っていました」

「あ、他にもファンが居たんだ。もしかしてファンクラブとかもあつたりして」

「ありました。ちなみに会長はアーロッド様の副官だった方です。レヴェニツシュ大佐とおっしゃって、とても品のある落ち着いた雰

囲気の殿方でした。ストイックなイメージがあったので、あの方のファンだと知ったときはとても驚いたというか、シヨックだったというか……」

「憧れが失望に変わった瞬間、だな」

ルーチェは苦笑する。

「確かお嬢さんも、どこかの軍に所属していらっしゃったはずです。レヴェニツシュ家と言え、第二次政戦後の東方で代々優れた軍人を排出してきた一族ですから」

それを聞いて鵜は思う。

「この世界って、ホンツと男女差別が少ないよなあ」

「国のトップに立っていらっしゃるのが、女皇陛下ですからね。なかでも南の女皇は、大の男嫌いで有名だそうです。特に軟弱と見なした男は、側にも寄せないのだとか」

皇おうとはいえ、女であることに変わりはない、ということだ。

「民の前に姿を現さないのに、そう言う情報は降りてくるんだ？」

「第一次政戦前までは、それぞれが地方の神殿でお暮らしになっていて、今よりもっと身近な存在であったと聞いています。今のように中央の山にお籠もりになったのは、第二次政戦後です」

かつて女皇とその一族が住んでいた神殿は、今では地方守護神殿と呼ばれている。

東であれば、東方守護神殿だ。長いので省略して、通常は東護殿ひがしぐでんで通る。

東西南北とあり、それぞれに地（大地）、風（大気）、炎、水の四大元素が相当し、四人の女皇の称号として冠される。

たとえば今出た『南の女皇』は、同時に『炎の女皇』と呼ばれることもある。

実名は伝わっていない。

「どうして中央に集まったんだろうな。そのまま地方にいればいいのに」

姿が見えなくても、その存在はこれほど民の日常に浸透しているのだ。

第一次政戦以前は普通に民と接していたと言うから、何も今更姿を隠す必要はない。

「さあ。西北を牽制するため、という噂を聞いたことはありますが、詳しいことは……」

第二次政戦が終結したのは200年も前だと言うが、この世界は、未だ戦争の後遺症に煩わされている。

《神界》を人体に例えらるとするなら、西北は癌だと学者などは言う。

鵜たちの居るこのセタ村は、西北とは対局の東南の部分に位置するが、それでもこうやって西北の気配は漂っている。

自分がその西北に目を付けられているとは知らず、鵜はのんびりと夕食後のひとときを楽しんでいた。

Sect. 3 動き出す者（後書き）

『Star Emerald』

（アールロッド・エイルナー少将、非公式ファンクラブ）

会長…ダグラス・レヴェニッシュ大佐

副会長…デニス・クック少佐（空部工兵科）

ネイサン・マーケット大尉（憲兵科）

会員数…6,627名

新規会員募集中！ 今なら入会費無料！

お申し込みは、人事科担当者まで。

……ネタです。

Sect. 4

被災地、エイルナー家次男宅

槍の修行は毎日の仕事が一通り終わった後になるので、どうしても夕方から夕食の直前の時間帯に行くことになる。

ちなみにこの村にお風呂なんて立派なものはない。

せいぜい川で水浴びをするか、濡らした布で体をふく程度だ。

湯船を備えた風呂を持っているのは、裕福な家や政府の高官だと相場が決まっている。

平凡な庶民の家に風呂はない。

お金持ちのお嬢様だったルーチェがこの村に来て一番ショックだったのは、風呂がないことだったらしい。

水浴びの風習には、いまだに慣れないと言っていた。

春も間近のこの季節、村の近くに川はない。

村から一番近い川は、夏の初めに南のほうから一時的に流れてくる季節限定のものだった。

しかしその川も、水量が少ないうえに秋が終わるころには消えてしまうので、日常的に利用することができない。

今は井戸で汲んできた水で濡らした布で、体中の汗をふく。

冬の終わりが近いとはいえ、セタ村は南方に非常に近い位置にあるため真冬でも雪は降らず、夜は冷え込むものの、日中の暖かい陽気はどうかすると汗ばむことすらあるほどである。

体を拭くために服を脱いだところで、大して寒さは感じない。

男たちは、場所などお構いなしに豪快に半裸になっているが、女である鵜はそういうわけにもいかない。

いくら気持ち悪くとも、家に帰るまで我慢するしかない。

男たちが汗を拭いている間、鵜は修行に使用していた道具を片づけておく。

南方系であるグルゼリア人のイレイオと、東方系であるロナグ人

のロッドとユキでは、明らかに筋肉につき方が違う。

勘違いしないでほしいのだが、別にマジマジと観察したわけではない。

通りすがりに見えるのだ。

しかも男たちは半裸であることに羞恥心のかけらもないから、平気でそのままあちこちを歩き回る。

最初はなるべく見ないようにしていたが、こうも毎日だといいい加減慣れてしまう。

イレイオはポンチョのような民族衣装を着ているせいか、意外と着やせるタイプらしく、実際は要所要所の筋肉が盛り上がってマツチヨ体型である。

ロッドは逆に気太りするタイプらしく、程よく日焼けした体にあまり筋肉は見られない。

しかし体格そのものはしっかりしており、やはり鍛えているのだと思わせる。

修行中に引き続き、邪魔だからという理由で髪を後頭部で縛っているのだが、そのうなじが何気になまめかしい。

ルーチェに言う大喜びで賛同を得たので、別に鶯の感性が間違っているわけではないだろう。

ちなみにロッドとイレイオは、二人とも元軍人だったと言うこともあってか、体中に傷跡がかなり目立つ。

”闘う男たち” というキャッチフレーズでマニアのお姉様たちに売り込んだら、あつという間に売り切れるだろう。

ユキは大人二人に比べると、もうお話にならないくらい細い。

色は白いは体格は華奢だは、よくあれで剣を振り回せるものだと感じたものだ。

宴会などでもよくほかの男たちに「もっと食べ」と小突かれていたの思い出す。

確かに彼は男としても小柄、というか女である鶯よりも目線がわずかに低い。

そろそろ成長も止まろうという年齢でありながら、鵜の身長はまだ数センチづつ伸び続けているため、鵜はユキの将来がとても心配である。

単純に年を数える実年齢では鵜よりもはるかに年上であるにもかかわらず、平均寿命が100年ほどのスホルト人の年齢を基準とした標準年齢では彼は鵜よりも一歳年下になるためか、鵜の中ではユキはすっかり弟分の位置づけである。

と、男たちをしり目にせっせと後片付けをしていた鵜であるが、ロッドの足元に置いてある脱ぎ捨てられた服を見て眦を釣り上げた。

「あ、おいロッド！ 服を上着と一緒に脱ぐなって昨日も言ったじゃねえか！ 誰が洗濯すると思ってんだよ。洗濯のたびにいちばらさなきゃならねえこっちの身にもなれっつーの！ それから汗ふき終わったんならとっとと服を着ろ、恥ずかしい！」

ロッドが口元をひきつらせ、それを見てにやりと笑ったのはイレイオである。

「年頃の娘を持つと大変っすね、少将殿。さっきと立場が逆じゃないスカ」

「黙れ。お前も、万が一女房とよりを戻すようなことになったら同じ目に会うんだぞ」

「残念でした。あっちはオレと別れてすぐに別の男と再婚しましたヨ。すぐに子どもも生まれて、オレと一緒にだった時よりも幸せだっって言ってまシタ」

「ご愁傷様。うちは間違ってもそんなことにはならねえよ。お前みたいに、仕事にかまけて女房をほったらかしにしてねえからな」

イレイオがジト目でロッドを睨む。

「……それって、嫌味っスか？」

「お前みたいな秘密主義が、女房を持つからそんなことになるんだ」

「言ってくれますネ。言つときマスけど、秘密主義なのは仕事がらっスよ。それに、中尉になってもまだ女房も子供もいないようじや、逆に怪しまれちまいますからネ」

ぼそぼそと、小さな声で口論をしている二人を見て、すでに着替え終わっているユキがぼそりとつぶやいた。

「いいから二人とも、さっさと服着なよ」

いつまでたっても着替え終わらない大人二人に業を煮やした鵜が暴れ、ユキが巻き添えを食らうはめになったのは少し後の話。

結局、二人が家に帰ってきたのは夕飯の時刻直前である。

「まったく、着替え一つにどんだけ時間かかってんだよ。お前らは年頃の女子かっつーの」

ぼやく鵜の隣を、ロッドが素知らぬ顔をして歩いている。すでにあたりはすっかり暗くなり、家々の窓には温かな明かりがともっている。

夕飯のにおいが漂い、中でも数種類の強いにおいが混ざって鵜は少し気分が悪くなった。

「ただいまあ」

ぺこぺこに減った腹を抱え、家の戸を開けた。

「おかえりなさい。今日は遅かったのですね」

なぜかわずかに引きつったような笑みを浮かべて、エプロンを着けたルーチェが出迎えてくれる。

ちやうど夕食を作っている最中だったらしい。

「ああ。ロッドとイレイオがいつまでたっても長話をやめねえもんだから、よ」

愚痴を聞いてもらおうとして鵜は、家の中に滅多に見かけない人影を見つけて、途中で言葉を切った。

「なんでいるんだよ、お袋？」

声を上げたのはロッドである。

「”なんで” とは聞き捨てならないね。母親が息子の顔を見に来ちゃ悪いってのかい？」

「いや、そう意味で言ったんじゃない……」

突然の母親の訪問に、息子の方も戸惑っている。ルーチェの機嫌が悪い理由が分かった。

どこの世界でも、嫁と姑は仲が悪いものだ。

彼女は普段、長男である村長と一緒に住んでいるはずであるが。

「兄貴の所で何かあったのか？」

すると彼女は重々しく溜息をついた。

「あそこは年寄りを^{いたわ}労ろうとしないんでね、しばらくこっちに世話になろうと思って。最近の若いもんは、年寄りをいったいなんだと思ってるんだろうね。こんな腰の曲がった老婆に子どもの世話を押しつけるなんて。おまけに義理の母親を口汚くののしるなんて、どういう神経をしてるのか。まったく正気じゃないよ。ここには子どももないことだし、あっちよりは静かだろうね」

本人にどういう意図があって言っているのかは分からないが、鵜はルーチェの機嫌がどんどん急降下していくのが分かった。

完璧なほどの笑顔を浮かべてはいるが、彼女の周りの空気が不穏に渦巻いている。

ロッドもそんなルーチェの様子に気づいたのか、何とか母親の説得を試みる。

「送ってくから、帰った方が良いんじゃないか？ 兄貴たちが心配してるぞ？」

すると彼女は心外だという風に片眉をあげた。

「おや、なにかい？ あんたらも、アタシがいたら邪魔だってのかい」

「だから、そう言う意味で言ったんじゃないって」

ロッドはこめかみを押さえてうめいた。

タイミング良く、と言って良いのかは分からないが、ちょうどその時、台所から水物が沸騰する音が聞こえてきた。

ルーチェが両手を合わせて穏やかに笑う。

「あの、そろそろお夕食にしませんか？　せっかくですから、お義母様も召し上がって行って下さいな。今日はポトフを作ったんです。お口に合うといいのですけれど」

「ま、いいだろう。晩ご飯を食べながらも話そうじゃないか。よそ者の作る料理も、たまには悪くないだろう。食べられるだけましと思わなきゃね」

ルーチェの額に青筋が浮かんだような気がした。

やがて食卓について食事が始まって、彼女はおしゃべりをやめなかった。

皺の寄った口から、長男の嫁の悪口が止めどなくあふれてくる。

時々三男の嫁の悪口や、果てはルーチェに対する嫌味まで出てくるので、聞いている方もたまったものではない。

ロッドはそれを止めるでもなく、我関せずと言ったように黙々と食事を続けていた。

「ルーチェ、その塩を取っとくれ」

彼女が指差した塩は、鵜の目の前にある。

そう言えば、鵜はこれまでに彼女と一度も口をきいたことがない。自分に言えはいいのに、と内心苛立ちながら鵜が塩に手を伸ばすと、ルーチェに目で制された。

辺境にあって、よそ者を嫌う閉鎖的なこの村がルーチェを受け入

れているのは、ひとえに彼女が医師免許を持っているからに他ならない。

この村で医者にかかろうと思えば、少し離れた街までいちいち出向かなくてはならないのだが、彼女が来たことによってその手間が無くなった。

しかし、ルーチェと違って何の特技のない鵜は、彼らにとっては煩わしい部外者だ。

彼女に限らず、村内で鵜をいなしものとして無視するものは多い。

「どうぞ、お義母様」

差し出された塩を、彼女は礼も言わずに受け取る。

「まったく、何でこんなに味が薄いんだい？　ほとんど味がしないじゃないか」

そういつて彼女は料理に盛大に塩を振りかける。

「そうか？　いつもこんなだぞ？」

フォローのつもりか、よせばいいのにロッドが空気を読まずにぼそりと呟いた。

「なんだって？　ルーチェ、あんたはいつもロッドにこんなものを食べさせているのかい？　かわいそうに、ロッド。いつもこんな水煮みたいなものを食べさせられて。こんなことならいっそう、アタシが毎日作りに来てやろうかしら」

自分が言われている訳ではないのに、鵜はそれを聞いているだけでテーブルをひっくり返してやりたい衝動に駆られる。

「お気遣いありがとうございます、お義母様。でも、お義母様のお手を煩わせるわけにはいきませんから」

そう言うルーチェの声が心なしか硬い。

というか、この会話のせいで部屋の空気がギスギスしている。その時、玄関の扉をたたく音がした。

出てみると、村長ことエイルナー家の長男、イデウスである。

「遅いぞ、イディ」

ロッドが声を潜めて兄をののしった。

「まあ、そういうな。ミリーを宥めるのに手間取ったんだ」

ミリーというのは愛称で、本名ミリア・エイルナーは、村長の妻である。

「迎えに来たぜ、お袋。子どもたちが心配してる。ミリーも反省してるから、一緒に帰ろうぜ」

「嫌だね。せっかくアタシもたまには羽を伸ばそうと思ったのに、今帰ったらまた同じコトの繰り返しじゃないか。アタシは当分ここにいるからね」

「頼むよ、お袋。いい加減に機嫌を直してくれ。あれはお袋も言い過ぎだって。ミリーが怒鳴りたくもなるさ」

しかし村長の説得にも、彼女は耳を貸そうとしない。

「あの、家はいくら泊まっていたいただいても結構ですよ？」

「いやいや、ルーチェ。あんたに世話を掛ける訳にはいかねえよ。なんとしてでもお袋を連れて帰るから」

ルーチェの申し出に、村長は首を振る。

何があったのかは知らないが、鵜が首を突っ込める様子ではない。仮に突っ込もうとしたところで、やんわりとルーチェに押しとどめられるのが関の山だろう。

そもそも、ここで鵜が首を突っ込んだら、ますますルーチェの立場が悪くなる。

村長が説得を繰り返すこと数十分。彼らの母親は、やっと息子と共に家に帰ることを承諾した。

「世話を掛けて悪かったな。またウチにも遊びに来てくれや。おやすみ」

「ああ。義姉貴にもよろしく」

二人が帰った後には、家の中には重苦しい疲労感が漂う。かくして、ルーチェが。

「私、ミリア様を心から尊敬いたします」

椅子に力なく座りこみながら、しみじみと呟いたのだった。

S e c t . 4 被災地、エイルナー家次男宅（後書き）

S e c t . 2 6 に続き、エイルナー家の災難シリーズ、とても言いましょうか。

だらだらと書いていたら、娘と父親の関係、そして嫁と姑の関係が妙にリアルな展開になりました。

いくら強いとはいえ、ルーチエはエイルナー家のお嫁さんなんですよね……

息子のフォローは全然フォローになってないし……

姑爆弾が炸裂した回でした。

Sect. 5

衝撃に打ちのめされる現実

一月。

本来ならば真冬もいいところ、日本であれば東日本はまだ盛大に雪が降っている時期である。

しかし、南方にほど近い位置にあるセタ村は、すでに春を指折りに数えていた。

「あつたけくな」

外はまだ冷えるが日差しが暖かいため、鵜はリビングの窓辺に座つてのんびりと日向ぼっこをしていた。

足元には、夕食に使われる予定の豆と莢が、籠に分けて置いてある。

やるべきことも済んで暇なのである。

ルーチェは近くの井戸まで洗濯に、ロッドは畑に種をまきに行つた。

家の中はきれいに整頓されている。

アスファルトとコンクリートで固められたビルの間より、石の壁に木の家具の家というのは、何となく心が落ち着くものである。

下手に手を加えていない、天然素材のもののみで造られているからだろうか。

気持ち良すぎてこのまま寝入ってしまいそうだ。

ところが、この陽ざしを暖かいと感じるのは鵜とルーチェだけのようで、ロッドやほかの村人にとってはまだまだ寒いらしい。

鵜はもともと寒さに強いうえに、日本では毎年冬になると雪が数十センチは積もるような土地に住んでいた。

ルーチェは東方でも北のほうの生まれだ。

在軍時代、東北に異動になったときに一番寒さが身にこたえた、ロッドは言う。

村人よりも薄着で外を出歩いていたら、ユキに見つかって信じられないと首を振られた。

ついでにイレイオはというと、少し前まではよほどのことがない限り、極力家から出ようとしなかった。

生まれ育った気候や体質で、ここまで違うものであると、改めて感心したものである。

などとぼんやり考えていたら窓の外を、桶を片手に、肩に鍬を担いだロッドが通り過ぎた。

外を見ると日が傾きかけている。

どうも考え事をしながら半寝状態だったらしい。

あわてて立ち上がって、足元の籠を片づけ始める。

ちようどロッドが桶を持って入ってきた。

「おかえり。ルーチェは？」

「ただいま。さっき、グリーンとこの三男が屋根から落ちたとかで、すっ飛んでったよ」

「屋根から落ちたって……何してたんだよ」

「昨日の突風で屋根が壊れたんだと。その修理だろ。親父と兄貴たちと一緒に登ってたみたいだがあのガタイだ、大方、屋根板を踏み抜いたんだろうさ」

グリーの三男は、兄弟の中で最も体格がいい。年頃は、見た目ロッドと同じか少し下くらい。

「じゃあ、ルーチェはしばらく戻ってこないな」

今晚の昼食は確か麺物のはず。

あらかじめ下準備はしてあったので、それくらいなら鵜にも作れる。

いそいそと食事の準備を始める鵜の後ろで、ロッドは鉄板とペンチなどの道具を出し始めた。

鉄板を加工して置物や装飾品などを作り、できたものは月一で村に来る商人に売って、盗族業の副収入にする。

ロッドの趣味の一つでもある。

鵜は今、肩より長く延びた髪を後ろで一つにまとめ、彫刻を施されたバレッタで止めているが、このバレッタもロッドが作ってくれたものだ。

派手なものではないが、素朴なデザインで結構気に入っている。

一応、元の世界では昼間は仕事でいない母親の代わりに家事をすることが多かったため、家事は一通り出来る。

料理も、複雑なものではなければある程度はこなせる。

乾麺を茹で、適当に切った野菜などの具を乗せれば完成。

見た目はラーメンに煮ているが、味はどちらかと言うとうどんに近い。

正式な料理名は知らない。

「お前、ここに来てどれくらいになる？」

野菜を切っている鵜の背中に向かって、突然ロッドが声を掛けた。

「どれくらいだっけ？ 一年ちよつと、くらいだと思う。秋祭りの直前だっただろう。あたしは寝込んで参加してないけど」

鵜は振り向かずには答える。

「……そうか、もうそんなになるのか」

ロッドが感慨深げに呟く。

「感謝してるんだぜ？　ロッドたちがこの村に置いてくれなかったら、あたしは右も左も分からないこの奇妙な世界で、路頭に迷ってのたれ死にしてたんだから」

「元の世界に帰りたいとは思わないのか？」

「さあ、どうだろうな。元の世界であたしはこういう扱いになってるかは知らねえけど、今更帰ったところで大騒ぎになるのは目に見えてるし。何より、こっちの生活の方が充実してるから、元の世界に帰っても退屈でしかたないんじゃないかな」

「親が心配してるんじゃないのか？」

鵜は野菜を切る手を止めて振り返った。

ロッドはこちらに視線を向けることなく、黙々と作業に没頭している。

諦めて、切った野菜をまとめて鍋にぶち込んだ。

「ロッドに言っただけじゃなかったっけ？　あたし、親に虐待されて育ったんだ」

ふいに、今まで途切れることなく続いていた金属音が止んだ。

ロッドがこちらを見ているのが分かる。

「虐待つつつても、殴る蹴るとかそんなじゃなくて、精神的なヤツ。ウチ、父親が居なくて、あたしがちっちゃいころからずっと

シングルマザーだったんだ。それでたぶん、母あの人さんの結構まいつてたんだと思う。ずーっと、顔を合わすたびに二言目には『死ね』って、そればかり言われて育ってきた。あ、言っとくけど別に悲観してるわけじゃねえんだぜ？　ただ、それが原因で一時期かなり荒れててなあ。運良く、親身になって話を聞いてくれて、その上正しい方に背中を押してくれる人に出会えたからなんとか厚生でできたけど、その人が居なかったらあたしは今頃、厚生施設に入れられて雁字搦めになってたと思うぜ？」

鵜は手を休めずに言う。

具を煮込みつつ、麺を茹でる準備を始める。

ちらりとロッドの方を見ると、彼は顎に手を当ててなにやら真剣に考え込んでいた。

「あんまり自慢できるようなコトじゃねえよ。気にしないでくれ。でも何で今頃？」

見なかったふりをして調理を再開する。

するとロッドは、長く深く息を吐き出して話し始めた。

「今更こう言うのもなんだが、お前、やっぱり元の世界に戻った方が良いと思う」

鵜は一瞬ドキリとしたが、あえて表に出さずに軽く肩をすくめるにとどまる。

「本当に今更だな。急にどうしたんだ？　やっぱりあたしは邪魔か？　まあ、当然だよな。一応、役所に目え付けられてる身でもあるし、この村にとってもあたしはいつまでたってもよそ者でしかねえしな。むしろ今まで無事だったのが奇跡って言うか……」

「違う、そうじゃない！」

鵜の話、ロッドは強い調子で遮った。

「あ……いや。確かに、それも一理ある。だが、そうじゃない」

「じゃあ、どういう意味だよ」

鵜はテーブルに碗を並べながら言う。

しかしロッドは答えようとしない。

どう切り出すかを迷っている様子だった。

ようやく話したのは、昼食を食べ始めたころだ。

「確かにお前の言うとおり、以前よりも役所の動きがあらさまになってきている。前とは違って、もうお前を探してるってことを隠そうともししていない。正直、これ以上お前をこの村で匿い続けるのは限界だ。だがそれ以上に、俺はお前の体のほうが心配なんだ」

「体？」

鵜は眉根を寄せて、胡乱氣に聞き返す。

「最近、お前が時々酷くつらそうにしているのを見る。顔色も悪い。知らないとも思ってたのか？」

彼に指摘されて、鵜は先ほどとは違った意味でドキリとした。

確かに彼の言うとおり、ここ最近どうも体調がすぐれない。

実は去年の秋祭のころから時折、原因不明の頭痛に悩まされるようになった。

つらいのは一瞬だけで、しばらくたてばすぐに収まるので、あえて二人には相談しなかった。

そんなことで心配をかけたくはなかったからだ。

「何かの病気を疑ったりもしたが、思えばお前は、《神界》^{ゴッド}に来るのに正規の方法^{ルート}を通ってきていないんだ。ただでさえ危険な異界^{トリ}渡りを、お前は身一つで行っている。違法な異界渡りが危険だと言われているのは、何も死亡率が高いだけが原因じゃねえ。言わば裏技的な方法が、どんな副作用をもたらしてもおかしくねえからだ。こう言っちゃあ何だが、お前のその髪や瞳の色が変わったのも、その副作用かもしれねえ」

愕然とする。そうするより他はない。

この一年、あの大仕事の一件以外は、カルチャーショックに悩まされながらも、極めて平凡に過ごしてきたつもりだ。

ここにきて体調を崩すようになったのも、元の世界と違う習慣や風習、気候に体が戸惑っているからだと思っていた。

だからしばらく経てば慣れると思っていたのに。

「すまねえ」

ロッドが唸るようにつぶやいた。

もとはと言えば、彼のせいでもある。

しかし鵜に彼を責める意思はない。

むしろ感謝すらしているというのに。

どうにも気分が悪くて、目の前にある食べかけの伸びきった麺を、どうしても食べる気にはなれなかった。

S e c t. 5 衝撃に打ちのめされる現実（後書き）

やれやれ、です。

ようやく一歩踏み出してくれました。

第二部に入ってから、明らかに文体が変わったなあ……
続きます。

Sect. 5

非情な現実、異様な変質

「中央に行くんだ」

ロッドは言う。

ルーチェもすでに帰宅し、夕食も済んだ後の席である。

どうやらルーチェは事前に聞かされていたらしい。

話が始まるや否や、神妙な面持ちで黙り込んでいた。

「中央？ 敵陣の真つただ中じゃねえか」

鵜が元の世界に帰るためには、来たときとは反対に、どうにかして正規のルートを通らなければならない。

そのためには役所の協力が不可欠なのだが、その役所に狙われている以上、おいそれと姿を現すわけにもいかない。

今のところ、どうして役人たちが鵜を探しているのかはわかっていない。

何度かグリーが探りを入れてくれているらしいが、一向に手掛かりを得られないでいる。

信用がないために、簡単に頼るわけにもいかない。

「民耳庁という役所がある。中央の宰相がトップを務める統官府直属の機関で、文字通り民の耳となって政治に彼らの意見を反映させ、いざとなれば神皇代を更迭するほどの権限を持っている。支部はあちこちにあるし、もちろんこの東方にもあるんだが、東護殿に抱き込まれている可能性があるから、いまいち信用ならない」

神皇代は地方守護神殿の長官であり、実質の各地方のリーダーでもある。

今の神皇代は20年前に就任して以来、いまいち薄黒い噂が尽きない。

それなりに人気もあつて決定的な証拠が出ないために、中央も異動を渋っているという。

職務の性質上、一度就任してしまうとよほどのことがない限り異動がないため、最高で93年間も務めた者もいる。

有事はその神皇代すら脅かすほどの官位と権限を与えられているにもかかわらず、現在の民耳庁東方支部は、東護殿に買収されてしまったという噂が立っている。

真偽のほどは定かではないが、用心に越したことはない。

それに、鵜を探しているのは東護殿に属する者たちだ。

一応中央政府が四方を統括するという形をとってはいるが、実際はそれぞれの役所は独立している。

東がだめなら中央へ、という理屈である。

「普通に行けば、中央へは馬で二ヶ月半つてとこだが、多分あつちこつちの検問やら関門で引っ掛かるだろうから、まあ、多く見積もって五カ月弱つてとこか」

地図を見ながら、ロッドは次々と計画を立てていく。

この世界の地図は少し変わっていて、四角ではなく丸で描かれている上に、いちばん外側の境界線がはっきりしない。

今、鵜たちが立っている大地以外に陸地は存在しないらしく、地図に描かれているのは丸い大陸が一つきりである。

大地の外側はろくに探查が行われておらず、ただ霧に覆われていることから“霧海”と呼ばれていた。

海といっても海水があるわけではなく、ただ下方向から霧が立ち込めているというだけである。

一応、海産物なども獲れるらしい。

霧中を泳ぐ空中魚だ。

視界が利かないので、漁に出るときは命綱が必要不可欠であるとか。

「キオラさん」

ここで、今まで黙っていたルーチェが口を開いた。

「今更とは思いますが、キオラさんの意見を聞かせていただけないか？」

ロッドがギョツとしたように声を上げた。

「ルーチェ、何を言い出すんだ！」

「だってアーロッド様。今まで私たちだけですべての話を進めてしまつて、キオラさんには一言も相談していません。キオラさん自身のことなのに、本人の意思はどうなるんです？」

「ルーチェ。これはもう本人だけの問題じゃあなくなってる。下手をすりゃこの村をも巻き込みかねえんだ！」

「でも、今ここで一番悩んでいるのはキオラさんでは？」

「お前の気持もわかるが、同情だけではもっと多くの犠牲者を出すだけだ！」

「犠牲者とはどういうことです。いったい何が私たちに危害を加えるというのですか！ アーロッド様、貴方は近頃イレイオ殿とな

にやら内緒のお話をなさっていらつしやるようですけれど、いったい何をお話しなさっているのですか？ キオラさんのことと何か関係が？」

ルーチェの口調が、まるでロッドの浮気を糾弾しているように聞こえたので（実際は絶対にあり得ないことだろうが）、鵜は思わず口を挟まずにはいられなかった。

「あのさ、本人目の前にして夫婦喧嘩はやめてくれねえかな？」

さして大きな声ではなかったが、その一言で二人の口論がピタリとやんだ。

「あたしの意見、だったよな？ 悪いけど、少し時間がほしいんだ。頭がこんがらがってて、うまく纏めきれてない。今夜一晩、ゆっくり考えさせてほしいんだけど、いいかな？」

ルーチェがきまる悪そうに頷いた。

鵜は立ちあがり、二人に断って部屋に戻った。

部屋の扉を閉める際、ちらりと二人を見ると、どうにも気まずい空気が流れていた。

鵜は心のうちで二人に謝りながら部屋の戸を閉めた。

思えば最初から不審な点が多すぎたのだ。

整理してみると、疑問はいくつもある。

まず一つ。どうして鵜はこの《神界》に召喚されたのか。

ロッドとカエルとの間に交わされた取引の結果だという話だが、取引の内容までは聞いていない。

二つ目。持っていた荷物はどこに行ったのか。

鵜が《神界》に召喚されたのは、学校帰りのことだった。

にもかかわらず、白亜の砂漠で鵜はロッドの言うとおおり、身一つで突っ立っていた。

通学に使っていたカバンはおろか、カバンの中にあつた財布や携帯、教科書や筆記用具その他諸々一切合財なにも持っていなかった。身に着けていたものと言え、来ていた制服とその下に着けていたアクセサリーぐらいである。

それらは畳んで、纏めて部屋の抽斗の奥にしまつてある。

三つ目。髪や瞳、肌の色が変わってしまったのはなぜか。

ロッド曰く、強制的な違法召喚術による副作用、とのことだったが、又ロッド曰く、灰色の髪や星の入った瞳、真っ白い肌は北方人に多いという。

《地上の民》である鵜が、この世界の住人と同じ特徴を持っているのはなぜか。

四つ目。今までなんの兆候もなかったにもかかわらず、《神界》に来て《言語理解能力》を覚醒させ、そしてあのカエルは始めから鵜が《言語理解能力者》であることを知っていた。なぜなのか。

最後に。なぜ役人たちは鵜を探しているのか。

《地上》に送り返すことが目的ではないだろうとグリーは言う。可能性として最も高いとされるのが、《言語理解能力》研究のための実験台。

しかし、それにしては様子がおかしい。

始めは秘密裏に行っていた搜索活動を、最近では堂々と手配書まで出回っているという。

なぜそこまでして、血眼になってまで鵜を探しているのか。

考えれば考えるほどは迷宮の奥へと彷徨い込んでいき、回答が得られない。

ベッドの端に腰掛け、頭を抱え込んで長々と溜息をついた。

昼食の頃から始まっていた鈍い頭痛は、拍動痛となって意識を散

らせる。

集中できない。

自棄^{ヤケ}になって髪をまとめていたバレッタをむしり取るように外し、ベッドに大の字に倒れ込んだ。

寝返りを打って目を閉じる。

鈍痛の拍動に合わせて、瞼の裏で星が瞬いた。

不快さに眉根を寄せるが、だからといって治るものでもない。

うつすらと目を開けて真っ先に目に飛び込んでくるのは、部屋に備え付けのクローゼットである。

着替えと、わずかな私物のみしか入っていない。

《地上》にいた頃とは大違いである。

あの頃は、やれ流行の服だ化粧品だアクセサリーだと、部屋の収納に収まり切らなくて高校入学と同時に随分捨てたのだった。

ところが今では、必要最低限の物しか持っていないし欲しいとも思わない。

周囲に影響されていたのだろう。今の状況もその結果だ。

鵜は起き上がってクローゼットに歩み寄り、一番下の抽斗を開けた。

底で眠っているのは、鵜が《神界》に来たばかりの時に着ていた制服である。

黒のブレザーとグレーのチェックのプリーツスカートが、今では酷く無機質な物に感じる。

かき分けていくと、制服に埋もれるようにして白いペンダントが現れた。

これも《神界》に来たばかりの時に、鵜が身につけていた物である。

楕円形のムーンストーンのパendantは、鵜が七歳の誕生日に母親から贈られた物だった。

このペンダントに関する思い出にあの母親が関わっているのは業腹だったが、石から放たれる独特の輝きが鵜を引きつけて止まない。

気がつく、一番使用頻度の高いアクセサリーに分類されていた。荒れた気分の時にこのペンダントを眺めると、不思議と心が落ち着いたものだ。
だがしかし。

「なんだ、これ」

鵜は、掌にすくい上げたペンダントを見つめて呆然と呟いた。
本来、柔らかでありながらどこか硬質な青白い輝きを放つムーンストーンが、今では白く濁ったただの石になっていた。
よく見ると、細かいヒビが幾筋も走っている。
明かりに透かしてみたり、裏返してみたり、ためすがめつしてみるのが、現実には非情だった。

「石が、死んだ」

ぽつりと、口について言葉が飛び出した。
一瞬で我に返り、その内容の異様さに、口元に手を添えて顔をしかめる。

この輝きが失われてしまったのはいつだろう。
少なくとも一年前に制服と一緒に片付けた時は、石はまだ燦然と輝いていた。

輝きを保つために、何か特殊なことが必要だとも思えない。
しかしこの時になって、ふと思いついたことがある。
思い出したことが奇跡に思えるほど、記憶の片隅にあって朧気なことだった。

去年の大仕事が終わって少し後のことである。

鵜は奇妙な夢を見た。

元の世界の自分の部屋にいる夢だ。
いつものように朝起きて、学校に行こうとした時である。

玄関の扉の内側に掛かっている鏡に、自分の他に得体の知れない男の影が映った。

その人物は鵜の名を呟きながら、ずっと何かを指差していた。鵜の胸元である。

それはつまり、このペンダントを差していたのではないか？

それなりに粒も大きいため、服に合わせて付けるのが大変だったペンダントだ。

付けるのはもっばら、制服の下だった。

ペンダントの石が曇ってしまったのは、彼が夢の中で指差していたからだとしか考えられない。

ではあの男の正体は何かというと、実はこれもハッキリしない。謎がまた一つ増えた。

ペンダントを握りしめた拳に額を押しつけ、鵜はまたしても重く沈痛な溜息をついたのだった。

S e c t. 5 非情な現実、異様な変質（後書き）

第二步を踏み出しました。

本来に、ここに来てやっと物語のスタート地点に立ったような感じがします。

伏線を回収できるようになってきた現状を大いに楽しんでおります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3267q/>

Gravity×Thrush ～東の地に降り立った鳥～

2011年12月25日21時47分発行